海外新潮　英國は日本を賣れり　列國仲裁の進行

中央公論

第二十年第二號

概目

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行　明治卅八年二月一日

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金五十錢　郵稅四錢

本書は世人の常に必要を感じて未だ出版せられざりしものなり。その世に行はるる年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照捜索に便利なり

本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用とを主眼とし、なるべく普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け其配列には我社は特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は此書の出版に由りて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らす世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尚各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり、敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
反省社
電話下谷九百十九番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文庫

趣味　清新　材料　豐富

＊二月一日發行　第二十八號 第二卷　揭載要目＊

本誌生れて茲に十有七年歷史は長く基礎は堅く最多く青年に愛讀せられ未知名文人の紹介を任として文壇獨步の位置を占む今の名家にして曾て一度本誌の寄稿家たりし者亦甚だ多し殊に本號は春季增刊として材料を精選し噴火山的活氣に富みて奇趣橫生す要目左の如し

波姑爾乃夜麻　烏水
箱根山業の最高點神山及駒ヶ嶽に登る記

明治文壇側面史　一記者
少年文庫時代を詳悉して十年前の文壇に入る事蓄而談新

我見たる伯林府　啼血
歐洲の新大强國と日東の日出强國との關係如何

病床録　白涙
西の病詩人東の病詩人を思ふ一字一涙の煩悶曲、痛側骨を刺す

昨年の文庫詩壇　醉茗
文庫派詩人の月旦也消長史也妍醜掌を指す如く一目明白

本號の詩

△吾唇は燥りて（花守）△懷舊（山百合）諸兄の少年園沿革談を讀みて △磨針峠に立ちて（胡夷）△追はれし詩人（東村）△春意（醉茗）△鄙の曲（蘆風）△山靈湖神（茜江）雪の夜（白雨）

行軍待合室　浮草
戰史の內側スケッチ也平和史の外面一瞥記也

報恩講日記　大覺
繰らゝ諂てよ妾も就けよ皆朗らかに合唱せよかし

神經過敏日記　可愛生
精描細寫をきはめて病人親ら心理學の一片を仕方話に講義する如し

會見記　萍水
男女配偶前の見合ひは普通事なれど如斯深刻の自叙傳は此作者にして始めて得千古の名作ウェルテル悲嘆の中より更に

哀歌　田中紫紅
永世の絕品を抄譯せるもの

風流筑波會　山崎紫紅
獺次喜多劇は成田屋音羽屋も之を演ぜり是は即ち明治新滕栗毛

定價　一冊金拾五錢、六冊前金郵稅共九拾錢、十二冊前金郵稅共壹圓六拾八錢
一ヶ年（定期增刊四回共十六冊）前金郵稅共貳圓廿四錢見本郵劵代用拾貳錢

版元　東京本郷駒込西片町十番地　內外出版協會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本誌は信仰問題の曉鐘也

求道

毎月一回發行
定價一部拾錢
半年分六十錢
一年前金壹圓十錢
郵稅一部五厘

剴切なる人生の指導者也

第二卷第一號
二月一日發行

東京本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所

文學士近角常觀序
百目木劍虹著

信仰生活

袖珍美本
定價貳拾錢
郵稅貳錢

人生は闇なり。迷なり、迷なるゆゑ、そこに悟あり、闇なるゆゑ、そこに光を見るにあらずや。吾等は迷ひつゝ悟る也、悟りつゝ悩むもの也。迷悟もと二あるにあらず、煩悩菩提一なりと知らずや。これ宗教的經驗を經たるものにあらずんば個中の眞味を語るに足らざる也。

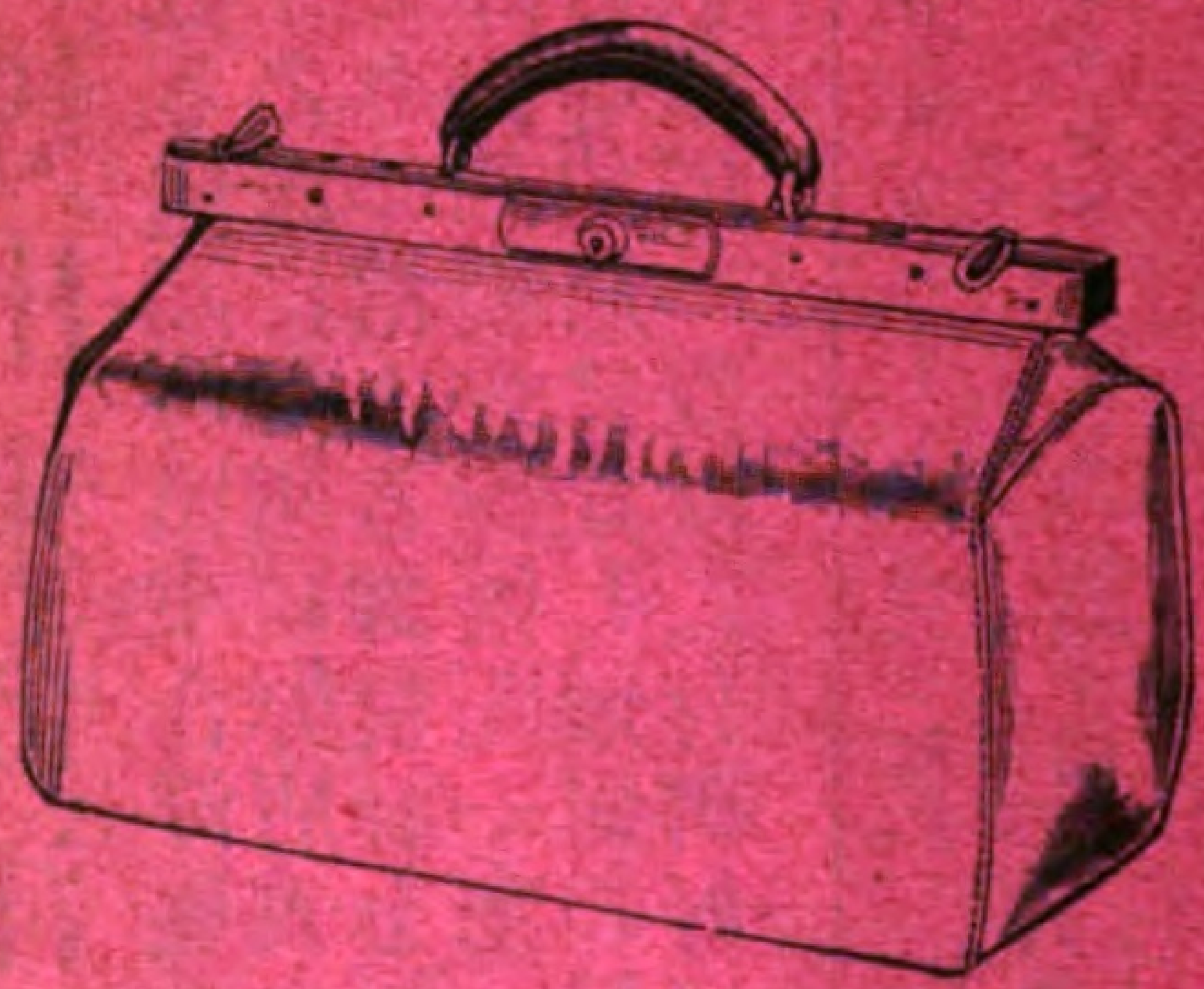
『信仰生活』の一篇正さに是也。實驗の士は底深く穿かたれぬ、懺悔の泉は淸らかなり也。苟も信仰の渴を醫せむとするもの來りて清泉の流を汲め。

發兌元　東京市本郷四丁目五番地　文明堂
賣捌所　東京市本郷森川町一番地　求道發行所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

最新流行

GOOD AS GOLD





世界有名ノ大戰ニ數度ノ經驗ヲ有シ今回我軍ニ隨ヘル外國從軍武官及記者團體ハ戰地ヘ發スルニ際シ從軍ニ尤モ必用ナル靴鞄外革製品寢臺一切ノ調度種々實地調査ノ上弊店ヘ一任セラレタリ今日ノ事アルヲ豫期シテ専心研究セル結果ノ爰ニ到レルハ亦偏ニ弊店ノ光榮トスル處ナリ

東京京橋

合資會社 トモエヤ

電話（本局一一橋 番新一五）

高等出來合洋服販賣廣告

歐米各國到る處高等出來合洋服を以て需用者の八九を占むるは既に江湖の了知する處に御座候弊店義之に倣ひ昨年來當所に於て開業仕候處愛顧諸彥より非常なる御賛辭を賜り陸續御注文被仰付候段奉鳴謝候本年は殊に澤山調製致置候間一應御來店の上地質の精選裁縫の巧妙及び價の廉なる等他店に比し幾何の勉强致居候哉を御一覧被成下度尚地質も珍柄多數取揃へ置候に付御好に應じ出來合直段に準じ調製可仕候

定價表

品名		價格
フロックコート	三ツ揃	二十圓ゟ三十五圓迄
モーニングコート	三ツ揃	十六圓五十錢ゟ二十五圓迄
背廣	三ツ揃	十一圓ゟ二十二圓迄
オーバコート	一枚	九圓ゟ十七圓迄
インバネス	一枚	九圓ゟ十八圓迄
トンビ	一枚	十一圓ゟ二十五圓迄
吾妻コート	一枚	十圓ゟ十四圓迄

但し現金にて一切掛引なし

尚地方の御方より御注文の節は御一報次第完全なる寸法雛形御送付可申上候

御注文

洋服廉價裁縫店

東京市京橋區南大工町一番地（鍛冶橋外北へ寄角）

米田屋支店

電話新橋一一二四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



MAN READING

BY

PUVIS DE CHAVANNES

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論第二十年第二號目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論

第二十年
第二號



東西の武士道及び婦道

旅順口降伏によつて、其の主將ステッセル將軍以下の一度俘虜となつて我が國に來れる事實を視て、吾人の著るしく感知せるは、彼我の武士道と婦道とに於て多くの相違あると是れ也

其の祖國のため、君主のため防戰する場合に於て、城を枕にして討死すといふは我が武士道也、然り、降伏は日本武人の最大恥辱とする處也。

假令降伏するも、刀折れ矢盡き、軍卒殘り少なとなりし時に限る、尙ほ五百の大砲と八万の砲彈と二万餘の大兵あるに方りて降るが如きは、我が武士道斷じて之を容さず、蓋し其の武器兵員如何に多きも、敵の勢力强大にして到底相角せざるを視るや、直ちに降伏するは白人の常也、彼等は計算に明かにして利害に敏也、我が武士道は然らず、假令利害計算に於て非なると明白なるも、尙ほ戰ひ能ふ限り戰ふ、意氣と名譽と重くして利害計算甚だ輕ければ也、白人より視ば日本人は正に愚なるべし、然れども此の愚永く守らざる可らざる也

假令主將降伏するとあるも、其の士卒を活さんため、主將自盡して士卒に代るを例とす、大將の首級を敵の軍門に贈つて士卒の命乞ひをすると亦一の作法たり

ステッセル將軍等が世界無比の要塞に據りて半歲の久しき我が軍に抗拒したるは素より勇敢の至なるべし、武人としては素より名譽なるべし、吾人は單に此り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

點に於て彼れを尊敬す、我が　皇が聖勅を發して彼れに武士道の名譽を保たしむべく希望し給へるも、單に此の點にあるべしと恐察す、而して我が乃木將軍以下が嘖々彼等を稱するも亦單に此の點にあるべしと信ず

敵將校夫人等の旅順口内に於ける擧動は、賞揚すべきもの多し。殊にステッセル夫人が日々陣伍の間を巡りて、士卒を慰撫し、士氣を鼓舞作興したるが如きは、粥を煮て侍女等と之を行伍の間に配與したる我が昔の武家の妻女と齊しく、一般婦人の鑑とすべきもの也

然れども新聞紙の報によれば、ステッセル將軍俘虜として日本に停まるべきや否やの議あるや、夫人は「士卒と共に日本に殘るも一理あれども、旅順に守備兵の三分の二既に戰死せり、我等は宜しく歸りて其の父兄に謝せざる可らず、毀譽褒貶は國論に依て決せん」と曰ひ、竟にステッセル將軍をして宣誓歸國に決せしめたりといふ、此の一事頗ぶる我が婦道と違ふ

我が婦人は、城を枕にして戰死する夫に殉するを以て貞節とす、然らずんば夫をして勗めて義を立てしむるを貴ぶ、戰死者の父兄に謝するため歸國すといふも、戰死者の父兄は果して之を悦ぶべきか、我が日本武士の婦道としては、斯る場合に夫を勸めて、士卒と共に俘虜として留まり、飽まで活ける士卒と辛苦を倶に共にせんことを主張すべし、而して國論も亦之を賞すべし、既に敵軍の不利となる一切の行爲に出でず其の戰鬪にも、參加せざることを宣誓せる以上、軍人として本國に歸るも其の君民のため何の益する所あらざらん、既に然らば、留まりて士卒と異郷の苦樂を頒つこそ、寧ろ當然の措置ならめ、我が日本婦人ならば必らず斯く勸むべし、而して吾人は之を貞婦と稱せん

東西、國異にして習俗異なりと雖も、彼と我と、武士道婦道頗ぶる逕庭あるが如し此の相違は明白に之を看取するを要す、而して我れは飽までも我が武士道と婦道とを守持して、益々之を砥礪すべし、吾人は實に斯く希望し、且つ斯く主張す、新聞紙上嘖々としてステッセル夫妻を稱するを見て、悉く之を悦ぶは吾人其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の可なるを信ずる能はず

旅順口降服

新年早々齎らされし旅順口降伏の報道は、啻だに我が日本に大なる感激を與へたるのみならず、實に歐米列國を感動せしめたり、我か國民の感激したるは、實に十年の舊怨始めて酬いたれば也、生蠻を殺すと數萬多大なる價を拂ふて竟に十年の宿仇を復し得たれば也、露國の東洋に有する大野心の一半（少くも）を取挫ぎ得たれば也、而して列國の感動せるは、強露の威名頗る減却せられたるを以て也

（一）露國が東洋併呑の志を懷くや久し、其の黒龍江を下りて遠征し、竟に西伯利亞全土を得、浦鹽斯德に頭角を出すや、其の火の如き野心の炎は益す燃えぬ、彼は徳川幕府が内外多事に忙殺さるゝに方りて、早くも對馬を占領して日本海を自家の腰甕と爲さんとして果さゞりしも、尚ほ巧みに辯口と威嚇とを以て樺太を占有せり、爾來韓國を席捲して日本を威壓せんとする茲に年あり、日本は實に彼の壓迫に依て私かに息苦しきを感ぜざると能はざりき

（二）日本が廿七八年役の効果として、遼東半島を領有するの約を淸國と締するや、露國は佛獨兩國を聯ねて突如日本に忠告して曰く貴國が遼東を領有せらるゝとは東洋永遠の平和に害あり、敢て之を還附されんとを忠告すと、三國艦隊を聯合して、日本若し否といはゞ、直ちに砲火を開くの態度を以て我に臨めり、我れ不幸にして力相較せず、且つ東洋の平和に眷々たるがため、忍んで其の忠告に從ふや、彼の新聞紙は皆一齊に日本の降伏と號し、佛國新聞と相唱和して以て我れを嘲けれり、血あるもの如何ぞ熱沸せざらんや、我が官民は實に臥薪嘗膽を絶叫し、其の絶叫せざるものは深く肝に銘して唇を嚙みぬ

（三）二十八年我が對韓外交の失敗するや、露國は直ちに韓廷の君臣を籠蓋して忽然日本の勢力を半島より驅逐せんとしたりき、彼れ半島に幾何の住民を有する

に非ず、半島と幾何の歷史的關係を有するに非ず、半島と幾何の通商貿易を有するに非ずして、勢威を半島の全面に伸張し、將さに半島を併吞せんとする機微を現はしたりき、開國以來半島と深く且密なる歷史的關係を有する我が國民如何ぞ膓廻り血沸くを禁じ得んや、而かも形勢の非なるがため、國民皆慘として息を呑めり

（四）明治三十年獨逸が膠州灣を清國より租借するや、露國艦隊は其の十二月十八日を以て旅順口を占有して直ちに淸廷に租借の交涉を開き、翌卅一年三月廿七日を以て旅順口大連灣租借の條約を結び、五月廿八日には露國軍隊早くも鷲章旗を黃金山頭早く南風に飜へしたりき、想へ、日本之を領有すれば東洋永遠の平和に害ありて、而して露國之を領有すれば則ち然らざる乎、扨も又其の局に對立せる我が國の面目如何ぞや、我が四千萬の國民は、此の事實を視て齊しく熱鐵を飲むの感ありき、齊しく寸膓九裂の心地したりき、而かも形勢尙ほ非なるがため、皆慘として手を握り詰めたるのみ

（五）露國の傍若無人なる、單に旅順口大連灣の領有に滿足せず、其の領土西伯利亞より陸路旅大に連絡するの土地を獲得せんと欲し、旅順口の一點に其の針を挿して直ちに西伯利亞まで一條の墨繩を曳きて、意のまゝに滿州を占領せり、少しく詳かにいへば、明治廿九年のカシニー條約によりて東淸鐵道の布設權を得、三十三年の北淸事變には、淸兵がブラゴヴエチエンスクに於て少しく敵對行爲を做したるを口實とし、兵を以て淸兵を驅逐し、奉天、遼陽、海城、營口等を占領し、且つ急速に東淸鐵道を布設し、其の沿線の土地を領有して哈爾賓を中心とし、奉天、靑泥窪を一等地とし、遼陽を二等地として盛に經營を進め、純然たる露國領土に同化せんとし、公然滿州を掠奪したり、旦夕此の事實を視たる我が國民如何ぞ骨鳴り肉躍らざらんや

（六）露國は尙ほ靑泥窪に壯大なる施設を爲すと共に、旅順口の防備を戒飭して金城鐵壁と爲し、玆に海

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

軍の精鋭を萃めて居然四方を傲睨し、日本が滿州撤兵を迫るや、侮弄至らざるなく、竟に韓國龍巖浦を占領して公々然日本を挑發し、日本をして强ひて戰端を開かざるを得ざらしめたり、十年薪に臥し膽を甞めたる我が國民も、玆に至つて最早忍ばんと欲して忍ぶ能はず、竟に砲火を以て彼と生死を決せんとするに至りしのみ

(七)幸ひに海陸の連戰連捷によりて、旅順口を孤立せしめ、精鋭を擢んでゝ之を攻圍し惡戰苦鬪を續くると半歲餘、生靈を損すると數萬、竟に之をして降伏せしめ、五十九の永久砲臺を占領し、五百餘門の大砲と十餘隻の大艦と、二万四千の將士を俘虜とす、十年の舊怨宿仇玆に至つて始めて酬ひたりといふべし

(八)旅順口の降伏は、啻だに露の大精力を擧げて經營したる世界無比の要塞を覆へしたるのみならずして、又實に露國海軍の精華を萃めたる太平洋艦隊を全滅したる也、語を換へていへば、露國の東洋に於ける大野心の凝結したる大塊を微塵に打碎き、且つ海上權を完全に領有したるもの也、少くも露國の東洋に於ける大野心の一半を挫ぎ、我れに加へられし壓迫を排除したるもの也、我が國民が期せずして快を叫び、手の舞ひ足の踏む所を知らざる洵に故ありと謂べし、而して列國の感動せる、亦素より其の處のみ

(九)旅順口降伏の結果は、戰局に一大轉進を覩んと必然也、露軍若し交戰の主たる目的を遂せんと欲せば、沙河より南進して遼陽を回復し、進んで旅順口を恢復せざる可らず、然れども是れ到底不可能也、假令歐露に二百萬の兵あるも、唯だ一線の西伯利亞鐵道を恃みて一萬露里の遠きより、其の人馬糧食軍器を輸すると素より人の得て能くする所にあらざれば也、彼れが滿州に輸し得たる兵力の最大限は五十万を出でず、精確にいへば殆んど三十万を超ゆる能はざるべし、而かも日本は海上權を確實に占有したるがため、輸送に些の障害なきのみならず、旅順の攻圍に用ゐたる精鋭を轉じて、悉く沙河の一線に集中せる露軍に向はしむるを得べく、若し更に內國の守備を減じて之を戰線に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

繰出さんか、七十萬の大軍指呼に應じてクロパトキン將軍の陣を粉韲するに餘あるべし、故に旅順口降伏によりて露軍の到底勝算なきこと判知せられ、却つて全軍覆滅の危地に陷らんとする形勢明白に指示し得らる、即ち旅順口降伏の單に强露の威嚴失墜せるのみに非ず、歐米列國の痛く感動せる實に理ありと謂ふべし

（一〇）如上の事實が、日露兩國民に及ぼす精神上の影響の著大なるは多くいふを須ひざるべし、姑らく唯だ露國民の近狀に徵せよ、其の地方議會（ゼムストヴォース）の聯合會すら改革の必要をツアーに奏上し、莫斯科市民先づ率先して平和を唱へ、其の聲馨鐘の如く全露民間に響きて、今や幾万の勞働者すら戰爭中止の決議を爲すに至れり、彼の政府の拘束の至嚴なる新聞紙が、公然平和論を戰はすを視るも、亦趨勢の一斑を徵すべし

茲に於て吾人は天に感謝す、冥助は竟に義者の上にあることを、嗚呼豈獨り海陸軍の智勇に感激するのみならんや

武士道と歌

坂正臣

敷島の日本心は物言はで、目を驚かす山櫻花

といふ歌が有ッたと思ひます。作者は誰であッたか忘れました。本居宣長翁の歌を飜案したやうだが、何分にも、日本國民の特性を、よく說破して居る。日本國民は、理窟を言ふことは古來下手である。忠孝だの仁義禮智信だのと、しかつめらしい名を設けて、道德論を喋々するやうなことも無かッた。それは蒙昧な爲だ不學な爲だと、惡く言ふ人が有るかも知らぬが、さうでは無いので、實行に於ては、かの道德論を喋々する國民より、遙に勝れて居た。勉めてするでは無けれども、自然に、言に訥くして行に敏くある性質であります。證據は近く今日に在る。露國をこれ程までに遣付けやうとは、軍人みづからも豫想しなかッた。今となッて、吾と吾が力の勝れたるに驚いたと聞きます。是畢竟敵國のやうに、法螺を吹き立てる者が無いからで、外交には鋭敏で無いとか、拙劣であるとかいふ弊も、これに伴ふのかは知りませぬが、何にしろ、男らしい國民で、敵國の如く辭令に巧なのは、孔子の所謂鮮矣仁

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でありませう。

萬葉集の歌に、

日本の國は神ながら言擧せぬ國

とよんであります。神ながらとは、神の御心をわが心として、又は神代の習慣のまゝに、といふ位の事。ことあげせぬとは、揚言又は議論といふ程の意であります。この歌は人丸あたりの人だッたかと思ひますが、世に普く言ひならして居ることを、取ッて句にしたやうに見える。口は無調法でありますれど、肝腎の實行は乾度立派にして見せる。是が即武士道の第一元素であらうと思ひます。詩歌は心の影響である。かくの如き國民の歌が、武士道を表顯して居るか居らぬかと、問題を出すのは野暮であります。この征露戰役が興ッてから昨今までに、わが海陸軍人諸氏が、武士道的精神をうたッたものばかりでも、もはや大へんな數がありませう。その以前の征淸役にも多くありませう。維新のころにも澤山なやうで、それよりずッと昔へさかのぼッて、戰國といふ時代にも、人をして感奮興起せしむる歌が往々有る。しかし武士道といふものが、必しも鎌倉幕府、即武門武士といふ者の、出來た以來にさかんになッた物では無いことを明にする爲に、ずッと／＼ふるい時代の歌を、二三首左に掲げませう。まづ神武天皇が長髓彦をお討ちの時

みつみつし　久米の子らが　粟生には　香韮一もと　そねがもと　そねめ繫ぎて　うちてしやまむ」

みつみつし　久米の子らが　垣下に　栽ゑし蜀椒　口ひゞく　我は忘れじ　擊ちてし止まむ」

前後兩章共に、五の句までは序で、六七兩句に骨髓が有るのです。これを漫然と譯しますれば、勇敢なる久米部の軍人等が、屯田して培養する粟畠を見れば、臭氣有る韮が一株まじッて居る。この韮には、根もある、芽も有るが、其の根も芽も皆一括にして、殲滅させなければおかぬ。勇敢なる久米部の軍人等が、屯田して住まッて居る、假菴の垣根のもとに、山椒の木が植ゑてある。それの實を食べれば、辛くて唇の間は、唇がぴり／＼する。ぴり／＼して忘れられない通りに、我は又、御兄君五瀨命を、毒矢で射て薨ぜしめ奉りたる所の、不倶戴天の敵、長髓を擊滅さては止まれないといふ歌が有る。

また万葉集に載せられた、乞食の歌ひ歩いたといふ歌が有る。それは鹿の心にかはッて詠んだので

いとこ　汝兄の君　居り居りて　物にい行くとは

韓國の　「虎とふ神を　生取りに　八つ捕持ち來

其の皮を疊にさし　八重疊　平群の山に　四月と　五月の間に　藥獵　仕ふる時に　足ひきの此の片山に　並立てる　櫟が下に　梓弓　八つ手挾み　姫鏑　やつ手ばさみ　鹿待つと　吾が居る時に　眞小鹿の　來立ち嘆かく　にはかに　吾は死ぬべし　おほきみに　吾はつかへむ　吾が角は　御笠のはやし　吾が耳は　御墨の坩　吾が目らは　眞澄の鏡　吾が爪は　御弓の弓弭　吾が毛らは　御筆のはやし　吾が皮は　御箱の皮に　吾が宍は　御鱠はやし　吾が肝も　御鱠はやし　吾が鹽は　御鹽のはやし　老いはてぬ　吾が身ひとつに　七重花さく　八重花さくと　白しはやさね　白しはやさね

いとこ以下十一句は、へぐといふにかゝる序也。大意は、親愛なる兄よ。予は長い月日の間に、事のついてに大韓國へ渡ッて、虎を八疋生捕ッて來て、其の皮を重ねて疊にした、さて重ねた八枚の疊を、一枚づゝへぐといふ平群山て、夏の初に鹿の腹籠を取る爲に、勅命を蒙ッて山の麓に立ち繁ッて居る櫟の陰て、弓に鏑矢をつがッて、鹿の來るを待ッて居ると、やがて鹿が來て、衝立ッて、歎息をして言ふには、私は急に死ぬことになッたやうだ。私は　天皇陛下に御奉公申上げやう。私の身に備へた所の角は、御笠のかざり、耳は御墨坩、目は御鏡、爪は弓弭、毛は筆、皮は御手箱を張る皮に、肉と肝とは御食物、鹽はお鹽のまぜものに、かくの如く種々の方面に御奉公を仕るてあらう。さすればまださのみ年よりきッた私ては無けれども、一身に花が七重にも八重にも咲くといふ物、死して光榮あること大方ならず。此の段　陛下の御前へ、御披露たのむ／＼

かの家持が海行かば水漬く屍、山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、顧みはせじとことだてと、古語をとりいれて歌ひ、又族を喩すに、隱さはぬ明き心を、皇べに極め盡して云々と詠みしは、人の能く知る所、短歌ては

ものゝふの臣のをとこは大君の任けのまにまに聽くとふものぞ

天皇の勅命とあれば、艱難生死を憚らず。一途に之を遵奉し聽從するものぞと、古來の慣例を示したるものの如し。いかにも是が日本武士道大古以來の慣例たり。

此の類の歌、大昔ばかりても、まだ澤山あるやうて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ありますが。まづさしひかへて置きます。そこで、是等の歌に、いかに武士道の精神が多く籠ッて居るか。いづれの句に尤も激しく發露せられて居るかといふことは、諸君が諷詠吟味の間に感得せらるるにまかせて、殊更に申述べずにおきます。

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に貢獻するところあらんとを期す

△時局より見たる武士道　井上哲次郎氏
△武士道と今後の教育　戸水寛人氏
△武士道に就いて　渡邊子爵
△武士道の懷古　根本通明氏
△武士道は基督教に酷似す　本多庸一氏
△武士道と人格の觀念　綱島梁川氏

以上は既に掲載せり、敢て江湖の一讀を乞ふ

明治教育の効果

普通學務局長　澤柳政太郎

明治の新教育は之を成功と見るべきか、又は失敗と見るべきか、是れ充分精密に研究する價値のある問題であると思ふ。

現時の教育、分ちていへば其制度なり、其精神なり、又は其方向なり、或は教員の學力人物なり、世間の非難攻撃を聞くときは、現代の教育程不完全なるものは他にないと思はるゝ位である。政府の營んだ事業の中で教育は非難の多いものゝ一つである。尚具體的にいへば文部省は各省の中で最も多く世の論者から非難せらるゝ官衙である。此等の有樣より考ふれば明治の新教育は寧ろ失敗なりといはざるべからざる樣である。然しながら世間數多の非難は果して事實に基いて居るものであるか、否かは尚研究を要することゝであると思ふ。さりながら自分は此等の非難の根據あるや否やを穿鑿するよりは、寧ろ教育の成功と認むべき方面に就て少しく述べて、以て明治教育の功過を研究する人の一考を乞はんと欲するのである。

明治の教育といへば其範圍は甚だ廣いものであつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、上は大學より下は小學に至り、又小は一私人の經營したる事業より、大は國家の經營したる事業を含む次第であるが、暫らく之を公私の二つに分てば、其私人の經營に成るものは比較的小部分を占むるもので、明治新教育の大部分は政府の經營によるものと見て差支はあるまいと思ふ。以下述ぶる所は主として政府の經營したる事業に就て見たるものである。

教育の目的は其種類の何たるを問はず、人を教育せんとするに外ならざるのである。之は甚だ漠然としたいひあらはしてあるが、例へば小學校は國民を養成する所で、中學校は中等社會の人を養成する所で、大學校は各種專門の人を養成する所であるといふことが出來る。そこで今教育の效果を見んとすれば先づ其養成したる人が如何に働き居るかを見るのが必要である。先づ最初に最高の教育を施す所の大學に就て其養成したる人物は果して如何なる仕事をなしつゝあるかと考へて見るのに、大學の出身者は現社會の各方面に於て最も重要なる仕事を擔任して居るといふことが出來やうと思ふ。我帝國の中より大學の出身者を拔き去ることあらば我國萬般の事業は忽ち休止する結果を生ずるせぬが、概括していへば我國の行政機關の幹部は大學出身者によつて組織されて居るといふことが出來やうと思ふ。我國の行政組織なり、運用なり、維新以來進歩したる所があるとすれば、何人に負ふのであるか、大學出身者を措いて他に其人がないといふて宜しいと思ふ。我司法機關の重要なる部分も亦大學出身者によつて占められて居るといふことが出來る。泰西の司法制度を採つて以て我制度となし、之が運用に關しても亦世界の信用を博するに至つたのは之れ亦大學出身者に負ふのである、我立法機關に至つては未だ司法行政機關の如く大學出身者を以て其多數を占むるに至らぬのは甚だ遺憾なる點であつて我立法機關が比較的幼稚なることは自ら了解することが出來やうと思ふのである。

以上は主として法科大學出身者の働く方面であるが、次ぎに醫科大學出身者の働くべき方面を考ふるときには之れ亦大學の成功を認めざるを得ざるのである。今日刀圭社會に於て重きをなすものは即ち大學出身者である。公立病院の重なる醫者は悉く大學出身者である。私設の病院に至つても有名なる醫者は多く大

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に著しきものであつて歐米先進諸國に比して毫も遜色なき感あるは醫學の最も早く輸入せられ、研究せられたといふことよりも寧ろ大學出身者の力であるといふ方が適當であらうと思ふ。

次ぎに工科大學出身者の働く方面に就て考ふるに維新以來起りし大いなる工事殊に學理の應用を要する工事は最初僅かの部分が外人の手によつて設計せられ、實施せられし外、悉く大學出身者の手によつて成りしものといふてもよいのである。別に例を引くまでもなく、今日の鐵道、電氣事業、道路、船渠、建築、造船、水道、築港の如き一として大學の出身者に負はざるものがないのである。

次ぎに文科理科出身者の働くべき方面は主として教育及び學術の社會である。最初にいうた如く我教育は非常なる非難攻撃を受けつゝあるけれども而かも事實に就て我教育の變遷を考ふれば非常なる進歩を認めざることを得ないのである、例へば中學にしても今日の中學を以て數年前の中學に比し、更に遡りて十年前のものに比較すれば其進歩は實に著しきものである。又師範學校に就ても其他の種類の學校に就ても同一である。又我國民に最も缺乏する理學の思想が兎に角今日の有樣になつたのは理科大學の出身者に負ふ所が少くないのである。殊に理學界に於ては我國は相當に世界の智識に貢献して居るといふことが出來る。泰西の文明を輸入して其恩惠に浴して居る報酬の一部分は理學界によつてなされて居るのである。我國の理學者のなしたる仕事は比較的多く世界の理學者によつて認められて居ると思ふのである。

かくの如くに、大學の出身者がなしたる仕事について考へて見るときには大學は確かに一大成効なりといはざるべからざるものである。今日まで五千餘の出身者中或は社會の擯斥する所となつたものも少しはあるであらうし、又碌々として何等の仕事をなさぬものもあるであらうが大體についていへば大學は其目的を達して居るものといはねばならぬ。

更に下つて小學教育について見るに、文字を知るといふことは封建時代にあつては國民の一小部分に限られて居つたが、今日では國民の多數が普通教育を受くる樣になつた、今日の小學校兒童の學習する文字の智識は必ずしも多いとはせざるも、其數學の智識、地理歷史の智識、理化學の智識等に至つては我々の父祖の時代にあつては大學者もなか〳〵知らざりしものを知

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて居るのである、かくの如き普通の智識が國民の多數に及び、又正さに國民の全體に普及せんとするに至つたのは實に驚くべき變化であるといはなければならぬと思ふ。

又維新前の婦女子にして多少の教育あるものは實に僅々の部分なりしに今日は普通の教育を受くることは男子と殆んど變ることなき割合に進んで居る、是れも亦驚くべき變化である。此普通教育の功は前に擧げたる智識の方面ばかりではない、德育の點に於ても又輕視すべからざるものがある。論語孟子を暗ずるものは以前は多少あつたと思ふが、其人數たるや極めて僅かであつた。然るに今や道德の教としては論孟よりも一層範圍の廣いものが全國の多數に授けらるゝ事となつた。即ち今日世人が皆認むる所の忠愛の精神が國民一般に行き亘つて居る次第である。世人多くは道德の頽廢を慨嘆して風紀の衰微を云々する。成程或方面から見れば我社會の道德は或は弛みし如き觀があるけれども全體から見るときには寧ろ進んで居る、或は道德が國民に普及したといふてよいか、少くとも農工商の部面に道德思想は浸潤するに至つたことは事實である。

らざるものがあるかも知れぬが、社會一般に道德思想の起りしことは爭ふべからざることゝ思ふ。かくの如きは我國の一大進歩といはねばならぬ。普通教育の効果は玆に止らぬ、我國民の體格も漸次改良の方向に進んで居るといふてよい、普通教育は智育德育と並んで體育を重んずるもので此効果はやがて國民の體格の上によい結果をあらはすに至ると思ふ。男子については從前と大いなるかはりはないとしても女子の體格は小學教育の結果として非常なる影響を受くることは爭ふべからざることゝである、而して女子の體格の結果は子孫の體格の上に良結果を生ずることゝであらうと思ふ。智識、道德及び身體の發育は國民の上に何等の關係なしとすればいざ知らず、大いに密接の關係ありとすれば我小學教育は國民の品格の上に、能力の上に大いなる結果をあらはして居るものといはねばならぬ。

我兵力の强いのは國民の智德の勝れて居る爲であるのは何人も認めて居る所である。此國民の智德は一に小學教育の結果に外ならぬのである。我國が世界の一文明國として認めらるゝに至つたのも、國民中少數の偉人あるが爲にあらずして國民の全體が文明國民の實

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は他の東洋諸國の如き、樣であつたならば、我國は決して對等の條約を結び、治外法權を撤去することが出來なかつたのであらう。

以上述べた如く教育系統の兩端にある大學並びに小學教育の効果について概觀するに其成功と認むべきものがかくの如く多いのである。他の中等教育についても實業教育についても之が結果を考ふるときは皆同一の斷定に到着する次第である。玆に述べた所も餘りに精細に亘つたものでなく、概論に止るが、此等の事實は他に文部省に於て調査したるものがあるから、其れに讓ることゝする。

要するに明治教育の効果を正確に研究することは最も必要の事であると思ふ。自分は明治の教育を以て一大成功にして明治年間に於ける各種の成功したる事業の中にても最も著しきものと信ずるけれども、素より之を以て滿足するといふ譯ではない、將來に向ても尤分の改良進歩を計らんとするものである。只將來の改良進歩を計るについて從來の効果を正しく考ふることが大いに關係のあることゝ思ふ。殊に從來の教育の効果甚だ大いなるものであると信ずるけれども、從來の教育は改良進歩の歴史であつたのである。或は我教育は餘り屢々變更するといふことを非難されたけれども其變更は徒爾にあらずして非常に有益なる結果を生じて居る、將來の教育も亦改良進歩の歴史であり、從て必ず良結果をあらはすものでなければならぬと思ふ。

ステッセルと丁汝昌

久津見蕨村

（一）

旅順の守將ステッセルの降伏したる、之を古今の史上に照らして、啻に戰鬪上に於ける顯著の事歴なるのみならず、道德的若しくは哲學的に視て以て、大に吾人の注目を惹くものあるを見る。

抑も要塞の守將たるもの、力盡き糧盡きて防ぐ能はず。而して部下數萬の生靈を無益に殺傷するの殘忍に顧み、敵に降を致す、必ずしも不可なりとせず。又必ずしも怯懦にあらざるなり。而かも其降を致すに於て古今の史上種々の例なきにあらず。守將たるものゝ死生決斷の節、自から分かるゝ所あり。

近き一例を求めば、去る日清の役に、清の提督丁汝

昌威海衞を死守し、而かも陸上の砲臺一日にして悉く敗ぶれ、劉公島に據ると雖、亦支ふる能はず。明治二十八年二月十八日降書を日本軍に送つて、定遠艦長劉步蟾、陸兵統領張文宣と共に毒を仰ぎて死したる是れなり。當時我國人は丁提督の節に殉したるを稱し、古名將の慨ありとなしき。

之を今ステッセルの投降に比す。其趣稍や相似たるものありて、而かも其守將たる二人者は全く異なる行爲に出づ。丁の節に死したるとステッセルの宣誓して生きて歸國すると、相對照し來れば、軍人出所進退の節に關して批評の容るべきものあるにあらずや。然り而して是れ啻に軍人の節のみならず、一般に於ては即ち人間死生の決する所以の大問題たる可らずや。乃ち曾て丁の殉節を以て武士の鑑としたりし我國人は、ステッセルの宣誓生還を見て、抑も如何の語を作さんとする乎。我は即ち之に對して我が想ふ所を云はんとす。

(二)

丁の節に死したるを以て、東洋武士の道徳とし、ステッセルの宣誓生還するを以て西洋勇士の事とし、二者共に名將たるに耻ぢざるの行爲ありとするは、一國自國は亦別に是とするありとなすの思想を根底とせる論なり。誠に事情を酌める道徳と云ふべし。

斯く一國は一國の道徳あり。彼れも善し、是れも不善ならず。節に死する稱す可し。死せざる亦稱す可しと謂はゞ、天下決して議論ある可らず。進んで一家は一家の道徳あり。一人は一人の道徳あり倫理あり。他人には不善なるも我には善なりと謂ふことを得べけん。而かも是れ一般の認諾する所なりや。

丁の死したる是ならはステッセルの死せざる不是なり。前者眞の武將ならば後者は眞の武將にあらず。甲稱すべくんば乙は稱すべからざるなり。我國人は夫れ果して彼れを稱せんとする乎。

論者西洋の武道に於てはステッセルの如くする至當なりと謂ふ。然れども此は是れ人は自から其己れを殺すべきものにあらずとせる基督教の敎理に原因したるもの耳。西洋と雖自殺を罪惡にあらずと論ぜる人、必ずしも之れなきに非ず。ギボン、ヒュム、ショッペンハウエル、ハルトマン等諸氏の說けりし所を翫味し來れよ。自殺は却て是れ道德なりとするの意自から含有せられたるを見ん。况んや古史に就て之を覗へば、ハン

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るを欲せず、潔く自から殺して而かも世の稱賛を受けたるあるをや。惟ふに謂ふ所の西洋の武道なるもの必ずしも丁提督の如く節に死するを以て不可とするのみにあらざるを見る。

（三）

然らばステッセルは丁汝昌に若かざる乎。論者東洋的なりと謂ふべけれども、武道としては丁の勝れるあるを見る。ステッセルの旅順口を守る、人力の能ふ限りを盡したりと謂ふと雖、然れども露帝よりして軍港艦船の守備を命ぜられ、己れ亦斯守備を全ふすべきことを己れの義務と信ず。而して之を遂行する能はずして多くの生靈を失ひ、軍港艦船悉く之を敵に委せざるを得ざるに至る。何の面目ありてか露帝に對し又自から其己れに對するを得ん。

且つや己れ常に罵りて敵とし仇とせる日本軍に對して降を乞ふ。是れ耻辱の甚だしきものならずや。斯耻辱を忍びて尙且つ生んとす、大量と謂はゞ大量なり、而かも我は神經の存在を疑はずんばあらず。ハンニバルの死せる、ミトリダテスの逝ける、斯耻辱を見るを欲せざるにありて、而して世亦其耻辱を忍ばざる硬項骨を稱するにあらずや。而して今ステッセルに斯硬項骨なし。我は轉たハンニバルを偲ふ、ミトリダテスを偲ぶ、又丁汝昌を偲ばざるを得ざるなり。

（四）

然れども此は武道一偏の論なり。神經質的武將の出づべき道なり。思慮老猾に謀計縱横隱忍剛腹なる大將に至りては、亦自から別途なきにあらざる可し。ナポレヲン一世のエルバ島に耻を忍べる、一旦の死よりも忍耻の生を求むる、後來に大いに爲すあるを自信するに因らざらんや。

戰爭は固より仁義の業にあらず。當代の許す限りに於て一切の謀略を用ふべきものなり。戰死よりも敗生を以て後途に有利なりと信ぜば、三十六計の秘奥を演ずる亦何ぞ妨げんや。故に大將たるもの時の如何を以て、其死生の節を變ふる、亦必ずしも不可ならざるを見る。唯之に托言して犬馬の生を貪ぼるに至りては、卑劣の極なり。

惟ふに丁汝昌の死せる、當時の事情を考ふるに、生きて日本軍に降り、所謂名譽の捕虜——何ぞ面白き撞着の名辭なるや——として世を永くする、固より不可なかりしならんも、而かも清國の國狀たる、斯の如き名譽の捕虜てふ撞着を寛容して、平和克復の後彼れに

戰敗の經驗を利用し、大に爲す所あらしむるを得べきにあらず。而して却て上下の批難を受くべきものあり。或は斬首の刑に處せらるゝことなきを保せず。事情斯の如き時に當りて、丁たるものゝ防戰の力盡く。出づべきの途は一死部下の生靈を救ひ、又以て朝廷に謝するの外なし。丁の死や實に神經質的武將たるに留らずして、別に深甚の事情あるを見るなり。思ふて之に及べば我は丁の爲に今尙涙なきを得ず。

ステッセルに至りては、國狀同じからざるものあり。名譽の降伏若しくは名譽の捕虜てふ撞着の名辭は盛に歡迎せらるゝの國なり。例令へ再び今日の戰鬪に加はらざるの義務を負ふと云ふと雖、亦別に後途の籌策に献替の勞を爲し得べき餘地ありて存す。或はジャップと罵り、或は小猿と詈りたる仇敵に降るの耻辱ありと雖、一旦之に忍はゞ後日大に我が力を試むべきの山海頗ぶる廣きものあり。事情斯の如くは即ち神經質的武士と雖、蓋し還て死に就くことなかるべし。況んや寫眞に依りて觀ふに彼れは是れ必ずしも神經質の人ならざるが如きをや。彼れの降伏して而して死せず、恬然として日本軍に來る、亦其所を得たりと謂ふ可し。

[illegible]戰の不幸に遭遇しながら、其幸不幸の異なる、甚だ大いならずや。是に於て我は亦切に丁の爲に其不幸中の不幸を悲み、ステッセルの爲に其不幸中の幸を稱せずんばあらず。

若し夫れステッセルにして、這般の意に出り降伏の耻辱を忍び、宣誓して生還すとせば、彼れの胸中果して如何。彼れも堂々たる大將なり。宣誓を破ぶるの如きことなかるべきは萬々なりと雖、而かも其戰敗の經驗は異日那邊に利用せらるべき乎、幾んど測知すべからざるものあらん。況んや戰役の中に於て敢て宣誓の義務を負ひ、而して早忙として還へるをや。我は日本軍が決して之を雲煙視すべきにあらざるを知る。

(五)

守將の降伏に於ける死生の決斷は、斯の如く當時の國狀に因りて同じからずとせば、此際に於ける守將の大節には、一定の道德なしと云ふに歸着すべし。

換言せば境遇許さゞれば節に殉せざる可らず。之を許さば即ち死せざる可なり。環象の勢力に依りて死する死せざる、死生の大節は決定せらるべきなりと謂ふに歸せん。而して斯の如き道德談は高慢なる倫理學者の賤しむ所の實利的若しくは經驗的倫理に敎ふる所なり。

之を窮追して論ずれば、國各々事情を同うせず。時代亦然り。一國は一道德、一時代は一道德と謂ふに歸着す。更に窮追すれば一家は一道德一倫理、一人は一德一倫理と謂ふに到來せざるを得ざる可し。前に一般の認諾せざる所なるべしとしたる所。反て是れ眞理を語るものにあらざるなきやを疑はざる可らざる也。

或は戰爭に道德を談ず、眞珠を豚に與ふるが如しと云ふあらん。然れども文明の戰爭と謂ふは何ぞ。平時と雖亦斯の如く形こそ同じからざれ、國狀と時代とは方に倫理道德を異にせしむるは何ぞ。

丁汝昌も道德なり。ステッセルも道德なり。殉節も道德なり。降伏生還も道德なり。一は支那の道德なり。一は露西亞の道德なり。別に日本の道德あらん。佛蘭西の道德あらん。君主國の道德あり、共和國の道德ある可し。然り、類推して進む、岩崎家の道德あり。三井家の道德あり。遂に我は我の道德を見出さん。要するに道德倫理は環象の下に盲從する存在なり。而かも其矛盾を笑ふものは超然として高く環象の上に立つべし。高節初めて其所に存せん。我れ二將軍の降伏を比論して、圖らずも超倫理觀に觸れたり。此は固より別論、異日世に問ふことあらん。

消化論

法學博士　和田垣謙三

夫れ人は素より米のみにて—麵麭のみにて生くるものにあらざれども、神仙はいざ知らず、苟も生れて人間として此世に現れ來りたる者は食物はなくては適はぬ事なり、伯夷叔齊と雖も周の粟こそ食はね、首陽山の蕨を食ひしにあらずや、否或る意味に於ては隨分アワを食ひたるなり、獨り人のみならず、凡そ生きとし生けるものは下等動物にても抑も又植物にてもそれ〳〵食物の必要を感ぜざるはなし、否神仙と雖も「松の葉をすき桂の露を舐め」斯くて能く「不老不死の身」となることを得るにあらずや。

食物の必要なること此の如し、而して其必要なるはそが能く消化され血となり肉となり骨となればなり、而して消化の機能は隨分込み入たるものなれども、胃なるものが之が最大最要機關たることは云ふまでもなし、而して世に胃弱者、胃病患者の多きこれ亦顯著なる事實なり、而も此等の病人は味噌汁澤庵に甘んずる……甘んぜざる可からざる下男下女にあらず、又川柳子が「口と足とは同じことと」と詠じたる居候即ちひ

やめしのみを當て行はれ、而も「三杯目にはソット出」さゞるを得ざる居候先生にもあらずして、却て山海の珍味に飽き、糟丘酒池に溺るゝ王侯貴紳富豪の類に於て最も多く之を見るは又奇ならずや、而してこれ實に掩ふべからざる事實なり、溜飲、胃弱、慢性胃弱、胃加答見、胃痛、胃症、食欲不進、胸痞、惡心嘔吐、腹滿、食傷（詰り賣藥の功能書を寫したる也）胃病種類枚擧に暇あらず。

食物の必要は云ふまでもなきことながら、而も吾人は亦暴食又は不消化物の嗜好又は運動不足等の點に向つて充分の注意を怠るべからず、夫の我々が少時の時屡々老人より教訓せられたる「食する時不言」即ち飯喰ふ時に物言ふなの教訓は多少誤解を來たすの恐なきにあらず、そは其眞正の意味は食物を口にしながら發言するの不作法を戒むるにありて決して食事中一切無言を守れとの意味にはあらざるべし、而も此語は……支那より輸入されたる此語は彼の早飯と早厠とかは武士の藝などの語と共に世人の消化作用を妨げたるの罪は多少免る可らず、寧ろ西洋の食事中は努めて談話すべし、無言にしてムシヤ／＼パクツクは此れ下等動物的なり、一種の意味に於ける牛飲馬食なりとの教訓の實際有益なるにしかず。

上野動物園に飼養さるゝ諸種動物の死亡統計を案ずるに其斃死の原因は多く消化器を傷ひ以て腸胃を害するにあり、彼等は一定の食料を附與せらるゝものにして山野河海にある時の如く獸慾肉慾に支配せられ、一時の慾を充すにあらず、又餓死するにもあらず、而も此の如し、運動の不足或は之が原因をなすものならん、食物の必要と同時に消化の必要なる事、消化の良不良は胃の働きの良不良に依るの多き事、又胃の働きの良不良が如何に運動の良不良に依るの多きことは誠に明瞭なりとす。

植物に於ても吾人は亦學ぶ處なきにあらず、見よ水邊の樹木は概ねその枝を水面に向つて低く垂れ居るにあらずや、豈獨り彼の「水の流を見て暮す」てふ可憐なる川端柳のみならんや、霜をよく凌ぎ風に耐へて晩翠を含む還々たる澗畔の松の如きも亦然り、乞ふ海岸の松樹を見よ必ずしも遠く須磨明石又は三保ノ松原や松島まで往くを要せず、我が東京市內城外濠渠に接したる幾百千本の松樹を見よその亭々として碧宵を突くの姿勢を取るもの極めて少く寧ろ巧みに手と足を伸して水を掬せむと欲するが如きもの其多數を占むるにあら

ずや、想像力に富める詩人、歌人は是れ松樹が明治の盛世を祝し太平樂や萬歳樂を奏しつゝ手の舞ひ足の蹈るを知らざるならんとするならん、然れども嚴密なる學理的研究は是れ全く食物の關係消化作用の關係に依るものなることを明示するなり。

「草木は……雨露の恩」とは熊野松風に米の飯と稱せられて尤も人口に膾炙する、熊野といへる謡曲の有名なる一句にて、雨露の草木に必要なるは勿論なるが、之と同時に必要なるは日光なり、抑も樹木が其根は岩をも穿ちて地中に蟠るも其枝幹の亭々として天に向つて伸び上るは是れ一刻も早く一ドーヅも多く太陽の光線を得んとて丈を伸し手を伸すに外ならず、而して水邊の樹木が之が正反對の擧動あるは如何、是れ水と日光とは所謂水火相容れざるにて其仲頗る惡く太陽は一視同仁にて水面にも其光線を放つも水は如何にも冷淡にして之を「レフラクト」即ち突ッ返すなり、故に光線は水邊に於ては寧ろ下より跳返りつゝあるなり、故に水邊の樹木は上に伸ずして上に向つて手足を伸はさずして寧ろ下に向ふなり、是れ水邊草木姿勢哲學論の一班なり「モロフォロヂー」なり、知るべし食物の關係消化作用の關係が植物の「モロフォロヂー」に及ぼす[illegible]物に大なる益を、

人は萬物の長なり、而も動物の一種なり、否生物の一種なり、而して動植物即ち生物の同類が吾人に向つて前述のレッソンを與ふるなり、「背負つた兒に教はつて淺瀨を渡る」の古語の如く萬物の靈長たる吾人々類は動物植物より生物學上の一大教訓を得るなり、昔者柳宗元は有名なる種樹郭橐駝傳に於て「吾樹を養ふことを問ひて人を養ふの術を得たり」と云へり、吾人は宗元のそれとは異りたる點に於て樹木よりも、禽獸魚介よりも聊か得る處あるなり吾人は其教訓を如何に自己の上に適用すべきや。

「シエキスピヤー」其マクベスに言へるあり曰く（Good digestion waits on appetite, and health on both)良き消化は食慾に、而して健康は此兩者に待つありと、身體ありての　命あつての物種なるその身體の健康を保持し下は父母より受け上は天より與へられたる身體髮膚を傷けず、獨り之を傷けざるのみならず之をして充分に發達せしめ西哲が云へりし如く「善き人間になるには先づ以て善き動物となれ」善き動物となるには食物消化に注意せざる可らず、換言せば胃の攝生に注意せざる可らず、飲食の分量に於て節度を誤らざ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ること、其種類に於て滋養物消化物を撰まざる可らざること、又運動を怠る可らざること等とす、而も吾人は動もすれば胃の大切なることを忘るゝことあり耳目鼻口四肢百官各々其職を盡して寸時も休息すること能はざるに獨り胃の腑は傲然中央に安座して一見甚だ無爲無能無藝大食の居候の如し然れども沙翁が其傑作の一なる「コリオラナス」に於て巧みに利用せる譬喩法の如く胃ありて能く食物を消化し身體の健康を維持すればこそ耳目鼻口四肢百官各々能く健康に能く其職務を完うすることを得るなり、故に胃病は萬病の基にして胃の健全なるは健康體にとりて實に第一條件たり胃論消化論の必要なる所以なり。

類似胃病一名精神的胃病

以上はホンの前置に他ならず、玄關の少しく大に失したるを咎むること勿れ。類似胃病は其類枚擧するに遑あらずと雖も先づ余が第一に諸君に向つて特に一言したきは教育的胃病或は修學的胃病なり、ベーコンがものしたる學藝論中左の文字あり (Sone books are to be tasted, others to be swallowed, and some few to be chewed and digested, that is some books are to be

and some few to be read wholly and with diligence and attention) 或る書はホンの舐めるだけにて可なり、或るものは鵜呑にして可なり、而して或極めて少數のものは能く咀嚼し能く消化せざる可らず、語を換へて云へば或物は只其一班を伺ふのみにて足れり、又或物は其全部を熟讀せざる可らず、而も勉强と注意とを以てせざる可らず、ベーコンの言頗る興味あり、充分之を翫味し之を咀嚼するの要あり、諸君に其「アペタイト」なるや盖し「アペタイト」とは「タベタイ」と云ふ心なり、諸君は之に必要なる强健なる胃の腑を所有せらるゝや否や。

人は麵麭のみにて生くるものにあらず麵麭と同じく或は之より一層必要なるものあることを記憶せよ、「シエキスピヤー」曰く (The mind shall banquet though the body pine)

「縱令肉體は饑餓に瀕するも精神は山海の珍味を要す」

精神の各方面に種々の食物を要すると同時に又各種の胃病あり、消化不良病あり、前に我國に來遊せる米國スタンフォルド大學總長ジョルダン氏は云へり「獨逸の學生は其一部はビールを飲むで死し、一部は只書物を讀むことにのみ耽りて終生なすなく、寶の持腐れ的

に甦れて仕舞ふ、殘り一少部分が今の獨逸の國民となりて國家に有益なる者なり」、又曰く「日本の學生は何時でも病人面を提げて居る、日本の俥夫は生涯俥を引き、日本の學生は朝から晩まで……書物に嚙り附き、遂に健康を害す、日本の學生は餘り學問を急ぐ、早く結果を收めんとする風あり斯てはエライ發明エライ事業をなさむこと覺束なし、」右は隨分日本學生を愚弄したる話なれども充分味ふて可なり、又現に氏は某雜誌に本邦學生の長所を擧げて左の如く云へり

The Japnese students belong largely to the Samurai class, the feudal retainers, and the feeling of loyalty to Japan is the animating spirit in all their studies, and in all their work. It is the spirit of honour, the Bushido, the religion of Japan.

而して又警戒を加へて曰く

So long as the Japanese keep this feeling, he is worthy of trust, when he loses his religious spirit, he becomes a degenerate, open to the attacks of all the vices.

又學事視察の爲に本邦に來れる英國婦人ヒユース孃は曰く「上は大學より下は小學に至るまで、日本の教育は根本より間違つて居る何故なれば學生に自ら考へしむる餘地を與へないからである」即ち舐めるばかり鵜呑ばかりなりとの謂なり。

余は明治五年郷閭を辭して東都に來りしより以來、本日に至る迄三十有餘年學問界の住民たり……或は學生として或は教員として、我國學生の悪口の種に隨分蓄へあれども併し憎れ口は時に必要なれども今はイヽ子になりて自身では悪口を試みず、此處に英米兩國の局外者の批評の一班を揭げて諸君が大に反省する處あらんを欲するなり。

復た次に消化不良に政治的社會的のものもあり、又經濟的財政的のものあり、又道德的のものあり、今日政治界が如何に憲法の條文は立派なるも其運用面白からず、又今日の經濟界が如何に表面だけは長足の進歩をなしたる如くあるも外國貿易の七八割は依然として外商の手に掌握せられつゝあること、又動もすれば只外に向つて外資輸入を絶叫し、內は積極的貯蓄に依りて能く健全なる發達をなす能はず、所謂實業界なるものは恰も間歇熱に冒されたるが如く時々種々の熱に浮かさるゝは其病根皆胃弱にあり、消化不良にあり、抑も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

進化は自然の約束なり大法なり、而して進化とは消化に外ならざるなり、諸君は青年者として他日我國を兩の肩に荷負ふの義務あり、抑も亦權利ありア、年寄りの冷水青年の向ふ見ず、恐る可し、戒む可し、謹むべし、而して胃病は萬病の先驅者なること、健全なる胃を所有するは一國をして有ゆる意味に於て健全ならしむるの最大最要條件なることを思ひ、英米人の惡口を心に銘じ、彼等が體育に於て萬國中特に注意し其習慣書を讀み理を究むると同時に、又能く體育を重んじ暇あれば青天井の下に花を見、或は各種競爭に花を咲し、我國の青年の如く其天の青く其花の紅なる歐米の及ぶ處にあらざるにも拘らず外人が氷の上を辷るに反し炬燵の中にモグリ込むことや、又赤毛布の上に花を引くの遊びは斷然之を廢せざる可らず、而も具體的肉體的胃病のみならず、心的胃病の多きこと而も是れ自業自得なること猛省一番せよ。青春の初めに於て青年諸君に向つて一言するの榮や大なり「綠なるひとつ草とぞ春は見し秋はイロ〳〵の花にぞありける」他日諸君が千紫萬紅各々其特色を發揮し其光輝を放たれんことを望む。

日英同盟の將來

茅原華山

一　緒言

日英同盟の將來は果して如何、獨り我國の識者のみならず、英國の識者も此問題に關して、適切なる解釋を得んと苦心しつゝあり、豈唯同盟國のみならんや、世界外交國の注視講究しつゝある所の一大問題も、亦日英同盟の將來如何に在るや疑ふべからず

日英同盟、其期限後、繼續せらるべきや如何、是れ問題なり、若し繼續せらるゝとするも、日英同盟は更に鞏固を加ふべき乎、將た單に紙上の同盟たるべき乎、是れ一問題なり、日英同盟鞏固を加ふるとすれば、英國に於ける或新聞紙の說くか如く、其範圍は更に擴張せらるべき乎、將た現在の範圍に止まるべき乎、是れ一問題なり

日露戰爭は國際關繫を一變しつゝあり、世界政治が、將來に於て、新局面を展開し來るは、固より多言を待たず、將に露國の新聞紙が一たび日露同盟を叫びてより、我國に於て之に反響を與へ、事實日露兩國は、國

らず、人民と人民とは、縦ひ春風の氷を融くか如く、双互釋然一和するに到らざるまでも、靈犀一點自ら相通ずるの態あり、戰場に於ける双互對陣の際、將校士卒が手を握りて交際するの光景は、傍觀者をして戰爭は怨恨を齎らさずして、愛友を齎らすものなるを看取せしめたり、戰後若し日露相氷釋するが如きあらば、日本は深く日英同盟に恃む所あるを要せざるに似たり、日英同盟の將來は、知らず果して如何

二　波羅艦隊と英國の態度

英國のエチ、ダブリユー、ウイルソン氏は近ごろデイリー、メールに於て、波羅的艦隊の使命を論じ、頗る英國の爲に日英同盟の將來に對する深憂を洩らせり、吾人にして日英同盟の將來を推測せんと欲すれば、先づ對手國に於ける識者の說を聽くを以て、最も便宜なりとす、ウイルソン氏曰く

波羅的艦隊が列強の寬假に依り、極東に達する航海を繼續するに對しては、英國人たるものは、露國の政治的及び軍事的目的の存ずる所及び其結果に就て、一考を費すを要す

吾人はウイルソン氏の著眼決して凡ならざるを見る、曰く

波羅的艦隊の派遣は、日英兩國の關繫を破却せんとする目的を達せしむるに足るものなり、日本國民は

(イ) 埃及政府がポート、セイド港に於て、艦隊の一部が石炭を移載するを許可したる事

(ロ) 英國の商船に依りて、多量のウエール石炭を艦隊に供給したる事

(ハ) 英國の船主が艦隊に石炭を供給するの目的を以て、英國商船を肩上ケする事

(ニ) テームスに於て建造せらたる水雷艇を露國に賣却せらるゝに方り、英國政府の處置、太だ緩慢なりし事

(ホ) 固より信を置き難きも、日英同盟第四條に於て、禁ぜられあるにも拘らず、英國政府か露國と或協商を爲さんとする意向ありと傳稱せらるゝ事

此等の事實は相合して、日本に於て、英國が太だ無情なる國なりとの感を惹き起したり、露國の政治家は、過故六個月の經驗より日本の大敵なるを發見し、日本をして英國と遠ざからしめんと努めつゝありき

吾人は未だ我國に於て、英國賴むに足らずとの聲を耳にせずと雖も、此等の事實は多少の我國民に向て異樣なる感情を與へたるに相違なきが如し、凡そ一國が大敵と戰ふに方ては、其同盟國の態度を視ること、殆と神經的なるは、是れ實に自然の理なり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三　波羅艦隊と戰局

ウイルソン氏は更に波羅的艦隊の派遣を軍事的に觀察して曰く

軍事的に觀察すれば、波羅的艦隊は大に日本の戰局に向て艱難を加ふるものなり、一たび艦隊にして極東に達せん乎、新に海戰を開始すると同一の結果を生じ、從來、東鄕提督及び其將士の成就したる事業は、艱難なる任務、激烈なる戰鬪を經たる艦船を以て、好箇ならざる事情の下に、更に反覆せざるを得ざるに至る、若し或奇禍の日本海軍に落つるが如きことあらば、日本は最も艱難なる位置に陷らざるを得ず、日本の制海權にして、一たび大に制壓せらるれば、滿洲に屯する日本の陸軍を維持すると否とは、最早問題にあらず、日本は英國に向て干涉を嘆願する乎、或は露國に向て和を請ふ乎、二者其一を擇はざるべからず、英國にして干涉せん乎、露佛同盟と戰はざるを得ざるに至らん、日本にして和を露國に請はん乎、英國は終に其損失を被ふるに至るべし

ウイルソン氏の戰局に對する觀察は、寧ろ悲觀に過ぎたり、波羅艦隊來るも、若くは黑海艦隊の之に加はるあるも、我國は毫も之に避易すべき所以を見ず、然れども、外交的觀察は亦自ら別なり、英國がハル事件に於て、若し態度を一變するなくんば、波羅的艦隊は到底極東に向ふ能はざりしなるべし、露國が黑海艦隊をしてダーダネルス海峽を通過せしめんと計るは一日に非ず、吾人は英國が堅く日英同盟の約款を守り、巴里條約に準據して、露國の此計を沮止すべきを信ず

四　日本の向露黨

ウイルソン氏は、日本にも向露黨あるを論じて曰く

日本に於ても、常に向露黨ありしを記憶せざるべからず、今日日本の運命を支配しつゝある政治家の一人は、英國との同盟に反對したると信ぜらるゝなり、其之に反對したるは、英國を好まざるに非ず、英國の政策は軟弱怯懦にして、一旦緩急に際し、毫も賴むに足らずといふに在り、夫れ此感情にして戰前に存在せしとせば、英國の行爲は更に此感情を熾ならしめ、逐に日本の外交政策をして全く一變せしむるに至るやも、亦未だ知るべからず

日本に向露黨あるは、事實なり、吾人は我國の向露黨をして先見の名を成さしむるなからんことを望む、我同盟國の爲に、偏に之を望む

五　戰爭は交戰國を接近せしむ

戰爭の結果は、往々交戰國をして親和せしむ、ウイルソン氏深く此點に苦心する所あるに似たり、其言に曰く

此に看過すべからざる事實あり、戰爭の一傾向として、殊に日露兩國に於けるが如く、兩交戰國が極度の武勇を示したる場合に在ては、自然に相畏敬するの心を生じ、而して中立國が縱まに戰爭の利益を吸收するに對する反動、之を激して、相接近せしむるものなり

歷史は明に之を證す、クリミヤ戰爭の際及び其後に於て、露國は墺國が助けざりしを以て、深く之を怨みたり、而して佛國に對しては、戰爭の未だ終結せざるに方て、早くも同盟すべしとの聲を發したり、米國南北戰爭に於て、墨西哥に於ける佛人の行爲を惡み、一たび南北一と爲りて、之を討伐すべしの論を生じたり、千八百七十年の戰爭に於て、普國皇太子の日記にして信ずべくんば、セダンの役後、獨佛は相結び英國に當るべしとの諷示を提供せられたり、更に遠く千八百七年の古に遡れば、フリードランドの役後、奈破烈翁一世と露國の亞歷山皇帝とは、中立國を無視して、戰場に於て直に相和したり、凡そ此等の先縱を點檢すれば、日露兩國が戰後相接近するの危險は、決して空想的ならず

六　英國にして日本を失はゞ如何

英國にして日本を失へば、其得失果して如何、ウイルソン氏之を說き得て毫も遺憾なきに庶幾し、曰く

第一　日本が最も同盟國の援助を要するに方て、英國敢て之を與へずんば、將來、他國は英國と同盟の約を訂するを避け、從て英國は復た長く孤立するに至るべし

第二　極東に於ける英國海軍の位置は、大なる變化を生ずべし、英國が一船舶すら歐洲を離るゝを許さゞる時に方て、多數なる軍隊を輸送せざるを得ざるに至るべし

第三　印度に於ける英國の位置は、殆と絕望に瀕すべし、何となれば印度は全く露國の壓迫に委し、今日國境二百五十哩及び三百哩の地に達し、近き將來に於て、更に延長すべき露國の鐵道は、何時にても幾十万の兵を送るを得べし

第四　極東に於て、英國は總てを失ふべし、支那は英國の利益に反對する强國の掌握に歸し、此方面に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

於ける英國の商業は、全く廢滅すべし

英國か日本を失ひたるより生ずる道徳的影響に關して、ウイルソン氏は曰く

七　其道徳的影響

日本は正義の理由の爲に、其自由の爲に、其獨立の爲に、專制國と戰ひつゝあり、總ての歷史は、斯かる理由を以て戰ふ所の國、日本國民を動すが如き犧牲的精神を有する國は、縱ひ一時勃興を妨ぐるを得るとするも、結局之を壓倒する能はざるなり

* * * *

ウイルソン氏の論は、英國の爲に說いて甚だ親切なりと謂ふべし、吾人にして若し率直に言はしめば、日本は將來に於て、日英同盟なくも、必ずしも極東に雄飛する能はざるの理なし、日本は極東の主人なり、若し同盟を求むるの必要あらば、來りて日本と握手せんとするもの、決して其少きを憂へず、吾人は今假に日露同盟を主張する唐突を學ぶ能はずと雖も、國に百年の友なく、復た百年の敵なし、苟も利害一たび合はざれば、昨日の敵國たりし露國と握手するとなしとは斷言する能はず、之に反して、英國は如何に其海軍を有するも、極東に至りては、遂に客たるを免れず、殊に露國にして黃海に出づる能はずんば、轉じて志を中東若くは近東に逞しくせんとすべし、是時に方りて、英國は何を以て露國の陸軍を防がんとする乎、宜なり英國に於て、日英同盟を擴張して、英國は其海軍を以て日本海岸を防禦し、日本をして露國が印度に下るの日、其陸軍を以て英國を援助せしめんとするの議あるや、故に吾人は英國の側より觀察して、『日英同盟は繼續すべし』『日英同盟は鞏固を加ふべし』『日英は其範圍を擴張せらるべし』と言はんと欲す、日英同盟が極東同盟若くは亞細亞同盟なる以上、日本の發達するに從ひ、日本の英國に賴るの程度は、漸く減じて、英國の日本に賴るの程度は、漸く增すべし、我日本既に一たび英國と結ぶ、豈假に英國に孤負せんや、吾人は是を以て世論の紛々たるに拘らず、英國の政治家にして近視眼ならざる限りは、戰爭しつゝある日本に對して、決して不利ならず、不利なるを得ざるを知る

前號正誤

前號所載の「文藝の批評家と一般士女との關係」に就いて幸田露伴氏より左の書面を受く、我社は特に誤植の罪の甚大なるを仝氏に謝し併て佐々木氏の誤解せられざらんことを望む

拜呈中央公論前號第十五頁下段第十五、十六、十七行に亘りて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歌人にして歌學者たる佐々木氏の如き歌は今猶行はるゝにあらずや。

とあるは、

歌人にして歌學者たる佐々木氏の解する能はずといふが如き歌は今猶行はるゝにあらずや。

とあるべき筈にて、原稿を目睹するにあらざれば、何とも申難きも、數字の脱漏、非常の意味の相違となりて、年來の友人たる佐々木氏にも迷惑至極の事となり、また自分も甚だ殘念に存じ候。何卒此文御掲載御訂正なし置下され度候草々敬具

一月廿二日　　幸田露伴

中央公論編輯局御中

文士初對面錄（その三）

天中天

▲登張竹風氏（ノ一）『都下の某雜誌は每號のやうに僕の艶聞なるものを書き立てゝ居るさうです、僕のやうなものに艶聞なんて意氣な事が……えゝあるんださうで、實に有り難い譯です』快辯で、洒々として　そして好男子で……その辯解には天中天も聊か頭を掻いた、それが白山御殿を東西に俥を乘り廻して探して居ると、二十ばかりのが指ざしして『登張さんはあすこですよ』と教へて與れたのから、此高輩には南に嘲風、北に竹風と、聞えて居るのを耳にした事があるから、多少逆易した氣味もあつたのである（つゞく）



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず。

▲英國は日本を賣れり

「アウト、ルック誌」

英國人にして少しく名譽と自重の念とを有せりとせば、彼は近來甚しき苦痛の感情を起さゞることを得ざりしなるべし、彼は屢々英國の政府及び其同胞の或者が日英同盟の規約に忠實ならざりし數多の事實、即ち一言以て之を掩へば英國は日本を賣れりてふ事實の記事を目にせるならん、彼にして名譽と自重の念あらしめば、其不快苦痛の感情を起すべき果して幾何ぞ。

英國が行ひる第一の非行はバルチック艦隊に向てウエルヒ石炭を多量に供給せることなり。石炭の賣買の如き假令政府が嚴重なる禁止を行ふ

も時として法網を脱して之を密賣するものを出すは間々あり得べきことにして、是れ偏へに國民の愛國心及び自重心に俟たざるべからざることなり、然るに我英國民が同盟國の利害を毫も顧慮する所なく、多量に之を賣却せりといふが如き偶々以て我英國民の深き國民性を有せざることを證するものにあらずして何ぞ。而して殊に怪しむべきは我操觚者も亦之に對して極めて冷淡に、其當事者を非難する者さへあらはれざるが如き何たる有樣ぞや、宜しく大膽に其主動者を攻擊し、以て我國民の名譽を保つの道に出でざるべからざるなり。

第二の非行は埃及政府の行動にして、露國運漕船をしてサイド港に於ける露國驅逐艦に向て石炭の運搬を許可したるは如何なる理由に出でたるや予輩の怪訝に堪へざる所なり、今一千八百九十八年同政府が行へる先例を顧みれば今回の行動の甚た妥ならざるを知るに足るべし。卽ち當時カマラ水師提督が極東に航海を試みんとする際、サイド港に於て自ら西班牙海軍大臣に送れる書簡を一讀せよ「予輩はペラヨに石炭を運搬せんとし、埃及政府の許可を得んと欲して四日間待ち居れり、然れども此運搬は政府によりて禁止せられ、且つ埃及の港より退去すべきことを命せられたり」と、前例已に斯の如し、況んや今回の事の如き直接同盟國たる日本に大關係あるのみならず、又實に我英國にとつても少からざる利害を及ぼすべきに於てや、且つバルチック艦隊に向て印度洋及び支那海に於ける中立港を開放し、毫も之に向て干涉せんとするの意向なきが如き、全く日本に對して少からざる不利有害なる行動にして、日英同盟の規約を忘れざる英人にとつては甚しく屈辱の念を與ふるものといはざるべからず、而して此等の事皆英國政府の熟知する所にして而かも之を不問に附す、我等は之を思うて我政府の公明ならざるを轉々悲しまざるを得ざるなり。

第三の非行は水雷艇カロリン號がテームスよりリバウに向て遁走したること及び英國の汽船が石炭運搬船としてバルチック艦隊に使用せられたることなり、是れ明かに英國が中立の態度に背けるものにあらずして何ぞ。カロリン號の場合に於ては船舶建造會社ヤッローは其船は賣られたるものなることを提督に注意したりといふ、提督は何事をもなさず、船は自ら英人なりと稱する二人によりてテームスより取り去られたり、我等はかゝる先例の未だ嘗てあらはれたりしを聞かざるなり、是れ明かに最も重大なる罪惡の一にして之を德義上よりいへば非愛國的行動たり、之を法律上より見れば違法の動作なりといはざるべからず、又カロリンの遁走と同時に英國汽船ロッダムはスダ灣に進み又バルチック艦隊の爲めに石炭を輸送せり、其船の名は明かに知られ、其船を所有する會社の名も明かに知られ、且つ法律は現存して、かゝる船を所有するものは禁獄の刑に處せらるべきものなるも亦知らるゝに、如何なれば法律は恬として之を强行せざるや、實に奇怪千萬といはざるべからず、又吾人は地中海に於て一大艦隊を有し、クリート島に於て特殊の權利を有するものなり、而して通行を許すべからざること極めて明瞭なる露國艦をして默許して通過せしめつゝあり、

最後に來るものは彼の北海會議なり、これ少しく思慮ある人は日本が確かに與かり知らざりしことを認むべき侮辱を提げ來りて我同盟國たる日本を苦しめんと欲するの謀に過ぎざるなり。日本は此國際間の會議より除出せられたり、是れ明かに日英同盟第四條の破棄なり。第四條の規約に於て兩國は其同盟國の損害となるべきことを他の勢力と共に協議せざるべきことを誓ひたるにあらずや、我外交官の行動一に何ぞ正大ならざるや。

以上列記したる英國の行動は[illegible]

大なる結果を來すべきことを忘るべからず。吾人をして暫らく地を換へて日本の地位に立たしめよ、敵の一大艦隊が我英國に侵入せんとするとき、日本のあらゆる行動が條約を無視し、同盟の規約を破棄するものならしめば吾等は日本人は英國を賣れりと激怒せざるべきや、日本人の胸中亦必ずや此思に滿たさるゝならん、唯た彼等は之をあらはさゞるのみ。而して我英國のかゝる非行は確かに露國政略家の乗ずる所となつて他日必ず臍を噛むの悔を殘さん、即ち露國は今回の戰爭に於て日本の驚くべき一大勢力たるを認め、而して又日本の同盟に對して忠實なる國なるべきを悟り、日英の同盟を破壞して而して日露同盟を形成するの利なることを感じたり、彼等必ずや日本に向ていはん、今回の戰爭を起せるものは日英同盟の結果なり、英國は此戰爭の原因なり、而して戰爭中英國が日本を賣りたりし事實はかくの如く明瞭なり、日英同盟を破棄するに於て何の顧慮する所ぞやと。嗚呼我國の施設の正否智者を俟て後知るにあらざるなり。

今後如何なる形勢に變ずべきか、予輩の斷言し得る所にあらず、唯我國の非行從來の如く而して日本が勝利を得る曉に至らば、我等が同盟國たる日本の親愛を失ひ、同盟によりて生ずる効果の甚だ少かるべきを信ず、若し万一バルチック艦隊にして功を奏することあらば、我等は防がんとしたる狼に向て、共に努力したる友人を嚙ましむるの危禍を買ふに終るべきなり。

我英國が日本人を賣りたるは德義上の一大非難を免るゝ能はざるのみならず、又政治上の一大不利を招きたるものといはざるべからず。これ吾人の最も痛惜に堪へずとする所なり。



PRINCE MIRSKY—"I'll make him look like a new man !"

—Evans in the Cleveland *Leader*,

ビューロー伯の英獨親睦論

「ウエスタン、タイムス」

ビューロー伯が英獨兩國の關係に就て公にしたる意見に就て我論壇には時ならぬ花を咲かしめたる觀なきにあらざるなり。伯思ひらく、從來兩國に存在したる苦々しき惡意及び、誇大に見倣されたる猜忌にして根底より切斷せらるゝにあらずんば英獨の關係は終に危險なる戰陣の間に相見るべきに至るべきなりと。吾人は伯が現下の如き形勢の際して、かゝる意見を公示するは、恐らくは或る特殊なる目的の存すべきことを思ひ、又此意見は彼が個人として英國に對する好意の上より出てたるものなるべきを信ずるなり。又獨逸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が西藏條約又は北海事件に於て英國に惡意をあらはしたりといふことは全く訛傳に屬するを伯は極力辯解せり。彼曰く、我獨逸は西藏條約の批准を拒むことを北京政府に干涉せりといふことは全く無根のことにして、又北海に於ける隱れたる敵につき露國に警戒を送りしといふも全く不知のことなりと。是等の辯明は最も完全に述べられたり、吾人は喜んで此等の辯明を信じ、又獨逸の對英策が極めて平和的のものならんことを望むものなり。正直にいへば我等英國人は南亞戰爭の當時より獨逸に對して嫉惡と猜忌の念を抱きたること久しきなり。何となれば獨逸皇帝は奸計を以て英佛の間を裂き、又英露の間を疎んぜんと試みたるものと信じたればなり。されど伯は此信念を以て根據なきものとなせり、伯曰く、余は斷言す、吾人は未だ歐洲に於ても亞細亞に於ても英露の間を疎くせんとしたることなし、否な吾人は眞に英露の何處に於ても決して衝突することなからんことを祈れり、吾人が英佛兩國間を裂かんと試たりといふが如きは何たる暴言ぞや。又吾人の海軍を擴張しつゝあるは畢竟英國と海戰を開かんが爲めなりといふものありと雖も吾人は實にかゝる海戰を夢想だもせざるなり、又かゝることを夢想したりとせばそは一大罪惡なるへし」と。吾人は實に此感情を謝し且つ獨逸の政策の長く續するなからんことを祈る。然れどもビューロー伯は其海軍擴張は果して何の故なるかに向ては毫も說明を與へざるなり、吾人は決して「惡事をなすの計畫はたゞ惡事をして之をなさしめよ」といふ格言を忘るゝこと能はざるなり、若し獨逸の吾人に對すること以上の如き善意の外他あらずとすれば吾人も又喜んで之に應ずるの態度を取らんことを欲するものなり。我等は一も獨逸と爭ふへきの要なし、對外の政策に於て又は殖民政策に於て我等は決して獨逸を敵とするものにあらず、若し皇帝（カイゼル）にして猜忌、貪慾の念なく、又惡意を以て我に對するなくんば、我又好意を以て彼を迎へんと望むものなり。

ビューロー伯の此意見は個人の好意のみより出でたりとするも頗る歡迎すべきものにして、之が爲め從來の不當なる嫉惡、誇大なる猜忌の念を散ずるを得るもの蓋し少々ならざるべし。吾等は將來に於ける英獨の關係は恰かも現今の英佛又は露獨の關係の如くならんことを望む、されどもかゝる問題は口頭又は約束の間に成立するにあらずして全く事實の成行如何によりて決定す。予輩は從來英佛の間に有せし嫉惡、猜忌の念を去り、以て親厚たる關係を生ずるに至りしことを事實の上に證明せんことを望むものなり。

露國航海業及出征の起源

「ノーウオウレミヤ」

露國「スラボニヤ」人種は始め歐洲の北東部波羅的海の沿岸に割據散住せしが、「ラドガ」湖「オネーガ」河を始めとし內地は水利に富み灌漑の便あり殊に其蕞爾の地たる波羅的海並白海芬蘭灣「ボトニック」灣等の海灣に環繞せられ水路交通の便少なからざるを以て彼等は自然厚生利用の必要に驅られ孤立索居の生活を捨てゝ群聚團結の利に就けり此の如くにして「スラボニヤ」人種は一年聚落を成し三年村邑を成し以て今日の如き強大なる露國に統一せられたるなり加之ならず水量豐饒なる「ウオルガ」「ドネーフル」西多瑙河の如き大河は極北の波羅的海及裏海に對し露人の爲めに殆ど間斷なく利便なる軍用並に商業的要路を聯絡せるを以て南歐及東亞の豐富なる物產は皆此通路に依りて北部に輸送せられたり我、露國歷代の諸侯が南下しつゝ地方を經營したること亦此の水路に由れるなり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

柳も我露國の未た今日の如き一大帝國を爲さざりし時各地に割據せし大小の侯伯が各自の手兵を南露に派遣し以て荊蕀を拓き耕耘を奬むるを得たるは亦唯た此内地の水運に依れるのみ蓋し其當時に在りては我内國に於て陸路殆ど之れなかりしが故に此等の河湖は地方住民の交通の爲めに唯一の方便を現はし以て自然に我國民の海事思想を發育したるなり左れは露西亞帝國の創建と共に諸侯の從卒は一葉の獨木船に乘し狂瀾怒涙を冒しつゝ大海に航行し希臘帝國の主府たりし今の君士坦丁堡並裏海の民物揭盛なる瀕岸に抵りて交易をなし最も富厚なる商利を博したるなり

八六五年我露國太祖「リューリク」の從兵は二百隻の艦船を艤裝し之に搭じて直ちに君士坦丁堡の城下に出現し甚富を占領せり此れ我が露國人が水軍を以て希臘に出征したる嚆矢なりとす之に次て我君侯「オレーグ」「イーゴリ」及「スウヤトスラーフ」多腦河沿岸地方を徇へつゝ屢々兵を出して希臘を攻伐し連りに之に克捷せり英武なる「スウヤトスラーフ」侯の子「ウラヂーミル」は又「ウオルガ」河の沿岸地方に進軍し終に希臘領の「ヘルソネス」を畧取せり尋いて一〇四三年「ヤロス、ラフ」侯は希臘領の黒海々岸を徇へ要地を占領し種々の財寶を捕獲したるが希人は大に其威力を畏れ終に黒海を露國の勢力範圍に



RUSSIA — "I indorse your peace conference, all right, and would like to be with you, but I'm afraid I can't come just at present. I am busy now."

—Spencer in the Denver *Republican*

委れ露國と稱するに至れり此れ露國が希臘攻伐の最後なりとす八八〇年より一一七五年に至るの間露國人は又裏海々岸にも出征し今の「バヲウ」市に對向せる諸島を根據として茲に艦隊を碇泊せり

此の如く露國の海上權は勢焔日に盛んなりしに國内に割據せる大小の諸侯は相互に政權爭奪を事として干戈を以て相ひ見内亂滋擾して民情恟々たる折柄慓悍猛暴なりし蒙古人は大軍を編制して露國に侵入し諸城を攻畧し其過ぐる所盡く殲滅せり是に於て露國の南海に於ける海上權は全く絶滅せられたり其後蒙古は「カザム」及「アストラカム」に國を別立し又土耳古人か帝國を攻畧したる爲め露國は黒海及裏海に通ずる要路を中斷せられたりしが獨り北部の海上貿易は露領「ノウゴロド」市民の剛勇果敢なりしに依り其壓迫を免れたり然るに是より先き隣國の瑞典人は波國人と相敵視せるが其をして波羅的海に出沒せしめさらんと欲し鋭意露國船舶の航通を威迫したるが露國は水陸兩道より頑強に瑞典人の攻勢運動を拒止せり

此時に當りてや「ネヷ」河は露國内地を貫流せる大河の水路より波羅的海に對する出口なれば我が「ノウゴロド」人は之を占領しつゝ優に海上貿易權を握り「ラドガ」湖並芬蘭灣の瀕岸に住せる「コレーラ」「エスツヰ」及

「エーミ」等の人種を征服し貢税を納れしめたり而して我露國の英武なる「イワン」帝が一五五六年に蒙古人の占領せる「カザムアストラカム」を攻陷せるに及んで我が露國民は再ひ裏海に航通するの自由を得たり次いて一五九五年瑞典人の爲めに我露國の波羅的海に於ける海上權は一時全く掌握せられたるが故に我露國は已を得ず北の方白海、南の方黑海に向ひて航道の出口を求むることゝなれり此時に當りてや「ドネーブル」及噸河附近に住殖せし哥薩克人は土耳古人の兩河の河口に堅牢なる堡寨を築きて其侵入を防ぎたるに拘はらず膽勇に小船に搭して屢々黑海に進航し君士坦丁堡の城下に出沒しつゝ大に劉掠を恣まにして時の土廷を震慄せしめたり

其當時に於ける我露國侯伯の坐乘せる船は重もに河湖航用に供せる爲め務めて其構造を輕便にし吃水を淺くし操縦を自在ならしめたりしが其船や大なるものは五十人を容るべくして橈櫂を双方に具備しつゝ漕ぎ行くものなりき左れば海に航するときは其沿岸を航通するを常としたれども順風なるとは之に帆を掛け沖に出てたり然るに時としては暴風に遇ふことも之れありしが故に豫め蘆葦の韋軸を以て綢繆せる索帶を準備し若し其船の損傷を受くるときは數隻を其索帶にて結合し船舷に緊結して以て水上に浮泛するの裝置をなせり此時代に於ける希臘の艦船は其兩舷樓高にして且つ種々の武裝火器を具へ一見其軍艦たるを知るべかりしが我露國の船舶は前記の如く極めて粗造なる一箇の木船なれは之と比較すべくも非ざりしに我水兵は猛然之に臨んで希國人と接戰奮鬪したるは此れ唯た我水兵の豨突的膽勇の致す所なりき

十六世紀に於ける軍艦建造の計畫により我露國に於て較や完全なる船を始めて造りたるは「ミカイル」帝の臨御の時にして長さ一二〇呎桅檣三本、槐三挺を具備したる帆船なりしが名けて「フレデリッキ」と曰へり木船は裏海に向け進航の際「ダゲスタン」岸附近に難破せり第二は一六六七年「アリヨール」と稱し其造船材料より造船技師並船長以下の乘員に至るまで盡く和蘭より購入及招聘したるものなり木船は竣工の後裏海に進入し北部の「アストレカン」港に抵りしが海賊の爲めに燒かれ乘員は悉く四散遁逃せり是より先き英國の商船は白海の南端「アルハンゲリスク」に出現せしが此時より外國は露國と西歐諸國との海上貿易權を其掌中に把握し我が露國人をして西歐に容足せしめさる樣百方之を妨碍せり加之ならず外國の商人は露國政府の與へたる特許に滿足せずして「アルハンゲリスク」に來航するも其入港規程を遵守するを希はず濫りに種々の不法なる行動を敢てせり是に於てか我が露國政府は斯る外國の不作法を默許したらんには勢ひ彼等は海路より西伯利に容脚し玆に隱然根據地を作り出すべしとて大に之を憂慮せり

「ミカイル」帝君臨の時に一旦瑞典の有に歸せし波羅的海岸「リーガ」港より「ネワ」河に至る沿岸線を再び露國に取戻さんことを企圖し露國は三面より軍隊を瑞典の領内に進め瑞典人と交戰したり幾くもあらずして一六六一年媾和談判となり條約を締結せしが此條約は露國の爲めに不利にして「ネワ」河は依然露國の領海岸より分離せられたり然るに我露國の希望は最も熱摯にして特に意志剛强なる「コーケンガウゼム」市の大守なる「チルデン、ナシテヨーキム」は大に露國海權の恢復を謀り多瑙河に於て着々數隻の軍艦建造に着手したり蓋し氏の目的は先づ「リーガ」港を占領し而る后新造軍艦を率ゐて遠く海に出てんとしたるなり

此に至りて露國の海軍は他の西歐諸國を模範として發達せる立法、行政、兵制と俱に漸く羽翼を生じ朝野の士人翕然として以爲らく鄰國の煩瑣なる干渉を絶ち露國をして厳然たる獨立國と爲さんには須く先づ樞要なる海港を占斷し艦隊を編制して以て彼得大帝の遺業を大成せざる可らず

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と露國朝野の苦心慘憺實に吾人の豫想外に在りと謂ふべし

冬期に於ける日本軍

「スタンダード」

冬は巳に滿洲の野を見舞ひて日本軍の最も戒心を要すべき時とはなりぬ、日本軍は如何にして此期間を經過せんとするか、是れ吾人の玆に解釋を試みんとする問題なり。

滿洲の氣候は夏季甚だ暑くして、冬期甚だ寒しといふ漠然たる事實の外未だ世に知られず、其精細なる調査は吾人の未だ耳にせざる所なり。六ケ月間滯留せる吾人の經驗に徵すれは、滿洲の天候は恰かも英國のそれの如く、變化急激にして朝以て夕をトすべからず、之が斷定を下すことは到底不可能のことゝいはざるべからず、若し斷定を下すも必ずやその獨斷に陷ることを免れざるべし。夫れ滿洲の地たるや廣漠として緯度十五度の間に跨る、地の南北によつて其溫度の異なるべきことも論を俟たず、之を槪括して滿洲の氣候を云々するは彼地に住居する古老と雖も甚だ難んずる所なるべきを疑はず。加ふるに高山、深谷、原野各々其趣を全じうせず、遼陽に於て嚴密なる調査を試むるも、そは哈爾賓又は浦潮新報とは何の關する所なかるべきなり。今各地に於ける稍正確なる事實を記載せんに牛莊に於ては遼河は十一月中旬に於て氷結し四月初旬まで融解せざるなり、又浦潮は十一月一日より四月の中旬まで結氷す、而して最低溫度は華氏氷點以下十五度にして、正月は平均華氏五度、四月は華氏三十九度なり、奉天に於ては正月の平均溫度華氏四度にして四月の平均溫度華氏五十一度なり、哈爾賓を通して流るゝ松花江は十月の初旬より五月まで結氷す。日本軍の行動すべき滿洲の野は實に冬期かゝる狀態にあるなり。降雪は極めて薄くして晝間太陽の光溫かなれは融解して蒸發す。空氣は乾燥にして淸淨なるも、只北風の吹き荒ぶときは人をして凍死せしむるの危險あり。而して北方に進むに從ひ、漸次其寒氣も激烈にして、日本軍が庇護所を求むるの困難一層甚しかるべきなり。

那翁が莫斯科より退却せるは實に霜雪の爲にして、露國の最も恐るべきは此霜雪にありといふことは世の一般に信ずる所なるが如しと雖も、少しく歷史の眞相に立ち入りて研究するものは必ずや其退却の一半の理由は佛軍の準備不完全にして、霜雪の激烈よりは此霜雪に對する用意の缺如たりしによることを發見すべきなり。其他數次の戰爭に於て露國の



THE CZAR—"Well, here's a pretty how do you doski!"

—Reid in the Kansas City *Journal*.

(The Zemstovos means the County-councils.)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露軍人を凍死せしめしこと歴史の證明する所なりと雖も、これ皆其準備用意の不完全なりしが爲めにして、若し準備用意さへ完全ならしめは、世の信ずる程しかく恐るべきものにあらざること疑を容れざるなり、食物充分にして衣服薄からざれは此寒氣に堪へ得べきこと西比利亞を旅行したるものゝ實際語る所なり。日本人は大陸北部の寒氣には慣れずと雖も彼等の忍耐強きことは明らかなる事實にして、殊に日清戰爭の當時氷雪の中に起臥し、氷雪の中を進軍したる經驗あり、勿論其地位は遙かに南部にありしと雖も温度は零度以下に降りしこと珍らしからず實際に於ては今回の困難に決して讓るものにあらざるなり。且つ降雪の薄きが爲め進軍及び運搬の容易なることはいふまでもなく、又河川の氷結は橋梁船舶を用ひずして渡ることを得べきは甚だしき幸といはざるべからず。然れども前述の如き事實なれは食物及び被服に向て充分なる準備をなすことは容易の事にあらず、日本軍は冬期に於て甚だ僻易するが如きことはなかるべきも進軍的大行動を試むることは或は其難しとする所なるべし。

列國仲裁の進行

「イラストレーテッド、ロンドン、ニユース誌」

極東に於ける戰爭は今尙其進行を繼けつゝあり、殆んど一年に亘らんとする空前の慘劇を演じて而かも兩國未だ其の局を收めんと欲するに意なきが如きは實に廿世紀の文明を辱しむるの觀なきにあらざるなり。然れども今に於て之を咎むるも何の益なし、我等は兩國が漸次戰局の眞相を自覺し、遠からず平和の終結を見るに至るべきを疑はず、且つや列國

にしたるの觀あるを見れば、吾人の豫想の事實となつてあらはるゝ必ずや遠きにあらざるべし。若し歐洲に於てナポレオン、ボナパートの如きものあらしめは太平洋より太西洋に至るの天地は悉く戰雲の慘憺たるものを見るに至りしやも未だ知るべからず、然るに僅かに露の本國を除くの外、歐洲の諸國靜謐にして皆よく中立の態度を取り、今や仲裁して此戰爭を終結せしめんと勉むるは流石に廿世紀の文明國たる名に背かずといふべし。

而して列國中殊に歐洲の平和を維持せんことを主張するものは、恐らく英佛の兩國なるべし、英佛の條約は思慮ある兩國民の共に眞摯なる感謝を表する所なり。此條約の締結に對して妨害を試むるもの多くありしは公然の秘密なり、獨乙は之を恐れ、露國は之を憎みたり、然れども幸にして其成立を視、今や極東の戰局に於て最も溫和なる仲裁を試みんと欲するの徵候明白となれり、又太西洋の彼方に於てはルーズベルトの平和論漸く勢力を有し、これも亦進みて極東に影響を及ぼすべきこと必せり。日露兩國にして列國の好意を容るゝこと吝ならずとすれは早晩其戰局の終結を見るに至るべきなり。予輩は此仲裁の進行を見て、列國の態度のいたく文明的なるを喜ぶを禁じ得ざるなり。

露國財政上の大困阨

「ヴアニテイ、フエア誌」

日露戰爭の開始せらるゝ凡そ一年前、第一流の經濟學者は揚言して曰く、「露國は常に其歲入に超過する生活を營みつゝあり、若しかゝる狀態にして繼續し、負債又負債、其底止する所を知らさらは其終結や如何な

其宜しきを得ず、歩一歩、深淵に入り、衰落に向ひ、今や其光景最も憐憫を極めて、厭世論者の想像も其實狀を措く能はざる程に至りたり。

日本も戰爭の遷延によつて財政上の困難を感ずべきは當然の事實なり、然れども日本の貿易は開戰以來却て增加し、爲めに其幾分を補ひ得るに反し、露國の商業は益々不振の有樣を呈し、從來の困阨をして一層甚しからしめたり、且つや露國工業者の困阨は實に甚しく勞働者は赤貧に陷り、資本家の信用は全く地に墜ち、銀行等の破產するもの續々として相次げり、露國政府が豫算案を作りて人民より徵收せんと計畫を立つることは容易なるべし、されど實際人民の狀態を一瞥すれば其計畫の空論に終らざるべからざることは最も明白の事實なり、今一々數字を以て露國の負債を明示することは不可能なりと雖も、若し今後戰爭の繼續することあらば露國の負債は益々增大し、之が爲めに自ら殪るゝの止むを得ざるに至るべきなり。露國政府が戰爭の準備として見積りたる金額は一億二千万磅にして內、二千八百萬磅は軍事費なり、又公共事業の中止によりて生ずる金額は一千四百万磅、五百万磅の寄附金、三千二百万磅の佛國公債、又四千百万磅の國庫兌換金額等より成れり。而して此等の金額は今や殆んど空盡せられ、今後の戰爭費は又もや負債を起して之に充てざるべからざるに至れり、然らば露國が果して戰爭を繼續し得べきや否やは實に彼の外國公債を募り得る金額の如何に依るべきものといはざるべからず、何となれば露國は此上其人民より徵收すべき見込は毫も有せざる地位に立てはなり、ウヰテ氏の語る所によれば一千八百九十三年より一千九百三年に至る十年間の豫算案を見るに十億ルーブルより二十億ルーブルの巨額に上り、露國人民の徵收に應ずべき力の最高に達し、若し此れ以上に至らば必ず一大變亂を起すべきことを論じ、西比利亞鐵道に向て一億磅の巨額を費したるは抑々財政上の困阨を惹起せる根源なることを說けり。



POOR NICK!

—Shiras in the Pittsburgh *Chronicle Telegraph.*

若し西比利亞鐵道に投ぜられたる一億磅の金額を內地の事業に向て使用せば露國財政上の面目大に見るべきものありしならんに、空しく曠野に向て金塊を放棄したるの觀あるは惜みても余りあることなり。

今や露國は佛及び獨の財政者に向て五千二百万磅の新たなる國債を募りつゝあり、されど若し戰爭にして繼續せば其消費せらるべきも迅速の間にして彼は再び又外債を起さゞるを得ざるべし、彼の財政上の大困阨に陷れる已に斯の如し、彼れ戰敗によりて速かに局を收むるにあらずんは。財政上の困阨によつて進退谷る

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の悲境に沈淪せざらんとするも得べからざるなり。

支那人の負傷と大山大將の同情

「グラスゴー、ヘラルド」

吾等が負傷者を看護せんが爲めに最初に向ひたる地は遼陽なりき、六月の初めウエストウオター博士と共に種々の準備を整ひ、赤十字病院の組織を作りて、五十の病床を購ひり、然れども七月に至りては非戰鬪員にして其助を求むるもの續々として出て月の終りには三百人の同居人を見るに至れり、八月の末遼陽の戰爭其狂暴を極めつゝある時に至りては男といはず、女といはず、小兒といはず、三々五々、或は數十人列をなして頻々として集り來り、病院に充溢したるのみならず、他より借れたる建物も悉く滿たさるゝに至れり、而して九月の初めに於ては支那人の負傷したるものゝみにて已に三百人に上れり。

こゝに此事業と關聯して一の面白きこと起れり。そは日本の陸軍總督大山大將の多大なる寄附を與へられたることなり、一日參謀福島將軍はウエストウオター博士を訪問したれば博士は彼を病院に伴ひたり、彼は其目に觸るゝ所のものをいたく喜び、博士のなしたる事業に向て充分なる感謝の辭を呈し、且つ數日來の戰爭が支那人にまでも多大の負傷をなさしめたることを非常に後悔したり、彼は又翌日來りて大山總督より傷者を見舞ひ且つ病院の資本に向て一千弗を寄贈すべき旨を命ぜられたることをいひぬ。此等の負傷者は日本人の同情厚きことに感激し、皆頭を低れて其謝辭を述べたり。大山大將の恩惠は我等の永く忘るべからさる所なり。

厭世は人生をして高尚ならしむ

「リテラリー、ダイゼスト誌」

左の論はジヨン、ミルトン、スコツト氏の書せるものにして其思想大いに見るに足るべきものあるなり。

人若しヴアイオリンを彈き、又は大理石彫刻をなさんことを學ぶときは、必ず一時或は失望の感に打たれ、一時或は落膽の思に沈まん、換言すれば彼は厭世の念に陷ることを免れざる時あるべし。空に一點の雲翳をも止めざる日なきが如くに、心に、一瞬の失望をも抱かざる日はなかるべし。されどこれ吾人の道德的生活にとつて決して憂ふべきにあらず、吾人は之がために却て一層高尚なる生活思想を得んとするに至るものなり、吾等が失望落膽の思を起し、厭世の感に打たるゝ時は即ち我等の欲望が余りに高くして到底實現の見込なきが如き時にあるなり、されど憂ふる勿れ、この時間は決して吾等にとりて無用にあらず、又吾等にとりて徒爾にあらず、われらは此等の時間に於て初めて我等の目的とすべき高尚なる標的を認め、我等の到達すべき理想を知ることを得べきを以て我等にとつて最も高貴なる時間なりといはざるべからず、而して其感念の去るや恰かも嵐の吹きたる後の如く、雨の降りたる後の如く、四邊の光景俄に明快を加ひ、人生の高尚ならしめ得べきことを痛切に感ぜしむるなり。

人若し世界の改善を計らば、彼は必ず此失望と此落膽即ち厭世の感情

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を味はざるべからず、何となれば厭世に陷りたることなきものは決して明かに人生の理想如何を知らず、從て現實を評價することも到底不可能のことなればなり。厭世の感念にうたれつゝある時は理想の生活が現實の生活を批評しつゝあるの時なり。

神の心は恰かも美術家の心の如し彼は創造の力を以て自ら思ひ浮ぶる美想を實際としてあらはさんことを願ふものなり。美は地上にも散布せり。而して人間にも心あり、我等は善を意識し又美を感受す、我等にも苦しみあり、喜びあり、我等も一個の美術家の如く其思想感情を實際としてあらはさんことを願ふものなり、吾等は理想を夢みつゝ之を實現せんとし、幾度か失敗し、幾度か失望す然れども之が爲めに理想の存在は益々明確となり、吾等の向上心益々勃興し、其努力奮勵は常に人生をして高尚の域に導かんとす、即ち吾等は厭世の味を解せざれば、理想の趣を知らず、理想の趣を知らざれば高尚の域に入る能はざるべし、然らば厭世を以て人生を高尚ならしむる基なりといふ何の不可なることあるべき。



UP AGAINST IT.

"Give me a few rights. Get busy!" "Can't you see I *am* busy?" "Well, you'll be twice as busy if you don't listen to me."

Culver in the Baltimore *American*.

柔かなる食物は小兒に害あり

「リテラリー、ダイゼスト誌」

余りに柔かなる食物を小兒に與ふるは却て有害なりといふ事實は英國醫學會に於て諸大家の學說の一致する所なり。

ターナー氏は小兒に向て柔かなる食物を與ふるは骨爛病の基にして、酸類の醱酵を受くる所の澱粉と砂糖とは齒に於てバクテリアの襲ふことを助くものなれば殊に危險なり、之に反して堅き食物は骨爛病の防禦となり、又唾液の分泌によつて口部を清潔にし、黴菌等の侵入を防ぐといへり。又ハーリー、カムベル博士も又同樣の問題を論じ、小兒に澱粉質の食物を與ふるときは彼が自ら咀嚼し得る形に於てすべきをいひ、若し小兒に柔かなる食物をのみ與ふるときは消化器の發達を妨げ、且つ食道其他の部分の强健なる發達を得られず、又齒も不規則にして速かに朽ち小兒は腺質病に罹るべきことを論じたり。而して最後に擧げたる腺質病は全く食物上の病氣なることは博士の斷言したる所なり。又博士は小兒

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生後七ヶ月にして固き食物を與ふべしといへり、これ其時に至れば截肉及びパン、ビスケット、及び果實等を舐り得る程に達したればなり。かゝることを行ふときは小兒は自然咀嚼する力を得、消化器其他の機關の發達を速かならしむ、若し澱粉質のものまでも咀嚼を要せざる如き形に於て小兒に與ふるは却て其身體を弱からしめ、諸種の病源を惹起するに至るべきなり。世の親たるもの大に注意する所あれ。

文士初對面錄（その四）

天中天

▲登張竹風氏（ノ二）　正岡藝陽が新聲に居た時分、始終引張り出されて大分書かされた、お蔭で文名も盛んであつたが、其名は甚だ重きをなさぬ名て、氏の眞價は人は廉く買つて居た、だから新聲に書いたのは氏の爲めには寧ろ不利であつて、新聲が倒れてから、却つてその眞價は認められた、これは餘事であるが、其頃は藝陽が毎日のやうに來て、氏には隨分惚れて居た『藝陽も中々才子て筆も達者だが、金遣ひが荒いもんだから失敗するんてす』『あれも餘程艷福家てすよ、面に似合はないもので』氏曰く、『が、藝陽だの鐵幹だのは、あれは艷福ぢやない、艷禍頻りに至るのてす、ハヽヽヽヽ』これは氏の名言て、由來艷福は多く艷禍なので、氏の言として最も聞くべき價がある

兎に角氏は交際家て、人をアツトラクトする力を有つて居る、その洒落なたちに似合はず、取次の人――多分大學の人てあらう――の丁寧なのは驚くばかりてある、これが初對面て天中天もアツトラクトされて時時は顏を見に行く氣になつた

雜録

明治闇黒史

有磯逸郎

○征韓論勃興前後の暗潮

『アヽ、酔つた、此頃は年を老つた故歟、二三合飲むと、直ぐ酔つて仕舞ふ、どうも酒と女は、氣力に伴ふやうに思はれる、二三合の酒で、へたばるやうでは、到底天下の時務を論ずる譯にはゆかない、何んぢや！、貧乏してゐるからぢや、或は其樣かも知れない、アハヽヽ』

『此頃戰爭は如何な模樣ぢや、斯んな場所に燻つてゐては、號外賣の聲で、進行を知る位が關の山、頓と實際の模樣が判らぬ、ナニ、日本の軍隊は強い?!、判り切つたことぢや、君等は今日初めて其樣な事を知つた

のぢやらうが、我輩等はちやんと明治初年より知つてゐた。其れにしても、政府の役人諸公は、戰爭後、滿州を如何する積りぢやらう、滿洲といへば、今一層手近かい朝鮮―對韓策は如何な模樣てある?、知らない！。今の若い奴等は、之だから困まる」

「明治の歷史は、國會開設前までは、薩長土肥の權力の消長史て、絕へず御殿女中のやうな暗鬪は試みられてゐたが、火花を切るのが何時も朝鮮問題ぢや、色んな異分子が寄つてたかつて出來上つた明治政府が、初めて大破裂を起こしたのは、明治六年の征韓論であつたらうではないか、まアさ、內部には種々なこんがらがつた事情があつたぢやらうが、表面の口實は、何時も朝鮮問題だらうではないか、明治十七年に、後藤象次郎が、自由黨の壯士を提げて、大陰謀を企てたのも、朝鮮、今度の戰爭といつても、舞臺は滿州てあるが、矢張朝鮮は眼目、乃で我輩は朝鮮を中心として、三十八年間の明治史を見ると、餘程面白いぢやらうと思ふが、如何ぢやらう、何んだか話說は傍に反れたが、陰謀史の本舞臺に入る前に、ちよッぴり征韓論勃興前後の、我國の社會狀態を聞かさう」

「我輩の若い頃に、時々我輩の宿へ尋ねて來た青年の中に、千屋靜一といふ男がゐた、九州鐵道會社の千石貢や、鹿兒島縣知事の千頭清臣の親友て、當時民間て幅を利かせた土佐の青年の中でも、氣慨ある、有爲な人物て有つた、我輩の知つちよる中て、秘密運動を試みたのは、此の千屋某が、一番早かつたやうに思ふ、名も知らない男ぢやといふのか、其樣ぢやらう、まだ眞個の書生て、その陰謀事件も、今日知つてゐるのは、千頭か我輩位のものぢやらうよ、千屋メ、明治三四年頃より、如何して知つたものぢやか、共和論を唱いてゐた、ナニ、共和論といつても、今から見ると、極めて空漠としたものぢや」

「一體慶應三年――明治元年に、薩長土肥の豪傑連が拵へ上げた明治政府は、赤本の終りてはないが、德川を踏み倒してめでたかつたが、當時日本の民心――社會の實情は、赤本の終りのやうに、決してめでたづくめでは無かつた、その證據には、少しく整理の緖についた明治二年に、開國論の親玉橫井平四郎が橫殺せられた、と思ふと、間もなく西鄉隆盛をへこました大村益次郎は、何人の手にか音も香もせず、ふうわりと要擊せられた、長州の矯激兒大樂源太郎は、君側の姦を拂はんと、凄い科白を駢べて、奇兵隊を率いて起

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ち、三年の七月には、米澤の雲井龍雄は、政府顚覆の計畫を立て、四年の三月に小河眞文、十二月には外山光輔等は、陰謀を企て、その間に今一寸名は忘れたが、何んとかいふ男の發頭て、新潟縣に新政府反抗の暴動を起こしたものもあつた、五年になると、ソラ眞堂中提灯を携へた例の丸山作樂は、朝鮮問題に激して、陰謀を企てたのは、君も知つてるぢやらう、丸山の計畫は、彼の男の人物と同じく、豈提灯的て、仰々しく數へ立てる迄もないが、兎にかく今より三十幾年前といふ、二タ昔も三昔も前の、明治五年に、朝鮮問題を標幟として陰謀を起こした一事は、買つて遣るべし、その翌年には、西郷隆盛等の征韓論が起つて、とう／＼あの騒ぎに成つたのぢや」

「雲井龍雄以下の政治的陰謀ばかりぢやない！、明治三年の終より、明治四五年の間には、種々の暴動が起つた、今日から見ると、滑稽の沙汰てあるが、新時勢を不快とした民心を煽いて、當時種々の暴動が四方に起つたのぢや、明治三年の十二月といふ推し詰つた極月に、佐久間象山を出した信州松代に、藩制、紙幣に不平を起して百姓一揆が起り、明治四年に入つて、讃岐の農民は、舊藩主が東京より歸らざるは領民を捨つる者である、と眞向にリキんて騒動を起こし、その十月には飾磨縣の農民は、四民平等の令を以て、之は何んでも穢多と同視するものなり、と神西神東兩郡の農民數千名、蓆旗を立てゝ大騒ぎに騒ぎ、度會縣では、又伊勢の神宮は東京に移さるゝ、といふ有らぬ風説に激して一揆を起こし、高知縣では、奇妙頂來不可思議にも、新政府が徴兵令を布き、その年齢を調査するのは、小兒の膏を取るのに相違ない、と暴動を初め、その他彼地にも此地にも、之に類似した百姓一揆が四方に起つた、今より思ふと、大阪俄を見たやうな變挺來な心持がするが、茶番狂言を演ずる爲に、一揆を起こす馬鹿もあるまい！、百姓一揆の是非は兎も角も、その精神は、最も民心を裸體に現はした社會の現象て、爾うして百姓一揆の中にも、偶々歷史上の眞理が備はつてゐる場合が多い……………表面に現はれた右のやうな事實ばかりてなく、その裡面には、今の暢氣な小說家などの思ひ到らい、一條の社會的潮流が、順序を追ふて流れてゐたのぢや」

「明治初年より、明治六年迄は、斯んな鹽梅式で、到る處に、百姓一揆が起つてゐた、爾うして何んぢや、暴動の前には、人は知らぬが、必らず其の前に、秘密

運動が行はれる、爾うして明治六年に至り、朝野の眼を驚かした征韓論となつて、廟堂の上にも、百姓一揆が起つたのぢや」

「征韓論の結果は、世人が猫も杓子も知つてゐるやうに、西郷隆盛を初め、板垣、後藤、江藤、副島等の諸參議は、民間に下つて一段落を告げ、桐野、篠原等の陸軍將校連も、薩摩に歸つた、さア之からが厭ふべき陰謀時代と爲る、……其の第一期は西南戰役の大破裂で鎭り、次に政黨時代となつて、第二の陰謀時期に入るのであるが、明治六年より十年に至る第一期間にも、幾つとなく、陰謀は企てられたやうぢや、その中で最も著しいのは、林有造、大江卓等が、西郷の蹶起を機として、陸奥宗光と結托して、密々に運動した政府顚覆の大陰謀ぢやらう、之は後に内情を話すが、先づ陰謀史の第一頁に出づべき、千屋歸一等の運動より咄さう、事件は小さいが、人の知らぬのが價値ぢや」

「一體、征韓論破裂後、二種の秘密運動が、土佐の靑年より起つた、一ッは武市熊吉等の計畫しをつた大臣要擊の運動で、今一ッは千屋等の運動ぢや、此の千屋歸一といふ男は、高知市より十里ばかり離れてゐる牟山といふ小在所の、豪農の子息で、氣節に富んだ、凛々しい若者ぢやつた、運動を初めたのが、二十五六歳位の時で有つたらう、同國の岩田太郎や、武市熊吉等が、赤坂喰違坂で岩倉大臣を要擊した彼の運動と、殆ど同時で有つたが、其の計畫は一二大臣を要擊するを以て滿足しなかつた當時千屋は、板垣の家に食客と爲つてゐたやうに覺えてをる、其の頃食客といふ事が大に行はれ、社會に位置あり、名聲ある者は、皆んな彼の孟嘗君を氣取り、如何なる者でも、家に十人や十五人の食客を置いたものぢや、板垣の食客でゐた千屋は、岩倉大久保等が、勝手放題に國政を左右してゐるのを見て、憤慨に堪へず、板垣に勸むるに政府改革の事を以てしたが、板垣は固より一書生たる千屋の言に耳を假さぬ、武市等は、岩倉大臣一人を擊殺せば、天下の事成るやうに意氣込んでゐたが、千屋等は、岩倉一人を倒した丈けでは何んにも爲らぬ、更に荒療治を試み、一擧して、明治政府を顚覆せねばいかぬ、といふ意見を持つてゐたので、武市等と計畫を別にし、宮崎岬といふ小男を語らひ、過激中の過激手段を撰びて、政府の顚覆を謀つたのぢや」

「同志の宮崎といふ男も、我輩は二三度會つたが、左樣さ、千屋と同年輩で有つたらう、高知市から三十

里ばかり隔つたる幡多といふ土地の男で、分限者の子ぢや無かつた、千屋は、ぴか／＼眼の光つた、先づ眼光炯々とした、辯論の爽やかな男ぢやつたが、宮崎は莊重した、極めて落ち付いた、膽力の有るらしい男で、有つた、今日迄生きてゐると、乾度世に功ある事業を壯遂げてゐたて有らう、一時の血氣に急つて、刑場の露と消へたのは、如何にも惜しい」

「此の宮崎といふ男に、色々面白い話説が有る、二十歳の時とか、國より東京に上ぼる途中で、斯んな事も有つたやうに聞いてをる、船で、横濱に着いた頃は、財布の底には、文久錢一ッだも遺らなかつたさうぢや、如何したもんぢやらうと、色々腦味噌を絞つたが、妙案も出ない、其處で當時横濱に家塾を開き、遠く土佐にまで名を知れてゐた高島嘉右衞門に縋がつて見やうと考へ、乞丐か、何かは判らぬ小穢ない風體で、飄然と高島氏を尋ねたのぢや、玄關に出た書生は風體が餘りに酷いので、取次がぬ、根生のしつかりした宮崎は、玄關番の門前拂を喰つて、すご／＼歸るやうな鈍物ぢやない、兎に角も先生に會はぬ間は、歸り申さぬとどかつかと腰を下ろして、其の小穢ない身體

「詮術盡きて、不承／＼に高島氏に通ずると、如何な面の奴か、會つて見やうといふので、高島氏は坐敷に通ほした、成程穢ない田舍書生！、來意を聽くと、江戸へ來る積りで、横濱迄參つたが、旅費盡きて、東京に上ぼる譯に參らぬから、當分家塾に置いて呉れろ、といふ口上、つく／＼樣子を眺めゐた高島氏は、坐を前め、事情を聞けば氣の毒ぢやが、日に幾人も君と同じ人物が遣つて來るので、實は閉口してをるが、如何なる艱難にも屈しないといふ證據を擧ぐべし、すると或は君の依賴に應ぜぬ限りにもあらず、と靜かに人物を試驗に掛ると、ハア左樣で御座るか、其れでは其の證據を御覽に入れるべし、と、すと立つて椽側に出た」

「此の田舍書生、何を仕をるか、と見てゐると、指を手拭に卷いて、從容として坐に戻つた、手拭を取れば、思ひ詰めた宮崎は指一本を中途より切つて、高島に見せたので、高島もほと／＼覺悟の程に感じ、家に置くことを承知したのぢや、その後二年の中に、塾の取締と爲り、大に高島に調法がられてゐたが、何か意に合はぬ事があつたものと見え、後に高島氏を脫して

京に出たのが、明治六年、此時千屋歸一は板垣の家に寄り、互に意氣投合した結果、遂に政府顛覆の陰謀を企てたものと見ゆる」

「宮崎等の陰謀は、如何な趣意であつたといふのか、宮崎の眞意は、どうであつたか、我輩は能くは知らぬが、千屋は、當時頻りに共和政治を喜んでゐたやうぢやつたから、征韓論の破裂したのを機會に、其の理想を實際にせんと考へてゐたらしい、其れには、武市等のやうに二三の大臣を遣ッつける丈けでは手緩い、廟堂に飛揚してゐる連中一同を根こそぎぶつ倒した上で、國政の改革を謀るべしといふのが千屋等の計畫であつたらしいのぢや、其の手段として、皇居附近と、芝增上寺と、淺草觀音堂とに、火を放ち、市民の騷擾に紛れて、大臣を要擊しやう、といふ計畫で、由井正雪や、丸橋忠彌のたくんだ型を、明治六年に行はんとしたのぢやから、面白い、隨分粗大な計畫で、慶安大平記を讀むやうで、何んだか滑稽のやうぢやが、千屋等は、眞劍に、之を以て政府を顛覆し得べき妙計なり、と考へてゐた、同志が、幾人も居たぢやらうが、一切を沈默に附して、罪は二人で脊負つたから、何事が加はつてゐたか判らぬ」

「明治七年某月某日、三百年間の名刹と聞こへたる芝の增上寺は、一夜にして灰燼に歸した、東京市民は、大方失火ぢやらうと思ふてゐたぢらうが、之ぞ千屋等が、秘密の計畫を實際に現はした第一歩で有つたのぢや、千屋が恰も當夜は、淺草方面を擔當し、例の氣象ぢやから、吉原の金平樓に遊んで、合圖の來るのを、今か〱と待つてゐたさうぢや、が僅に芝方面に火事があつたといふ丈けで、同志より何等の報道も來らぬ、……遂に芳原に夜を明かして、市中に出て見ると、到る處、噂は芝增上寺の火事噺、併し乍ら同志の面々は如何にせるものぞ、皇居方面の擔當者も、淺草方面の擔當者も、喋し合せた場所には來てをらぬ、芳原を出た千屋は、茫然として、當時大學豫備門に居た千頭淸臣を尋ねた、君も知つとるぢやらうが、千頭は脊の低い男であつたから、此時學校から給與された單衣を貸したさうな、之は後に我輩は親しく千頭から聞いたのぢやから嘘ぢや有るまい」

「斯んな具合で、市中燒拂の大計畫も、あはれ水泡に歸したのは、千屋等には、なんぼう殘念であつたか知れぬが、日本國の爲には、此上なき幸福で有つた、之は皇居方面を擔當してゐた同志の某は、當夜に爲つ

て俄に志を變じ、踪跡を隱くしたので、恁ふグレハマに了つたのぢやハヽハヽ、千屋等は爰に意を飜へし、その儘國へ歸つたが、天網恢々疎にして洩らさずぢや、之より二年目の、明治九年發覺して、千屋も、宮崎も土佐て捕へられ、型の如く斬罪に處せられて、此の事件は大團圓となつた、宮崎も千屋も、辭世の歌を詠んだ、斯んな歌であつたと覺えてをる、歌はまづいが、聞いて與れ玉へ、千屋は

磨き上げて國の寶となせばやと
思ひし玉は武藏野の霜

宮崎は、人柄に似合はず、悲しい歌をのこした、その歌は

昨日泣く今日は笑ひつあすか川
淵も瀬となる御代ぞかなしき

昨日泣く、今日は笑ひつあすか川、實に此の歌の通りぢや、我輩の如きも、今日に至りて、千屋等を思ふて無限の感慨に打たれる、更に明治十四五年の頃、政黨に携はつて、意氣旺盛であつた當時より、今日の境涯を顧ると、何んだか悲しく爲つてくる、フ、フム、鬼の眼にも涙の類ぢやらう」

虚字の妙用

岩溪裳川

（下）

山中　顧況

野人自愛山中宿。況是葛洪丹井西。庭前有ニ箇長松樹一。夜半子規來上啼。

野人とは顧況の自稱する所、我は自然山中の宿を愛するに、況して此所は葛洪の丹を錬りたる地の西に當り、殆と仙郷に似たれは最も愛すべきに、唯一個の長松樹ありて、夜半に子規の來り其樹に上りて、不如歸去と啼く、其聲の聽くに堪へすして、愛すべき葛洪丹井の西なる山中も、栖止するを得すして、故郷に歸らんとの思も動きぬと云ふ、斯く說き來れは、强て解を下す程の事もなき樣なれと、詩中の自愛有箇の字の見解にて、兩樣の意を生するなり、又之か解釋するには、子規と云ふ鳥の如何なるものかを先つ論すれは、其解の何れが正しきかを判定し得へし、彼土には子規を蜀の望帝の魂の化したると云ひ、其鳴くや不如歸去と呼ふ、本草禽の部に、杜鵑初鳴。先聽者主離別。學其聲。使人吐血。とありて、其聲の悲哀なる、想ふに堪へたり、故に詩に子規を云ふ者、悲哀の意に出てさるはなし、然るに、我邦は古來和歌に子規を詠する、一聲の先聽を得は、人に誇り、皆之を愛するの主に出つ、東西風俗の異なる斯の如し、又猿も詩には巴東三峽。猿鳴長悲。鳴至三聲。聞者淚沾衣。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雫と爲したれど、詩には差して意に就てさる事なし、和歌の鹿と云ふは、詩にて蜀の子規、歌の猿に於けると同様なるも、亦彼我の風俗に依るものならん、伊藤仁齋翁は斯く云ひたりき、彼の土の人は、子規を哀れにて聞に堪へさる如く云ふも、獨願況の山中の詩は、子規を愛して聞きたりと、仁齋翁は有箇の二字に留意せすして、讀過したるより、此誤解を來たしたる事と思ひたるに、今秋八月永阪石埭森槐南の二君と共に、信中の遠近山莊にあり、槐南の詩に葛洪丹井の事あるより、偶然に獨願況の詩に及ひ、又仁齋の說に及ふ、槐南も仁齋先生の說の如く、自愛の二字は、下三句迄貫注すると云はれし樣なれど、醉中にて予の聞違へたるにや、兎に角に有箇の二字の第三句にあるは、正しく反接にして、自愛の字の夜半子規來上啼の句に及はさるは、疑を容るべきの餘地なし、其字を持くに反接の痕を見ずして、或は自愛の字の第四迄に及ふとの解を下さしむる如きは、却て虛字の妙用と思ふなり、

酬下曹侍御過二象縣一見上寄

柳　宗　元

破額山前碧玉流。騷人遙駐木蘭舟。春風無ㇾ限瀟湘意。欲ㇾ採二蘋花一不二自由一。

此詩は子厚の柳州の刺史たる時、曹侍御の柳州象縣を過きて一書を寄せたるに酬るものにて、子厚の平生を知り、兼て風人か温敦の本旨を得たるを見るへし、子厚か博學宏詞の科に中り、監察御史となりて、後王叔史の黨に坐して、永洲の司馬に貶せられ、復召されて柳洲の刺史に徙る、此時に一話あり、子厚の夢に柳樹の地に仆るを見て、不祥の兆ならんとて、卜者に問ふ、卜者判して云ふ、生する時は柳樹、仆るゝ時は柳木、樹は牧なり、君は柳洲の牧とならん、と果して其言の如しと云ふ、破額山名山前の碧玉の如き流れに、騷人の曹侍御か、木蘭舟を駐め、一書を寄せられしと、其次第を叙し、己れの京を離れて、遠く柳洲に在り、春風の和照なるを慾し、無限の思を懷き居れは、蘋花を瀟湘に採りて、君主に献せんと思ふも自由ならすと云ふは、時に已れか身世を寫し、春風の和照なるは、永洲の司馬より召されて、柳洲の刺吏となるも、君思の限りなさに因るものにて、萬一の報效を圖らんとするも、己れか思ふ樣に自由にならす、是れ曹侍御の君側に在りて、献替する所あるを羨み、物に己れか一片の誠意を君に致す能はさるを嘆するの意なり、左傳に蘋蘩薀藻可羞于王公とあるに本つくならん、子厚の詩は王維孟浩然韋應物柳宗元と云ひ、又元和以來孟詩孟郊韓草韓愈の外、柳宗元劉禹錫の詩文張籍の歌行、李賀の新樂府の如き、皆鳴盛の任あるものにて、劉禹錫の詞に、誰採蘋花寄取。但目送木蘭容與とは語意の相似たるも頗る奇なり欲採蘋花不自由。欲不の二字。如何に妙なる歟、又如何に切なる歟、其哀情を想像すれは、千秋の下一掬の涙を此七字に浮へ、柳子厚の一生の遇合如何を嘆せざるべからず、詩は其詞の露鋒より、藏鋒なるを、風人の主とするも、露鋒の作り易く、藏鋒の爲し難き、一は斯道を修むる厚薄にも因るへく、而して世人の却て藏鋒の微妙を知らず、露鋒の壯快を喜ふもの多きは、其本旨の在る所を悟らさるに職由するものならん、是れ最も三體詩絕句の忠厚の意に愜ふを以て、聊か細論を試るなり、

晴景

王　駕

雨前初見花間蘂。雨後兼無二葉底花一。蛺蝶飛來過ㇾ墻去。應ㇾ疑春色在二隣家一。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雨前雨後とは穀雨の節前後を云ふ、穀雨は清明後十六日なり、穀雨の前には、初て花の間に葉を見たるに、穀雨後は葉底の殘花も、總て見るなく、蛺蝶の飛來りて、又墻を過きて去りしは、蝶の意は猶春色の隣家にあらんと疑ふて尋ぬるならん、晴景の即興を寫出して頗る妙なり、宋の王荊公か、此詩中の虚字を殆と改めて、雨前不見花間葉。雨後全無葉底花。蜂蝶紛紛過墻去。却疑春色在隣家。と爲せり不見全無は原詩に比すれは、詩意の一層明になりて、原意を失はされは、勝るとも劣る所なし、唯應疑を却疑に改むるは甚た謂れなきのものにて原作の妙想を沒却して、荊公か自己の詩想を點入せしに過ぎず、其意に依れは蜂蝶の紛紛飛來り墻を過きて去りしを見て、隣家には未た春の花の殘りたるならんと、人の却て疑ふなり、疑字を蝶の上に就て見るは、自然なれとも、人の上に改めては、工夫に失して妙ならず、荊公には斯の如き事往々あり、梁の王籍の詩に、蟬噪林逾靜。鳥鳴山更幽とあるを、荊公の鍾山即事に澗水無聲繞竹流。竹西花草弄春柔。茅簷相對坐終日。一鳥不鳴山更幽と翻出せしは、原作は天籟にして、荊公の詩は人籟を免れす、然れとも後人は時に荊公に左袒するものあり、予か今夏双芝仙館の剪燭會に、山字を得て、一絕を作り云、自古論詩不等閒。荊公執拗更痴頑。夕陽翻綠前崖樹。一鳥忽鳴幽似山。と云ふは其詩は拙劣なるも、聊か荊公の妄を論せしなり、詩家の癖として、一時興來の作にも、寓意なりとて、揣摩の說をなすもの多く、此詩の如きも、猶寓意なりとして解すらく、雨前雨後をは、自ら官を棄ると棄てざるとの前後とし、花は勢燄にして、葉は勢を失するなり、第三句の蛺蝶とは、浮俗の交態にして、春色在隣家とは、官爵の他人に屬せしとなり、比擬の跡は暫く措き、斯く沒風趣に解しては、詩の妙も不妙も殆と論すべき限にあらさるなり、他にも相似

野塘　　韓偓

侵レ曉乘レ涼偶獨來。不レ因ニ魚躍一見ニ萍開一。捲荷忽被ニ微風觸一。瀉下清香露一杯。

韓致堯は、香奩一體の創製者にして、其一體は艶情旖旎冶思纏綿、重則を避するの嫌ありと雖も、後世王次回か、疑雨集の溫柔鄕の語を爲すものと同しからず、又香奩一體の外、實に此野塘の加き、清新巧妙の作ありて、譏者の口を箝するに足るべし、南宋の楊萬里の詩は、韓偓より出づると云ふも、誠齋の乞靈する所は、正に此種の詩にあるべし、曉涼に乘し偶獨り野塘の邊に來て、魚の躍るにも因らずして、水上の萍の開き漾するを見たり、是其眼に映する景色にて魚の躍り萍の開くは怪しむに足らぬも、魚の躍らすして萍の漾ふを見ろ、是れ其由を知らず、稍疑ふの際捲き葉の荷のそよそよと吹く風に觸れて、清き香を含みたる露を瀉き下したり、初め此微風の爲めに開き漾ふたる、浮萍に對しての不審を、捲荷の露の瀉下したるにて、其由を第三句に發したには、寫景の妙、最も微に入り作佳の奇も驚くべし讀者吟誦一回、冥想一番、髣髴として、其景の眼前に現出するを覺るならん、不因忽被の四字、措き得て絕妙、晩唐の致堯、南宋の延秀、皆是一世の名士、而して其身世性行も甚相似たり、獨り其詩のみならず、是又奇と云ふべし、此他韓偓の詩の周摸に入るものにて尤溪道中水自潺湲日自斜。盡無鷄犬有鳴鴉。千村萬落如寒食。不見人煙空見花。の如き。二十八字中、八字の虛字を用ゆるも。滑調に至らず。轉た其妙用を思はしむ、蓋し之を用字の自在と云ふ、

患眼　　張籍

裏。看花猶自未分明。

張籍の眼病に付ては、其師韓退之が、代張籍與浙江觀察李中丞書ありて其中には、不幸而兩目不見物。無用於天下。と云ひ、閣下寧之以已絶之年。賜之以既盲之視。と云如くなるも。復天地月日を見るを得しなれば作者の喜如何、然し昨日も韓家なる師の後園に遊び、花を看しも病後なれば、花の紅白等未だ分明ならざりしと云ふなり、前年友人某氏予が寓に來たり、西洋文學の話に及ひし時、和蘭の文學者が、某文豪を吊するの文に、誰を生活の外に置くと書きしとかにて、後世も其修字の巧を稱贊して已まずと云へるに、予は答ふ、生活の外に置くとは、某文豪の死を意味するならんも、若し斯の如き語の、後人に傳稱せらるゝなれば、詩人の措語には、數等の上に出つるもの枚舉に遑あらざるべし、偶張籍の詩、机上にあり、兎與風光便隔生云ふは如何ん、眼に映するものは風光にして、失明の後は、風光は總て無何有郷に去りて、これと生を隔てると云ふ、其措語の妙は、生活の外に置くと云ふ如き、凡想の比にあらさるべし、と笑ひたりき、張籍の詩に還中猶感眷の一絶あり、遠客悠悠任病身。謝家池上又逢春。明年各自東西去。此地看花是別人。と云ふ、任又是の字、層一層詩意を深からしむる所、虚字の用法も神化の境に入りたるなり、

經汾陽舊宅　　趙嘏

門前不改舊山河。破虜曾輕馬伏波。今日獨經歌舞地。古槐疎冷多陽多。

唐の功臣多しと雖も、郭子儀の安祿山史思明及吐蕃の亂を平けて、唐室を再造する如きは、蓋し其類稀なるべし、故に汾陽郡王に封せられ、人臣の道に於て缺る所なく、郭家の盛衰は、李唐と終始すべきに、德宗の功臣か子孫を待つ事の輕薄なる、盧杞の政を秉り勳族を忌みて其田宅を論奪する如きは盧杞の姦臣は言ふも及ず唐の天子の失德なれは暗に之を諷し、豈止山陽一笛の感の打ならん、漢の功臣を封するの誓に、使黃河如帶。泰山若礪。國以永存。延及苗裔とある如く、唐の功臣を封するも、亦斯の如くなるべきに、子儀か功勳は、其肉未た冷かならざるに、其室を保つ能はずして、汾陽の舊宅も荒蕪の地となり、殆と今昔の感に堪へず、唯依然として改めさるものは、舊山河のみ、帶礪の意は。已に功臣の後にあらずして。山河の舊に似たるのみとは。慨嘆に堪へず。其郭子儀か一代の大功は、漢の馬援伏將軍か世に功を立てし如きは。曾て輕する所にて。新息侯の功勳の如きば。汾陽郡王に比すべきにあらず。然るに今日獨汾陽郡王か生前功成り名遂け、歌舞に餘命を樂みたる地も、古槐の淋し氣に葉も落ちたるに、夕陽の多く映し居りしと、其荒涼の景を寫したり槐樹三槐三公抔と云ふ事のあるより名族の國中には、多く種るものなり宋史に英宗の曰く、將帥最難得人、唐三百年中、惟一郭子儀耳、と云ひし、其人の邸第斯の如し誰れか之を吊せさらん、張籍か法勝寺東樓の詩に、汾陽舊宅今爲寺。猶有當時歌舞樓。四十年來車馬路。古槐深巷暮蟬愁とあり汾陽の舊宅は寺と爲りし歟、然し郭子儀の子孫は開成の後迄は、其封爵を保ちたりと云へは、貞元元和の頃に寺となりし事はあらさるべしと云ふ說もあるなり、

十日菊　　鄭谷

節去蜂愁蝶不知。曉庭還繞折殘枝。自緣今日人心別。未必秋香一夜衰。

我邦人の諺に十日の菊六日の菖蒲抔と云ふて、事の過ぎ去りて、用を得ざるの諺となすも、此詩は其意を翻して、二十八字を作りたり、重陽の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

節去りて、蜂は愁なるも、蝶は知らざる如く、昨日折り殘したる庭の菊に曉の頃より飛繞りて猶秋色を尋ぬるなり、蝶は節前節後を知らさるに、人の心は然らす、九日には菊花の芬芳を賞しなから、十日には誰れも之を賞せさるは、自ら人の心に重陽と重陽後との別あるに縁るものにて、未た必しも秋香の纔に一夜にして衰へたるにあらす、其意の物に隨て盡きさるべきに世人皆菊を賞すると賞せざるとは、唯心に別ある故と云ふなり。人に別とは慨して世人を云ふて自己を云ひたるものにあらさるべし、獨怪しむ、黄山谷か此詩を評し、詩意甚た佳にして、病は氣の長からさるに在りと云ひしは、或は此詩を誤解せしにや、曾子固か詩は一覽語盡きて意の餘りあるを要す、乃ち古人の心を用る鄭谷の十日菊の如くする是なりと云ふは、大に詩の眞意を得たり、

九月懷山東兄弟　王維

獨在二異鄕一爲二異客一。毎レ逢二佳節一倍思レ親。遙知兄弟登レ高處。同挿二茱萸一少二一人一。

王維は盛唐の作者にて、詩には詩佛の名あるは、晩年に歸依し其詩も自然の高華を得て、塵表に超然たる所あるを以てならん、王維か九日に唐武城にありて、山東の太原にある兄弟を懷ふて作くるものにて、彼地の俗に九日には嚢に茱萸を盛り臂に菊花を浮へ或は萸菊を頭挿して、登高の興をなして、身の災難を禳ふ是非は費長房か桓景の災を救ひたるに依りて、其事の長く傳はりたるものと云ふ、されは一家の災を禳ふには、家族は皆々登高して、此一日を萸囊菊觴の間に送くり、歡を罄して歸るべきに、今は獨り異鄕に異客となり、平生も兄弟の事を思はぬにはあらさるも、此佳節に逢ふ毎に、一層に兄弟の懷かしきを思ひ出すなり、我山東一人の我を欠きたれは、我の兄弟を思ふ如く、兄弟も亦た我を思なるへきと、遙に知ると云ふ、其語の温溫たる、自然に友悌の情の言外に顯れて、獨客の心を想像するに餘りあり、舊唐書の本傳に、維閨門の友悌とあるも、其事の實なるは、此詩に徵して、之を知るべきなり、盧字の展法獨と云ひ、毎逢倍思と云ひ、遙知ると云ふ、第三句以下と呼應叱案、一字も苟くも下さざるを見且其情をして、愈深からしめたり、

同撰中猶論すべきもの、十數篇あるも、紙數に限りあり、且此の話たる、玉昌齡を以て始め王維を以て終り、其詩も共に兄弟友愛の情を述へ、詩天子と詩佛を前後に置きて、偶然にも此好安排を得たるを以て、爰に筆を擱す、

外國從軍記者（月旦）

渡邊生

○デーリー、テレグラフ（倫敦）の

マクヒユ氏

英國義勇隊の砲兵大尉て、富豪の息子なさうな、尤も義勇隊に加はるには金がなければならぬ筈、軍需品を除くの外悉く自費て、所謂自費の軍人だ、その代り非常な名譽で交際社會では頗る持てるとの事、現今此義勇兵なるものが二萬あるとは大したものだ、餘事は

十、一行中の君子を以て目されて居つた、而して最も同情に富んだ、慈悲心の深い人で、同人間からも尊敬されて居た。

一日、某の従僕が天幕内に紛れ込んだ野犬を打擲して居るのを見たマクヒユ氏は血相變へて飛んで來て、今や勢ひ込んで打下さんとする某の手を確かと持ち、諄々として、妄りに動物を虐待すべからざるの理由を説いて、戒しめた、斯う云ふ風であるから己れの雇人に對する思ひ遣りは非常なもので、日本人と云はず、清韓人の馬夫、人足に至るまで、若し病氣にでも罹るものがあると直ちに病床を訪ふて慰める（多くの記者中斯んな眞似をする人は氏の外には一人もなかつた、中には病氣になつて働けないと云ふなら解雇しろ、と云つた樣な連中計りであつたから一層目立つた）それ藥よ、醫師よと仲々能く世話をしたものである。

氏の従僕某、米國紐育ジャーナル通信員ジャック、ロンドン氏と格闘し、大怪我をしたのがある、其時の如きマクヒユ氏は憤然としてロンドン氏を憲兵の手に渡さんとまで意氣込んだが、調停するものがあつてそこ迄はいかなかつたが、吾々日本人は之が爲め頗る人意を強ふするものがあつた、（是非の差別なく一も二もなく日本人が困らされつゝあつた場合が多かつたので）

某宿營地で一夜大に雨降る、可哀さうなは雇の清韓人で、雨を避る場所がない、尤も二十丁も行けば人家は有るが、卒かの事とて何うする事も出來ない、すると氏は直ちに己の天幕を開いて多くの者に雨宿りをさした、僕等でさへ其臭氣に避易して一人たりとも天幕に入るを容さなかつたにも拘らず

さうかと云つて決して所謂御人好しではなくつて、それでシャープな人物だ、長く氏に使はれて居た清人が馬糧其他に就て少しも胡魔化す事が出來なかつたと云つて溢して居た、勿論他の口喧しく常に清韓人を罵りつゝあつた記者先生共は、大低馬鹿な高價を拂ふて馬糧や食料品を買つて反對に馬鹿にされて居たものだ、

地質學は御座れ、生理學、理化學、何にでも明るい、一行が天幕を張る場所は先づ氏が檢分して、地をトする、此所を堀れば清水が出るの、其所は雨が降れば崩れるのと匆々詳しいものだ、鷹を捕まへた、それマクヒユに聞て見ろ、夫れ骸骨を拾つた、説明して貰らへと、何んでも知らぬと云ふ事はない、そして夫が科學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的智識は該博なものだ。

時ならぬ時に、思ひも依らぬ所で砲聲が聞える、先生必ず小山に登つて其砲聲、銃聲に因つて或は敵の逆襲だとか或は我軍の進撃だとか判斷する、それが至も間違つた事がない、之は尤も砲兵大尉で其經驗から來たのであらうが。

閑さへあれば故國の妻君や兒女に手紙を書くのを樂しみにして居る、今兒女に宛てたる手紙の一節を左に

愛らしきマリーよ、戰爭と云ふものは惡いものです、お父さまをこんな遠方へよこして仕舞つて、お前とお父さまと半年も一年も逢へない樣にするなんて…

○コレアス、ウイクリー(米國)の
パーマー氏

米國流の觀察の鋭利な記者で、唯一の自慢は米西戰爭に從軍したと云ふ事である、文章も面白くは書くが、何しろ頗る誇大で隨分思ひ切つた虚を報ずるに妙を得て居る、コレアス、ウイクリーを一讀された讀者は御存知であらうが(此雜誌は日本へも澤山來て居る)其一節に斯んなのがある、

大名は出征中の二人の愛兒が戰死したのを喜んで祝盃を擧げて一家親族を饗應して居る時で、自分も非常に御馳走になつた、日本男兒の(先生は男兒をデンジと書いて居る)豪い所である

先生得意になつて法螺計り吹いて居る、然し之が所謂米國一流とでも申すべき通信員の筆法で、讀んでる中は頗る面白く時に或は不知不識涙を溢す事さへあるのは如何にも不思議の樣である。

米國の新聞記者に向つて人格や、品位を論ずるのは聊も野暮の沙汰かも知れないが、氏も御多分には洩れぬ陋劣な事を云つたり仕たりして、稍々輕侮の念を起さしめた。

自ら携帶の糧食が大分紛失したと云ふので大に狼狽出し、早速通譯とコックを呼び付けて幾百とある罐詰物を調べ初めた、果して足りない、帳面と引合して見ても幾十個不足して居る、其所で其通譯を捉へて「貴樣は盗んで酒保に賣つたらう」と遣つた、盗んで喰べたらうとでも云ふなら未だしも賣つたらうとは何事ぞ、其樣な事を云はれて周章する通譯も通譯だが、謂つた御當人の人格が推態されるではないか、傍に之を

ぎないが、斯く事を列擧すれば未だ〳〵幾程もある。

戰鬪の能く見える所へ吾々を案内せぬ、最前線へ出さぬのは不都合だと云ふのが、從軍中の記者連の不平の一ッであつた、パーマー氏は人一倍斯んな不平を鳴らしたので、或士官は「餘り馬鹿にするな、從軍記者に御目に掛けやうとて戰爭するのじやあるまいし」と憤つた位であつた、すると例の遼陽の大戰、吾等一行は大安平の前方の無名の高山の頂上に登つて隈なく見物する事が出來た、丁度其時だ、夥多の人が山頂に現はれたので敵の目に止まつたか、夫れでも探りに打つたのか、僕等の目の前で二三發砲彈が破裂した、天地も震動せん計りの響して、イヤ其時の記者連中の狼狽やうつたら無かつた、實に見ものであつた、一緒に居た獨逸の從軍武官ホフマン大尉は大口開いて「記者共の狼狽の態を見よ」と笑つた位で、山から轉げ落ちん計りの有樣、平常豪らい事計り云つて、やれ戰爭が見えぬの、先へ出さぬのと威張つた連中も生命は惜いものと見えて、夫れこそ何にも見えない岩蔭へ隠れて仕舞つたが、僕は平常を臆ひ出して、パーマー氏はと見れば、之は早や、驚いた、先生いの一番に下山して居た。

米國の記者連、大抵は二言目に金だが、此時にも先生二軍や四軍の戰が、歴々看へるので悦びの餘り飛び上つて「普佛戰爭以來の大戰鬪を斯んなに能く見る事の出來る通信員を送つた我社は何んなに幸ひだらう、何程僕に報酬を出しても差支へない」と叫んだくせに。

此時だ、獨逸の武官は「我が皇帝陛下の御覽に入れたら」と云つたら英國の記者が「何、之が大戰爭！、ウォータールーの戰から見れば……」と冷靜な態度でやつた、烏渡三國の氣風が現はれて居るではないが、パーマー氏に關係はないが序でだから書いて置く。

若し夫れ金と云ふ事に就て米國の記者が何位執着心を以て居るかと云ふ珍聞奇談に至つては此のあとにデウインデーと云ふ剛いヤンキーが控へて居るから、此人の番にウント書いて見やう、

次回は

モーニングポスト(英國)のナイト氏

紐育ウオールド(米國)のデウインデー氏

倫敦タイムスのフレーザー氏

社交私見

巖谷小波

五　宴會の事

宴會にもいろ〳〵ある、祝宴、賀宴、歡迎、送別、親睦、紀念、披露、和解など、名目は其時と場合によるが、要するにその目的は、お互の懇親にあると云つて可からう。

されぱこそ、人の心を和げる爲には、酒と云ふ重賓な藥劑を用ひ、時にはまた、酌人、藝妓など云ふ、一種の軟化器械を用ひて專ら興を助ける樣にして居る。

然るに、その和ける筈の酒の爲めに、却つて角目立つて喧嘩を仕たり、軟化器械の爲めに軟化され過ぎて、それが墮落の基と成るなどは、共に宴會の餘弊として、須らく矯正すべきである。

尤も此等の餘弊は、專ら日本風の宴會に伴ふ事で。その不規律、不健康、不經濟、不體裁は、已に識者の顰眉を招いて、改良の聲は五六年前から聞えて居るが、まだ改良後の理想的、乃至摸範的宴會と云ふものは、未だ行はれて居ない樣だ。

さて西洋風の宴會は、その手輕なのと、經濟なのとて、(眞に西洋風にすれば、必しも手輕、經濟とも云へぬが)一派の間には隨分行はれて居るが、またあの一種の連中を、是れを無趣味殺風景として、甚だ悦ばぬ風もある。

成る程西洋料理屋の卓上に、只ズラリと並んだ斗りで、食つてしまへば用は無いと、各自も其場を辭してしまへば、如何にも無趣味でも殺風景でもあらう、然しそれが西洋風とは、抑も大間違の話で、眞の西洋風の宴會には、この食事後に寧ろ趣味があるのだ。

即ち別の談話室に入つて、是から勝手に煙草を吹かし、手輕ならばビーヤ、ちと叮嚀ならば、コンニヤク、リキユール、キユラソーなどを傾けながら、此所のテーブル、彼所のソーハと、思ひ〳〵に座を占めて、人樣々の談話をしたり、また隱藝のある者は、此場で遠慮無く演ずるので、宴會よりも此場に移つてから、何れも歡を盡すのである。(舞踏のあるのも即ち場合と知るべし)

之に反して、日本料理の宴會の、始あつて終無く、折角客を招待しておきながら、客より先に主人が歸つたり、危險な病人と盃を交はしたり、初見の人と親近

に成る代りには、多年の友と摑み合つたり、下戸に酒を強いて面白がつたり、空腹に何時迄も飯を出さなかつたり、果は融和劑の分量過ぎて、膳の上に尻餅はまだしも、床の間へ尾篭な開店をするに至つては、その無趣味さ、殺風景さ、殆んど言語同斷ではないか。

否、殺風景と云へば、例の立食の宴であらう。折角妙趣向を凝らし、新意匠を盡した園遊會も、この立食の段に成つて、忽ち大亂雜の醜體を呈すのは、往々にして見る所だが、是等は龍頭蛇尾の甚しいもの、淺猿しい限りと云ふべしだ。

所詮宴會の要は懇親にあり、懇親の媒は酒にありとするならば、この酒の飲み方に、先以つて意を用ひ、その本來の目的を、成る丈け充たす樣にせねば成るまい。

無論獨酌の場合には、その意の儘に飲んでも可からう。が、已に宴會は社交上の事、社交上には公徳が必要とすれば、宴會に臨んで飲む時にも、勢ひ公徳心を失うては成らぬ。

是を西洋の社交界に見るに、紳士は酒を飲む者であると、同時に、決して酒に醉はぬ者としてある。否、決して醉はぬのでは無いが、醉うて本心を失ふのを、紳士の恥辱として居るのである。

さう云へば日本の紳士は、そんな窮屈な酒ならば、寧ろ初めから飲まぬがよいと云ふだらう、何さま宴會に出る程ならば、必ずしも戰々兢々として、窮屈な飲み方をするにも及ばぬ。

が、さりとて人の迷惑も顧みず、どうせ割前は取られるのだから、飲める丈け飲まねば損だの、招待ならば何腹の痛まぬ酒だ、飲んで飲んで飲み倒せのと、獨酌の時より一層箍を外づして、頭から浴びん斗りに飲み、果は他人の厄介に成つて、翌日まで頭痛、鉢卷を取るとの出來ぬなどは、沙汰の限りと云ふべきで、此等は紳士と云ふよりも、糸扁の無い申士である。

五　紹介の事

甲が乙に會はうとする時、まだ一面の識も無いので、その知人の丙なる者の、幸ひ乙とも懇意なのを賴んで、自分を紹介して貰ふのは、社交上至當の禮である。

て、その紹介の仕方に、口頭と筆頭とがあり、筆頭にも亦、書狀もあれば名刺もあるが、口頭の方は、三人一座にあつての事であるから、尤も然るべき紹介であるが、その筆頭の方には、往々無責任極まるのがあつて、後には紹介者も被紹介者も、思はぬ迷惑をする

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事があるから、ちと注意して貰ひ度いものだ。

例へば甲は乙に會ひ度い。が、適當の紹介者が無い。これを丙に謀るも、丙もまた乙を知らぬ。が、その知人の丁なる者が、甲とは面識のあるのを幸ひ、まづ甲を丁に紹介し、その丁の紹介に依つて、初めて甲は乙に會ふ事に成る。して見ると乙の丁の紹介は、畢竟丙なる者を通じて、甲を知つたに過ぎぬから、已に間接の紹介であるが、乙なる者に取つては、この間接の紹介に依つて、初對面の甲なる者を、よく信じ得るであらうか。後丁に會つた時、甲の人物を委しく聞かんとすれば、丁は答へて「實は丙に賴まれたから、一寸添書をした斗り、甲の人物に至つては、委しく知つては居らぬ」と云ふ。さりとは無責任極まる紹介。而もかゝる無責任の紹介が、果してその効を成すや否は、甚だ覺束無い問題である。

また世話好の人の中には、自分すらよく知られて居らぬ者に、(自分の方では知つて居つても)、得意氣に人を紹介する者がある。此等も無責任の非難は免かれぬので、その紹介された者が、爲めに却つて恥を掻く場合も、決して少からぬのである。

余の知人M氏は、嘗て歐洲のD國に居た縁で、本邦に居るその國の公使とは、可成懇意にして居たのである。或時一個のD國人が、まだ彼地に留學中のC氏から、一通の紹介狀を持つて、M氏の所へ會ひに來た。M氏はC氏と一面の識こそあれ、それは旅行中の事で、決して懇意の間では無い。が。折角遙々來た者だから、兎も角も會つて見ると、そのD國人は、種々の話の末に、遂にM氏の紹介に依て、公使閣下に會ひ度いと云ふのである、M氏も一寸考へたが、達つての依賴に餘義なく添書をやると、其奴は喜んで出て行つたが、其後M氏が公使に會ふと、公使は面白からぬ顏で、「君は厄介な人を紹介してくれた、吾輩は彼の男の爲めに、とう／\歸國の旅費を强請られたです。彼は成算なく日本へ渡つて來た、畢竟浮浪の徒としか思はれぬが、君は全體何う云ふ關係で、あんな男と懇意に成つたのです」と、眞面目に愚痴を零されて、M氏は大いに驚いたが、元々自分がC氏の紹介と、輕々しく信じたのが失策なので、公使には平に罪を謝し、またC氏にも小言を云つてやつたら、C氏はまた驚いて『私もさう云ふ奴とは存じませんでしたが、只日本へ行くに付いて、誰かに紹介してくれと云ひますから、貴君に添書をした斗りです。』と、是も輕忽を詫びて來たと云ふ。無責任

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に紹介し、輕々に紹介を信じる人は、宜しく鑑みるべき事であらう。

否、無責任の紹介と云へば、彼の保險會社の勸誘員位、押強く紹介を求める者も無いが、この爲めに名刺をやる紹介ほど、世に無責任極るものはあるまい。

某保險會社の勸誘員が、余の所へ持來した名刺は、常から保險嫌ひの某氏のであるから、不思議に思つて後に某氏に聞くと、『イヤ、吾輩は無論入らんサ。だがあまり五月蠅いから名刺を呉れて、君の所へ宿込りした斗り。入らうと入るまいとは、無論君の勝手さ』と云ふ挨拶。餘りの事に余は腹も立たなかつた。

所詮人を紹介するなら、其人とよく知つて、然る後責任ある紹介をすべしだ。

文士初對面錄（その五）

天中天

▲尾上柴舟氏　その歌を讀んで而して其の相貌風采を想像した通り、會つて見ると決して案外に思はれぬ、小柄で歌人らしい趣が見えて、少しも氣取らないで若々しい、中學生や女學生が、先生〳〵と云つて歌の添削を乞ひに來る、その先生が餘りにうひ〳〵しく感ぜられる、細君が愛想がよく、襷がけて台所を立廻つて居るのが、矢張り歌人の細君だ

海内思潮

對韓策の部分的成効

『慶應義塾學報』　中村進午

明治三十七年二月廿三日日韓議定書先づ成り、其第一條は「日韓兩帝國間に恒久不易の親交を保持し東洋の平和を確立する爲め大韓帝國政府は大日本帝國政府を確信し施政の改善に關し其忠告を容るゝこと」と定め、第五條は「兩國政府は相互の承認を經ずして後來本協約の主意に違反すべき協約を第三國との間に訂立することを得ざること」と定め、其他日本が韓國に於て軍畧上必要の地點を收用するを得ること、日本が韓國の獨立を保障すること等の規定ありたり、當時人多く此議定書の正確ならざるを疑ひ、日本能く爲すなきにあらざるやを呼べり、然れども余輩は此議定書によりて韓國が日本の保護國となりたるものなり、餘は只實行の如何にあるべきのみと唱へたりき。

次て八月二十二日左の如き協約は日韓兩國の間に成れり

一韓國政府ハ日本政府ノ推薦スル日本人一名ヲ財務顧問トシテ韓國政府ニ傭聘シ財務ニ關スル事項ハ總テ其意見ヲ詢ヒ施行スベシ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二韓國政府ハ日本政府ノ推薦スル外國人一名ヲ外交顧問トシテ外部ニ傭聘シ外交ニ關スル要務ハ總テ其意見ヲ詢ヒ施行スベシ

三韓國政府ハ外國トノ條約締結其他重要ナル外交案件即外國人ニ對スル特權讓與若クハ契約等ノ處理ニ關シテハ豫メ日本政府ト協議スベシ

當時人或は曰く、顧問なる名義は賴むに足らずと、又曰く、外國人を推薦して顧問となすは會々以て日本の無力を標榜するのみと、或は曰く、此の協約も未だ以て韓國を純然たる保護國となしたるものにあらず、緩慢なること此の如くにして、何れの時か果して對韓策の眞果を得んと、然るに余輩は獨り日韓議定書に謳歌したるのみならず、併せて又日韓協約に樂觀して以て要は實行の如何に在るのみと稱したり。

最も近く聞く所に依れば、東京駐在の佛、白、伊、三國の公使は韓國に於て鑛山採掘權を得んが爲めに我が政府に直接交渉を開きたりと、是ある哉々々、蓋し日韓協約第三號の規定に鑑み、從令韓國に交渉するも日本の承諾を得ざれば効なきを知りたるものにして、是れ明かに韓國が日本の保護國たることを承諾し、又明かに日韓協約を承諾したるものなり玆に於てか韓國駐在の各國公使は殆んど全く無用のものとなり、又韓國より諸國に派遣せる公使も無用のものとなれり、各國が韓國駐在の公使を召還し、韓國が在外公使館を撤去することも亦決して遠きにあらざるべし。

今や韓國內訌切りに發し、紛擾鼎の沸くが如し、此時に當りて日本の取るべき方策は、決して從來の漠然たる權利によりて滿足し得べきにあらず、日韓議定書と日韓協約とに於ける事實上の利益を獲得すること刻下の要務なり、二三顧問の力亦與りて勢を重くするものあらんも、そは尙ほ甚だ不充分なることを免れず、外交と財務とは國家の樞要部なるが故に、此兩者を占むれば實權我に移りたるものなりと考ふるは早計に失せり、軍務に內務に農務に工務に漁務に將た商務に悉く我が顧問を付し、顧問に付するに更に幾多の補助を以てし、大擧して若々彼れの弊政を改むべし、就中最も重要なるものを軍務となす、一進會以下の匪擾は我が軍務の力を俟ちて、即時に一掃するを以て捷計となす、日韓議定書第四條には

第三國ノ侵害ニ因リ若クハ內亂ノ爲メ大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ル可シ云々

とあるにあらずや、卑見を以てするに、韓國中央政府の如何は其外政たると內務たると軍事たると商事たるとを問はず、悉く日本の承諾を得て初めて行動するを得べしとせよ、而して韓國の勢力なるものは獨り中央政府に於て存するのみにあらずして、各地々方官の暴政ゝ施くあり、兩班各地に存して隱然勢力を張るあり、負褓商尙ほ各地の連絡を通じて非議するもの稀ならずと聞く、國政の振はざる、國民の意を安ふせざる皆之れが爲めなり、國政振はず民心安からざるの結果は生產の力を減し敢爲の氣を耗し勤勉の心を去らしむ、是れ獨り韓國の爲めに不幸なるのみにあらずして實に日本帝國の爲めに不幸なり。

百尺竿頭更に一步を進むるの機は今日に在り、戰役に於ける韓國經營を空細みするは迂なり、速かに斷の一字を用ひよ、形式の美は日韓議定書と日韓協約との兩者を以て備はれり、外的實質は列國の承認によりて盡せり、剩す所は內的實質のみ、內的實質を[illegible]に[illegible]を大にするを要せず、言を壯にするを須ひず、着々として之を事實に示すにあるのみ、今の時を措きて內的實質を遂行するの機は捕捉し難きを畏れ、又庶幾は目下の部分的成効を以て異日の全部成効の端緒となすを忘ること勿れ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國定修身教科書の批評に就て

加藤弘之

『太陽』

樞密院の老輩の意見と云ふものを通覽して見ると、其最も要點とする所は斯う云ふ事であると思はれる、「修身教科書の編纂者は兒童に忠君愛國の精神を養成すると云ふ事にも多少は注意して居ると見えるけれども、それが未だ誠に足らぬやうに思ふ、我國の忠君愛國と云ふものは是は世界にも稀な程の事であつて、此忠君愛國と云ふ精神が日本に取つて最も大切なものである、之を第一の要點として十分養成して行くやうにしなければならぬのである、其事も素より注意してあるやうだけれども其注意が不足して居るやうに思ふ」、さう云ふことが此老輩の人の意見の最も要旨とする所であるやうに思はれる．さう云ふことから種々の議論が出て來て居るのであつて、あとは其とに就ての餘論と云ふやうものであると思はれる、左の如きことが其老輩の批評の中に論じてある。

個人的に獨立して事業を成功するに必要なる教訓を垂るゝ場合最大部分を占め臣子として家國に對するの教義を垂るゝの部分稍疎著ならざるものあるが如し

また

社會の一員としての相互間の德行に密にして臣民として國に對し家族として家に對するの義務心得を教訓するに或は稍疎なるが如し

斯う云ふやうに言つてあるのである、さう云ふ所の意味を考へて見ると、どうしても其忠君愛國の精神を養成することは全く缺けては居らぬけれども誠に行届いて居らぬ、然るに其反對に個人として事業を成す所の精神を養成せんとするる方が十分行届いて居ると云ふやうに老輩の人々は認められたやうに見える、それに就て論じればならぬのである。て老輩の人々の言ふ所では唯忠君愛國の精神をもつと盛んに養成することが最も必要である、それに反して個人としての事業に勉勵するやうな精神を進めることは、忠君愛國の精神を養成する程には必要でないのであるのに、教科書の編纂者はそれに反對した方法を採つて居るやうに見えると言ふのであるが、それに就て我輩は辨じなければならぬのである、忠君愛國の精神を養成すると云ふことは、我輩等は決して輕く考へたことでない、それは公平に精密に教科書を讀んで見たらば必ず分らればならぬことゝ思ふ、決して、さう云ふ事に懈つて居らぬのである、唯それに就ての說き方や話し方などに於て注意の屆かぬ所や何かはあるかも知らぬから、それは十分に此上修正に心を用ゐて行く必要があると思ふけれども、決して忠君愛國のことを麁末に說いて居ると云ふやうな事は無いと堅く信じて居る、併ながら一方には個人として事業に勉勵すると云ふ精神は素より是れは甚だ必要な事である、てさう云ふ精神を養成して行くと云ふことは又決して疎かにはならぬ事であるから、其事に就ても十分說いて居るのである、此事に就ては恐らく他人の教科書よりも精く說て居ると信ずる、然るに老輩連の考では個人としての事業に勉むると云ふやうな精神を奬勵することはそれ程に必要ではない、其方に重きを置くと一方の忠君愛國の精神に養成すると云ふ方が麁末になつて仕舞ふ、それではいかぬ、忠君愛國の精神を養成すると云ふ方に十分力を用ゐなければいかない、個人としての事業を勸める精神も大切でないてはないけれども、忠愛の精神程に大切ではないと認められた如く思はれる、それが老輩連と我輩等との意見の衝突する重な點があらうと思ふ、て老輩連は一方に偏重にして一方に偏輕と云ふ意見を持つて居るやうに我輩は思ふ、忠君愛國の方に偏重にして個人の事業と云ふ方に偏輕であるやうに思ふ、て我輩はさう重偏偏輕と云ふやうに差別があることを認めないので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある、忠君愛國は素より最も大切なものであることは信じて居るのであるが、又一方には個人たる人格を持たせる、人格を養ふと云ふことを勉めなければならぬのは又素より大切であると信じて居るのである、偏重偏輕と云ふことは宜くない事と思つて居るのである、我儕等は此の如此偏重偏輕を宜くないと思ふのに老輩連は自然偏重偏輕の方を宜い事のやうに認めて居るやうに思はれる、それが即ち此相互の意見の衝突する所であるやうに思ふ。我邦の忠君愛國と云ふものは世界に比類の無い程の事である、それでは是は日本國初以來君民同族たる關係より人民の性質習慣として段々にさう云ふ精神が長して盛になつて來たのである、決して唯教育を待つて始めて斯う云ふ精神が出來たのではない、實のところを言ふと教育以上のものである、けれども是からは世の中の事も錯雜になり又外國との交際も廣くなつて來て居るのであるから、斯う云ふ精神が萬一衰へると云ふやうな事になつては大變な事であるから、是までは教育以上に傳はつて來た事であるけれども、此後は教育上十分に心を用ゐて獎勵して行かねばならぬ、益々斯う云ふ精神の盛んならしめる事に心を用ゐて行かねばならぬと云ふことは言ふまでもない事である、けれども又それと同時に社會の一個人として自立自營せんとする人格を保つ所の精神をも又十分發成して行かねばならぬ、此精神は日本人には從來は大に缺乏して居ると言つても宜い程に思ふ、斯ふ云ふ精神は歐羅巴人には盛なものであるけれども日本人には大に缺乏して居る是は日本人の短所である、此精神は日本人には決して皆無とは言はぬけれども今日までは乏しかつたと言つて宜しいと思ふ、それで今日の如き萬國交際の世の中に在つては斯う云ふ精神を又盛んにして行かねばならぬのである、それでなければ將來歐米人民と競爭して世界に横行すると云ふことは出來ないのである、[illegible]、是は他人の編纂にかゝつた教科書に多少偏つた點と信ずるのである、であるのに老輩連の意見と云ふものはそれを餘り過ぎた事のやうに認められたと思はれる、それゆへ我儕等の編纂の教科書は忠君愛國の精神を養成する事に十分力を用ゐて居るのに拘らず、それは未だ力の用ゐ方が足らぬと認められて、それから議論が出たやうに思はれる、そこが老輩連と我輩等と意見を異にする點で甚だ殘念なことである、けれども今日の世の有樣を考へて見ると是はどちらも大切な事である、どちらが最も大切でどちらが左程大切でないと云ふやうなことはない、片方のみ大とするやうな事は出來ないので、どちらも大切とせねばならぬのである、歐羅巴の文明各國では大抵斯う云ふ二つの方面に向つて教育を施して居るのであるが、最も其優れた處はどこであるかと云ふと英國であると思ふ、英國の人民と云ふものは中々忠君愛國の人民である、さうして又同時に一個人たる性格を十分に備へた所の人民である、それであるから英國人民と云ふものは、全く自立自營して苟くも他人に依賴しないと云ふ精神が誠に強いのである、歐羅巴中でも最も英國がさう云ふ有樣である、片方に忠君愛國の精神が強く、又も一方には即ち個人たる性格を十分備へて居る所の人民である、アングロサクソン人の今日世界に横行して最も力あるのは、それが爲めである、日本も是からはさう云ふ處に倣つて世界を横行すると云ふやうに勉めなければならぬ世の中である、御維新前即ち今より三四十年前に於ては未だ世界と交通すると云ふことはなかつた、それであるから先づ此忠君愛國の精神だけを振起して、さうして王政一新を企てると云ふことが是は必要な事であつてこれだけで中々骨の折れた事であつた、けれども今日はそれと變つてもう國内の樣子は全く變つて來て居る上に廣く世界と交際して行く世の中になつて來たから、唯忠君愛國と云ふ一方だけに心を用ゐて居られないやうになつて來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た、忠君愛國を少しも忽せにする事が出來ぬ上に、もう一つ個人たる人格を十分に養成して行くと云ふことが誠に必要になつて來たのである、此修身書を編纂するに就ては第一此二つの點に重に眼目を置たのである、それで修身書は最も力を用ゐて教育勅語の御趣意を遵奉することに努めたのであるが、其教育勅語を能く〳〵味て拜讀して見れば、即ち我輩が言ふ所の忠君愛國の精神と、又個人たる人格を備へる精神と、此二つの方向に均く進んで行かねばならぬと云ふことがわかるのである、即ち教育勅語の御趣意と少しも變つた事はないと思ふ、それで此忠君愛國の精神と一個人たる人格を備へると云ふ所の精神と、是は相須つて始めて十分に用を成して行くものである、一つが缺くれば十分なことでないのである、忠君愛國を十分に爲さんとするには必ず個人たる人格を十分に備へれば出來ぬのである、又個人たる人格を十分に備ると云ふには忠君愛國の精神と云ふものが十分に無ければ出來ぬのである、全く此二つのものが相須ッて用を成して行くのである一も缺くことは出來ぬ、一を重しとし一を輕しとすると云ふことも出來ないのである、それでさう云ふ所の考を以て修身書は編纂して居るのである、是は能く公平に讀んで見れる人ならば分るであらうと思ふ。必ず分らねばならぬと思ふ。

外債の擔保

〔時事新報〕

昨年中倫敦紐育兩市場に發行したる前後二回の外債には何れも海關稅の收入を擔保に供したり三十八年度の豫算に據れば海關稅の收入は二千百萬餘圓にして之に本年七月より實施せらる可き增率の收入百五十二萬餘圓を加ふれば總計二千二百五十二萬餘圓に上る計算なるを以て二回の外債二億二千萬圓に對する六分の利子千三百二十萬圓を支拂ふときに殘る所僅に九百三十二萬餘圓に過ぎざるのみ外債に擔保を提供したるは當局者の失策にして若しも第一回の發行に當て時機の宜しきを選びたらんには我財政上の信用に外國人の疑念を容れ擔保を請求せらるゝが如きことなかりしは論を俟たざれども今日となりては之を非難するも如何ともす可からず既に二回の外債に擔保を提供したる以上は同一の戰爭繼續中に發行する今後の外債に之を除くこと甚だ困難なるは勿論にして今後の發行にも擔保を要する者と覺悟せざるを得ず而して關稅收入の殘額は以上の如くなりとすれば今後引續いて一二回の外債を發行する場合には關稅以外に適當の財源を見出さゞる可からず或は擔保品に充つるが爲め此際私設鐵道を政府に買上ぐ可しとの說は昨年來屢々世間に傳はるが如くなれども我輩を以て之を見れば我財政は擔保品を得る爲めに鐵道政策の根本を動かすまでに窮乏したるの形跡を見出す能はず斯る流說は斷じて排斥す可きものにして今後擔保品を要するの事情あらんには各種專賣事業の收入を以てするが如き最も適當の道なる可し今、煙草、樟腦、鹽の專賣收入を合算するときは總計四千百五十三萬餘圓にして此中には事業の成績如何はしき者あるが如くなれども兎に角政府に於て資金を放下したる有利事業たるを失はざれば之を擔保に使用せんか數億圓外債の利子を保證するに餘りある可し唯斯る擔保を提供する場合には我輩は一擧に多額の外債を發行して大に軍事費の財源を豐にするとを望まざるを得ず從來の實驗に徵するに第一回には一億圓、第二回には一億二千萬圓を折半して五六千萬圓つゝをおのおの英米の市場に發行したり世間には之を以て第一回に發行し得る極度の金額とするの說もあるが如くなれども三十二年倫敦市場に四分利付外債を發行したる際には發行額を一億圓としたるの實例あるのみならず露國が大陸諸國の市場に募債するの場合には常に三

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

億ルーブル內外を極度とするが如し或は倫敦市場の資金のみにては一時は多額の應募を求むるは實際に困難にして多額の發行を爲すには同市場に於ける佛蘭西の資金を交ふるの必要あれど巴里取引所にては日本の公債を賣買せざるが故に佛蘭西の資本家は倫敦市場に多額の資金を存しながら日本の公債に應募を試みざるの內情ありと云ふ當局者の辯解としては一理あるが如くなれども斯る內情ありとすれば何故に政府は戰爭前より我公債を巴里取引所の賣買に付するの手續を取り英國の資金に交ふるに佛國の資金を以てして應募の範圍を擴張するの工風に出でざりしや斯くの如き辯解は偶々政府從來の手落を暴露するに止まらんのみ又前後二回外債募集の當時には倫敦市場の金融は甚だ緩慢にして第二回募集の際の如き例年ならば疾に四分臺に上る可き英蘭銀行の金利は三分に居据り佛蘭西の各銀行が當座殘高として倫敦市場に託し置ける資金の高も少からざりしが如し斯る場合に倫敦市場に於ける募債力が數百萬磅の上に出づる能はずとするが如き我報の服し難き所にして紐育市場は兎も角も多年金融上關係ある倫敦市場に高利の擔保付公債を發行するに五六千萬圓を極度とするの理由ある可からず從來小額の公債を發行する度ごとに不利益の條件を付せられ之に對する擔保品に苦心し果ては其工風に窮して經濟上に容易ならざる風說を流布するが如き財政の信用を傷くるの外に何等の益する所なかる可し擔保の提供にして已むを得ずとすれば適當なるものを選びて一擧に多額の發行を企て一方に擔保提供の失策を償ふこそ當局者の勉む可き所なり

現今の青年

『讀賣新聞』

[illegible]つて、今では五十六七にもならうが、過般知人の娘が、十七で嫁に行くと聞いて、今の若い者は早いぢやア御座いませんかと、僕に話した、現在の叔母の話だけれど、僕は之に返事をする勇氣がなかつた、考へて見給へ、餘り馬鹿々々しい手前勝手ぢやないか、何でも人間は自分のはうにばかり都合の好い理屈を付けるもので、老人に向つて、貴君方の青年の時はどんなものでと質問すると、必ず今の青年より豪いやうな話をする、先づ第一が昔の青年は意氣が盛んであつた、大なる志を有つて居つた、品行が好かつた、學問に勉强たし、男が好かつた、女に惚れられた、まさかそんな事も云ふまいが、何でも彼でも今の青年より豪い事ばかり云つて居る、併し孰方にした處が同じ人間で、昔の青年だつて、三面六臂で、富士の山を手玉に取る譯には往かない、否比較して見れば、輿に乘つたり馬に乘つたり、東海道五十三驛を一ヶ月以上費つて往復した人間と、一晝夜のうちに百里も二百里も汽車で飛んで行く人間とは、智惠の上に大した相違がある、學問にしたところが、虫の蝕つた青表紙を取出し、火の玉を一本の箸で突ついた者と、金字入のクロス表紙を横にスラ〳〵讀んだのとは宛然お月と鼈だ、又軍にしても品川の臺場を固めに行くのに、水盃をして、弓矢長刀を擔ぎ出した時代と、今の兵隊さんが滿洲西比利亞を股に懸けて、露助の肝玉を叩き潰すのとは孰方が豪いか、幕府が橫須賀で、大砲の打試しを遣つた時、猩々緋の陣羽織などを着て、威儀堂々床几に腰を掛けて、威張つて居たお武家樣が、ヅドンと云ふ音を聞くや否、一同に大地へ轉げ落ち、へた這つて了つた、それでも白髮頭の老人は昔を戀しがつて、昔は〳〵と昔風を吹かせる、是は全く手前勝手といふもので、今の青年のはうが、どうしたつて豪いと、まア僕は思つて居る、併し(此併しはウント力を入れ讀んで下さい)一つ僕に解[illegible]

詞藻

歌

尾上柴舟選

○　前田夕暮

月出でぬ來ませとこゝろのちひさうてさくらちる夜を人欄に凭る

紅筆にぬけし鬢の毛からませてさてこの吐息たれにもらさむ

羽子板に戀歌染むるたはぶれや京のうたびと年二十歳にて

會釋してそと行き過ぐるはぢらひのまへ髮に散るうす紅梅よ

をとめなれば秘めしおもひに痩せにけりさりとて秋を人のつれなき

この春にふさふ歌なきさびしさとそゞろ柳をひいても見たる

花の野の曉におちたる金色の征矢のひゞきとなりしこのうた（金鈴會詠草の集に）

○　安達蘆影

樂の音はうすむらさきの雲に湧きて大古ながらの世はよみかへる

○　村田愛美

わがおもひおほ空ゆすり大地ゆすりうたの花野の虹と現せよ

うたに醉ひて戀ともいはず罪といはず幾年こゝに春過しぬる

鈴のねはたかう天の扉ふるはしぬ神のみゆめも今さめぬらむ（銀鈴を讀みて）

○　淺山山茶花

野の桔梗すみれ露草やまの藤あゝむらさきはなによきいろ

花ちひさきくさ野にふさふ名なし水ちひさきながら春うたひ行く

詩の野べの空にたかゆく金箭のひゞきと鳴るよつよき御歌の（正富汪洋兄に）

○　正富汪洋

たはれ男がたはれののちに父を見るそれにも似たるはづかしさかな

君の縫ひし衣つけぬをうらみますな春の夕座をきみとすべる路

名だかきはやがてよきとはあやまりこの歌人の才の小さき

うつくしき人を追ひゆく桃の道あなあやにくの師を見つるかな

○　本郷ひで子

夏の夜は狐火もえてこわかりし岡のもみぢにゆふ日さすなり

その吐息なにぞととへど人はいはずしゝま身にしむ暮秋のよひ

燈火は島もりひとり住むときくいそやま松のかげにゆらめく

彩蝶のかろき羽風にさそはれて神のゆめ野にあこがれ行きし

召されては神のまな児といつかれてあまき乳房にねふりますか君

春姫のよはのさゝやきふともれてけさにひ潮のながれよるかな

○　正村國子

がほつれ毛

○　津野英子

はぢらひてまさぐる君がふり袖に春のはつかぜさと吹き入りぬ

十丈の五重あらゝぎうちゆすり師走つごもり木がらしすさぶ

玉樓の銀燭三千ふときえてあらしにたぐふ夜の魔のさけび

○　北澤芳雨

われ等にとわき出てぬらし八百潮のうづまくなかのはつ春のくに

うた反古とやくべき戀のふるゆめのみだれてこゝにあたらしの春

いだきては泣くをはゞかる古鏡はゝのひとみのうすうおぼゆる

○　梅澤華子

舟うけてきみとあそびしはるの磯貝はあれども舟はあれども

おもはずも泣きてにじむにそとひめし君がなさけの歌の小扇

玉樫の若葉のゆらぎ風となりてそよぎうつくし君

▲歌募集　二月十五日限り、東京本郷區四片

寺

續石選

朝東風に打出す寺の太鼓かな　夕村
あけはなす寺の大戸や今朝の春　同
踏青や寺庭よりぞ登る岡　同
囀や寺と寺との中の藪　同
春雨や寺を出づれば麥畑　紫陽花
里人に訪ひつゝ行くや梅の寺　青璧
東風吹くや棟上したる山の寺　星佛
寺を訪ふ近道細し別れ霜　稚松
初鷄や明け放たれし寺の門　樵村
山寺の鐘にさめたり宵の春　白江
磯寺に茶釜借りたる汐干かな　五湖
川越えて山越えて寺の鐘霞む　行々子
老の春たゞ有難き善光寺　同
寵姫召す花の御宴や金閣寺　秋良
糸櫻護摩を焚くなる東寺かな　同
萬歳に道敎へけり寺男　夜濤
東風吹くや木遣の起る寺普請　同
白梅にたちよる寺の法話かな　白風
羅漢寺の羅漢の面に春淺き　同

春の湖を見おろす寺の書院かな　泥雛
蜂の巣に礫打ちたる野寺かな　同
鶯や裏に瀧ある京の寺　同
松風の春なほ寒し中尊寺　青龍
名僧のおはす寺なり木蓮華　同
半日の鐘に飽きけり彼岸寺　同
尼寺の念佛講や春の雨　五遷
愚僧住む禁厭寺や花大根　同
雀の巣長屋續きに寺の門　同

選者吟

無住寺や雨に暮れ行く化け柳
古庭に櫻一木も京の寺
三抱えの櫻見上げぬ寺の門
春雨や寺の庭なる大蘇鐵
伽羅の香の寺お小姓や朧月
明寺や鶴鳴く池の雨暗き

三月分課題　社(春季結)　二月十五日限
四月分課題　佛(春季結)　三月十八日限

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

紅花怨

前田夕暮

「花が咲いたか咲いたか花が」
春の灯あかき祇園の街に
名妓小艷は鶴群中の
鶴と呼ばれた名うての美人
才藝も性質も西京一と
木遣唄ひます祭の宵の
紅をさいたる人衆たちに
聲を揃へて唄はれし程」

戀は曲者かはいや小艷
ふとした人の情の爲めに
夕べの雲を柱によりて
遠くいにたる戀しき人の
花の咲く頃歸つて來ると
言ふて殘した言葉をたのみ
待てど暮らせどたよりもあらず」

花は咲いては咲いては散りぬ
散りて果敢なや行くへも知らぬ
水にまかせた悲しき戀の
末はあはれや清眸盲ひて
姿やつれぬ佛瘦せぬ
はては可憐や心も亂れ
氣さへ狂ひて夜と晝となく
京の町々さまよひ泣きて
男戀しと聲振り絞り
唄ふ哀歌の其のひと節は
「花が咲いたか咲いたか花が」

林の奥

山田野梅

尾花枯伏す川添ひの、
林の奥に路ありや。
曉白き霜踏みて、
馬牽きいつる人を見き。

落葉朽葉に埋もろゝ、
林の奥に家ありや。
夕雲遠き野末より、
馬牽き還る人を見き。

馬牽く男の子隱棲む、
林の奥に人ありや。
菅の小笠の笠の緒は、
誰がくれなゐの袖の端。

林の奥の孤屋の、
小雨さびしき夕間暮。
市の歸途櫛買うて、
馬牽く男の子急ぐらむ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

丁手も入丁てあるが、どういふものか、實際は老人の尻にばかりくッ附いて居る風がある、試みに明治の元勲連を見給へ、伊藤でも井上でも板垣大隈でも、維新當時何れも二十歳から三十歳、所謂青二才で、其以前から公卿諸侯の門に游說して、天下の大勢を動かし、遂に維新の大業を成就させた、それが明治も最早三十八年となつて、彼等はボヨ／＼のお爺さんてあるが、政友會ては伊藤、進歩黨ては大隈、イヤ社會改良會、それ板垣さんに演說を賴め、本願寺がゴタ付出した、井上さんに始末を付けて貰へと、無暗に老人を御神輿に擔ぎ廻り、口てこそ老耄だの隱居だのと、罵しりながら、矢張老人を豪いものにしてしまう、青年の中に少しは豪い人間があるかと云へば、更に見當らない、維新以前に西郷隆盛、橋本左內、坂本龍馬などは何れも、二十代て英名天下を風靡したものだが、さういふ風の青年は今の世の中に一人も見當らない、政治とか何とかの方面ばかりぢやアない、實業家にしろ、技術家にしろ、老人株ばかり巾を利かせて、僕は實に癪に觸つてたまらない、是が老人連の所謂今の青年は意氣に乏しいと云ふ處だらう、だが是は怜悧になつて餘り出しやばらない故だらう、一體が今の青年は國家だの天下だのと、大きい事を心掛けるより、早く相當の月給でも取つて、女房を貰ひ、子供を拵へ、圓滿な家庭でも作つて、樂しく暮すといふ考へだから、突飛な豪傑のない代り、文明的の好紳士が澤山出來る勘定、孰方がよいか、僕は一寸此判斷に苦しむ、世が開けて怜悧な人の殖えるに隨つて、段々斯ふいふ調子になるだらうが、昔の老人を威張らせて置くだけは、早く止めたいもだ。

元日の醉わびに來る二月哉　几董
梅が香や耳かく猫の影法師　也有



評論

僅々十年間

李鴻章と――ステッセル

血　來　人

あゝ僅々十年間、彼の李鴻章が降書を齎らして我國に來りしより、今ステッセルが降將として來朝せるまで、實に僅々十年間、靜かに既往を追懷するに、今昔の感慨とゞめあへず

十年は一ト昔也、今より其當時を思ふ、霞を隔てゝ望むが如く、茫々漠々たる感なきにあらず、當時の兒童すでに成人す、其間甚だ短しとせず、而も歴史の長さに較べては、只僅々十年間、それ夢の間の如し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然り、個人々々の上に就いて考ふれば、十年は長き一ト昔也、今日の侯伊藤、その時の伊藤侯にあらず、その時僅かに一艦の長たりし東郷平八郎、今や聯合艦隊の指令長官なり、大人老い、老者逝けり、繰り返す、個人に取つては洵に長き十年なりき、然れども之を社會の壽命として見れば、彼れの十年は、これの一時間にも足らじ、其比猶ほ天上の一日が娑婆の一年に於けるが如し

されば此の十年、人としての進歩は、たとへ三尺の見童六尺の男になりたればとて、決して怪むべきことにあらず、當然の事也、而も社會の進歩に至つては、吾人此の十年の兩端を比較して、驚かさらんと欲するも得べからざるものあり

吾人をして多くの例證を擧けしむる勿れ、云はんと欲するもの只一事あり、曰く我國民一般の思想が如何に一足飛びの進歩をなせしか、換言すれば、社會よりいへば僅々十年の短時間内に於て、如何に我國民の思[illegible]

而して又これに關する例證として多くを云はしむる勿れ、只思へ、否こゝに十年といへる短き一線を畫きて而して思へ、今此線の左端にある我國民は、その右端にありし時、曾て清國の捕虜が通行せるに石を投ぜし國民にあらずや、曾て李鴻章が車にピストルを向けし國民にあらずや、而して客人として來遊せる露の皇太子を傷けたりし、あどけなき國民にあらずや、あゝ彼の國民即ち今の智あり仁あり勇ありて、物の解つた國民也、豈に驚かざるべけんや、吾人ステッセルの來朝に際し、我國民の彼を待つことの厚きを見、僅々十年の昔を偲び、感慨うたゝとゞめあへず

青年の二大通弊

現今の青年は社會を知らざる也、人情を解せざる也、義理を知らざる也、學ばざる也、所謂學生なる一社會を作りて此中に浮游す、井蛙の識り遂に免るべからず

社會を知らざるは頓間なる也、彼等は牛肉屋の二階を知る、其女中を知る、或は不夜城の光景を熟知し、時に藝妓なるものと交り、矢場に通ふ事を知る、一歩進んでは世の渡り難き、生活の難き、立身のなし難き[illegible]彼等之を知らざるに

非ず、而も其觀察や遂に皮を劉いて未だ骨に徹せざる也

試に見よ、彼等が住へる下宿屋は、彼等の最も精通せざるべからざる處なるに拘らず、其裏面の消息に至つては殆んど画牆のすがた也、下宿屋は一人幾何の收入を得て幾何の支出をなすや、其女中は如何なる種類のものにして如何なる經歷を有し、如何なる考を有するものなるや、學生をして單に下宿屋なる題目の下にそが觀察せし凡てを書かしめよ、新聞雜誌の材料とすべきもの凡そ一としてこれ有らざるべし

吾人は常に編輯局の机上に集まれる地方及び東京の青年が原稿と手紙とを閲するを以て樂みとす、而して益々彼等が社會上の智識なきに呆るるの外なき也、或者は深奥なる哲理に頭を突込み、生や死や、天や神や、凡そこれ等の問題に就いて難澁なる筆を揮ひ、其不得要領の文章の紙上に掲載されんことを願ひ、或者は世間意の如くならず、遂に社會主義を主張すと稱す、而も社會主義の何者なるやは之を知らず、そのかみ厭世家の世を味氣なく思ひしが如きものと擇ぶ處なし、或者は生活難に着眼して吾人に其飯にあり付くべき紹介を乞ふ、その稚氣や愛すべしと雖も、社會の狀態を知らざる寧ろ噴飯に堪へざるものあり、即ち所謂頓間たるなり

或は一定の職を有しながら、徒らに名譽心、空想の驅るところとなり向ふ見ずの勇飛、大飛躍を試み、進退維れ谷まりて吾人に泣きつき狀を寄するものあり、憐むべきもの、笑ふべきもの、千種萬態、毎月吾人の手に入るもののみにても優に十を以つて數ふ、要するに眞面目なるは眞面目に頓間にして、放逸なるは放逸に間拔なり

青年學生が社會上の智識なきは決して咎むべきにあらず、經驗の乏しければ也、迂濶頓間なる亦決して笑ふべきにあらず、若ければ也、然れども世間を知らざる其度は餘りに低く過ぐるにあらずや、又曰く彼等は只學事にのみ忠なれば敢て他を顧るの要なしと、然れども學問とは單に書を讀み理を講ずるに滿足すべきものにあらず、社會に立ちて社會の人となるべき道をも知らざる可らず、父兄が其子弟をして東京に遊學せしむるもの、豈に社會と隔離したる人物を作らんが爲めならんや、月々の學資を如何に支出して可なるやも一の學問也、交際も學問也、世間のありさまを見るも學問也、一方學校に於て理を悟るとゝもに、他方に於て實驗界に遊ぶ、家庭の外に社會なるものあるを知る、大なる學問にあらずや

人情も家族的人情のみにあらず、義理も家庭内の義理のみにあらず、社會の人としての義理人情なるものあり、社會の人にあらず、社會を知らざるもの、爭んぞ之を解すべけんや

書を讀む、宜しく眼光紙背に徹せざるべからず、社會を見る、すべからく觀察の鋭利なるを要す、今の青年は實にこれなき也

然らば彼等は所謂世間にうとき學者肌なるべきか、學藝に忠實なるべきか、猶ほ頓間也

小說家幸田露伴先生曰く、現今書を讀まざるは、一を朝鮮人とし、一を我國の學生青年とすと、至言也、或はいふ、書を讀まざるに非ず、讀むべき書を誤れる也と、然れども吾人の見るところは然らず、全然書を愛せざる也、いつれの書籍といへども、讀めば則ち益あり、多讀は却つて眞を害ふものありとも、現今の青年に向つては寧ろ多讀を奬めざるを得ず

彼等の論議は何を意味するぞ、彼等の悠々自適然たる、抑も何を意味するものぞ、彼等は無意識の狀態にあり、社會も知らず、學問もせず、遊びつゝ、苦勞せずして一足飛びの地位を占めんと願ふ、其思想稍ゝ現實に近しといへども、依然として空想の外に出でず、却つて思ふ高尚な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る現實に遠き詩人的空想の優れるものあるを

友人白也君彼等を評してエンダラ屬なりとす、エンダラくとして無意味に生活すれば也と、痛切也、要するに今の青年は煩悶也、學問をせざる也、吾人敢て青年を罵りしにあらず、そのありのまゝをいひたる也、（血來）

惡少年感化と免囚保護

世に最も人道的にして、而かも最も社會的なる事業は何ぞと問ふものあらば、吾人は直ちに惡少年感化と免囚保護の二つの如き即ち是れなりと答へん。げにこの二つの事業の隆盛なると否とは、一國文明の程度如何を卜すべき絶好の標準なりといふも決して過言にあらざるなり。今や我國の武威世界を驚倒して、初めて眞に一等國の班に列し、社會百般の事物又徃々歐米人の嘆賞を博しつゝあるに反し、惡少年感化及び免囚保護の事業の如き微々として振はず、日本にはかゝる事業の存在するや否やをも疑はしむる程なるは吾人の最も遺憾とする所なり。

々として實施せらるゝに至らば、惡少年感化及び免囚保護の如きも、漸く世の注目する所となり、その勃興隆盛を來すべきこと疑を容れず、依て吾人は玆に此等の事業に關する管見を陳じて大方の士に問ふ所あらんとす。

蓋し世に疾病の絶ゆる時なきが如く、罪惡の行はれざる世は未だ甞て之れあらざるなり。而して疾病の徴候あるものは之を豫防するの策あり、已に疾病に苦惱するものには之が治療の法あるが如く、罪惡に對しても亦豫防治療の方策なきにあらず、吾人が謂ふ所の惡少年感化及び免囚保護の如き、即ち其最も顯著なるものなりとす。

それ惡少年は例へば罪惡の卵子なり、彼等が孵化して社會に跋扈翺翔すれば、其足跡の印する所、其羽風の及ぶ所悉く害毒を流さんとす。其卵子たる中早く之を碎き、代ふるに新たなる生命を以てすること、彼の似我蜂が青虫を化して己が子に變ぜしむるが如くせざるべからず、而[illegible]最良の方法は[illegible]にあらず、

叱責にあらず、懲戒にあらず、實に敎誨、感化の力に伏たざるべからず、惡少年感化事業の必要なる實に此點に存するなり。

今此事業の經營組織に關する大體をいはんに、こは公立によつてもなすことを得べく、又は私立によつてもなすことを得べきも、吾人は全然公立を排斥して私立の制を希望するものなり、何となればかゝる感化事業に最も須要とする所は同情と恭謙の念慮にして、彼の無情にして倨慢なる官人根性、役人根性は此事業とは決して一致調和すべからざるものなればなり。假りに公立の制を採用したりとせんか、そは一種名の異りたる警察又は監獄となり了らんのみ。而して私立の制も亦別て集合式と家庭式となすことを得べし。集合式の長所は多數の人を收容するにあれども其短所は感化力の浸潤すること極めて深からざるにあるなり、家庭式の弊は極めて少數の人より收容する能はざるにあれども、其利は敎誨感化の懇篤甚深を盡すを得るにあり。吾人は寧ろ此事業の性質上家庭式を以て優れりとなすものありと雖も、集合式全く排斥すべきにあらざるなり。たゞ集合式を採用するものとせば、そは必ず學校組織となすべくして決して兵營組織となすべからず、何となれば兵營組織は人を威服して心服せしめずこの事業の如き最も精神的なることゝは兩立すべからざればなり。要するに吾人は私立の家庭組織を以て最良のものとなし、私立の學校組織を以て之に次ぐものとなすなり、而して公立及び兵營組織のものに至つては全然吾人の排斥する所なり。

又免囚保護の何たるかを述べんに、已に其名の示すが如く一旦囚徒として獄中に呻吟し、期滿ちて出獄したるものを保護するの事業なり。世人の彼等を遇するを見るに、氷の如き冷眼を以て之を睇み、蛇の如き毒舌を以て之を譏り、到底普通の人間として之と交ることを肯ぜざるものゝ如し、假令彼等にして改心の念を起し、遷善の思を抱くと雖も、世人の待遇此の如くならば大悟徹底の神人にあらざる限り、再び反抗の氣を飜して自暴自棄、却て舊に倍するの罪惡を犯して

其憤怨を洩さゞることを得べきや。囚人の大多數は再犯以上のものによつて占めらるといふが如き、洵に勢の自然にして毫も怪しむに足るものなきなり。若しこれに温かなる同情を寄せて其庇陰となり、明かなる訓戒を垂れて其先導となり、以て世人の冷遇を受けず、社會の虐待を蒙らず、堵に安んじて其生を營むを得ば、誰か又好んで赤衣鐵鎖に身を委することを敢てすべき。免囚保護の必要なる實に此點に存するなり。

この事業の經營組織に關しては別に詳細を語るの必要なし、已に一個の人間となつて、多くは普通の思慮と普通の職業とを有せり、思慮の足らざるものは教誨し、職業あるものは資料を授け、以て安んじて生活を營み得るの法を講じ、再び罪惡を犯すなからんことを計るを以て充分なりとす。

それ惡少年感化と免囚保護とを以て、罪惡を豫防し治療し、小にしては個人の爲め、大にしては社會の爲めに善良なる人間を作るを得ば、罪惡の殲滅は期すべ進すべきこと果して幾何ぞや。

この二つの事業の微々として振はず、其存在するや否やをも疑はしむる程なるは一等文明國の名に對して甚しき耻辱たるのみならず、又眞に社會改良の實際に於て頗る遺憾なることゝいはざるべからず。吾人の所論疎雜遺漏の譏を免れざるべしと雖も、其意のある所を諒とし、務て此等の業に當るの士あらば吾人の幸之に過ぎざるなり。

多角的趣味の養成

我國人に最も缺如たるものは多角的趣味なり。常識の發達せざるも之が爲めなり。氣宇の濶大ならざるも之が爲めなり。偏見、我執、固陋、狹量、融通が利かず、大體に通ぜず、何になさせても埒明かず、一言以て掩へばあらゆる島國民的の弱點を暴露するは悉く此多角的趣味の缺如たるが爲めなり。多角的趣味を養成することの急務なる誰か又異論あるべき。

多角的趣味とは何ぞや。如何なる事物、如何なる方面に對しても一通りなる趣味を有することなり、彼は芝居も好きなり、角力も嫌ひにあらず、文學も科學も亦彼の愛する所なり。春の花、秋の月はいふも更らなり、夏の雲、冬の雪、皆各其特殊なる趣味あることを感得す。彼れ已に

[illegible]豊富にして[illegible]

むべからざるなり。

夫れ趣味は一種の快樂なり。而して快樂は人生無上の勢力なり。快樂のある處、人行かざるなく、快樂の存する地、人赴かざるなし。巳に事物に於て趣味を見る。是れ事物に於て快樂を見たるなり彼れ喜んで其事物を知り、彼れ勇んで其事物を學ばんとすべし。故に教育の第一義は所謂事物の趣味を解さしむるにありとは吾人の深く信じて疑はざる所なり。彼にして多角的趣味を有す、目の觸るゝ所之を知らんと望むべし耳に觸るゝもの之を學ばんと希ふべし。之によつて彼の智識は該博となり、彼の思想は複雜となり、世の一面にあらずして多面なるを知り、人の一樣にあらずして多樣なるを悟り、あらゆる島國民的の弱點は殘りなく消失して、文明的なる大國民的資質之に代つて來る。其教育的効果の顯著なる多角的趣味の養成に及ぶものあらざるなり。

世には專問以外何等の趣味を有せず、從て何等の智識をも備へざるもの決して少からざるなり、一藝一能に精通する決して惡しきにあらず、又其所には他人の窺ひ能はざる甚深なる趣味もあらん、然れども廿世紀の今日僅かに一個の事物を解して又他を知らずといふが如き、何となく時代後れなる感なき能はず、面白くもなきことを長談議するものは彼等なり、一二同志の人にあらざれば交際する能はざるものは彼等なり、之を社會的に見るも隨分厄介なる代物といはざるべからず、是に於て吾人は益々多角的趣味養成の須要なるを見るなり。

然らば如何にして此多角的趣味を養成すべきか。是れ最後に來る所の問題なり。それ讀の産みたる麗といふ語は往々世に用ひらるゝことなきにあらずと雖ども、これ一種の形容に過ぎず讀の産み得るものは到底讀[illegible]

る素と主觀的[illegible]にして其微妙[illegible]能く言議の外に超絶し、心以て心に傳ふべくして他に之を知らしむること能はざることあり、是れ趣味の教育の至難なる所以なりとす。然れども至難は不可能にあらず、法にして宜しきを得、策にして正しきを得ば其目的を達し得べきや論なし、即ち趣味を有するものが最も明かにして最も力ある言詞又は態度を以て其趣味を他人に傳へ、以て徐々として其妙趣を悟了せしむべきなり。而して其詳細なる方法手續に至つてはよく此文の盡す所にあらざるを以て之を他日に讓らんと欲す。

尙一言を加へて世の誤解を防ぐべきことあり。そは多角的趣味とは、八百屋又は萬屋といふ輕蔑を受くべき淺薄なる智識を指すものにあらざること是れなり。何事をも生噛りにし、何物をも上面を見、天晴物識顏に濟まし込む、之を八百屋又は萬屋先生といふ、多角的趣味とは決して之を指すものにあらざるなり、專門の業は委しかるべし、專門の學は深かるべし、たゞ專門以外如何なる事物、如何なる方面にも多少の趣味を有するは、個人としては其生活豐かに、國民としては其有用廣く、最も廿世紀の文明に好適なる人物を作り出すべきを說くものなり。吾人豈に八百屋先生、萬屋先生の輩出を望むものならんや。（以上二件樗陰生）

平民新聞死す、あゝ遂に死す、彼の生や實に花々しかりき、而して其死も亦花々しかりき、吾人は社會主義の爲めに弔せずして、其論敵の一を失ひたるを惜む、直言之に代るといふ、果して彼の如く花々しかるべきか

文藝時觀

所謂健全不健全

美中天

天より降つたか地より湧いたか、但し西洋からの舶來か知らず、健全不健全と云つたやうな、體格検査のそれのやうな、極めて簡單な文藝の批評語が、頻りに近來の批評家によつて使用されて居るが、而も其意味が案外曖昧で、頗る不健全な處がある

否、決して曖昧でない、健全とは善良な事、不健全とは不良の意味、即ち善惡といふに異ならぬので、云はゞ批評家が文藝の作物に對して下す處の診斷書である、此點に於て至極明瞭である、併しながら其健全不健全とは、如何なる方面から見ての診斷であるか、何の立場から見て判定するか、いひ換ふれば、その作物及び作物に現はれたる思想の健全と不健全とを見定むるには、單に文學美術の上から見て、美しいといひ、醜いと云ひ、拙劣いと云ひ巧みなと云ふばかりである[illegible]か、さては宗教の信念が如何う如是うと云ふのであるか、且つうは又これ等の何れにも當て箝めて見ての事であるか、近頃の批評なるものを讀むにつれて、此疑問がなき能はぬ

此疑問がなき能はぬ、勿論正當な意味より云へば、餘り解り過ぎてお恥かしい、疑問にならぬ疑問であらう、先づ吾々の考では、文學藝術の産物は文學藝術の眼から見ねばならぬ、健全不健全の診斷も文藝の定義から割出さねばなるまいと、恁う思つて了ふのであるが、されども世間はこれで許さず

道徳から宗教から、乃至哲學的に物理的に、甚だしきは、たとへ文藝の作としては欠陷を生じても、倫理道徳には外づれたくない、男女の關係を寫しては社會風教に害がある、善者亡びて惡者榮える結果は付けたくない、花の咲けるをのみ謡うて、地に委せられたる腐つた花片は描きたくない、よしんば罪惡を描いても、その罪惡は撲滅し痛罵し盡さねばならぬ、かやうな議論も少くない

この前上田敏氏が、フランチエスカの妙所たるべき戀の處を、何故一層切り込んで譯さなかつたかと尋ね[illegible]

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

葉氏が、青年男女に害ありと答へたのである、文藝の作物としては何うあらうとも、風敎に害があつてはと答へたのである

紅葉の多情多恨は不健全である、其他何々も不健全である、決して家庭の讀物でない、かゝる言葉を聞いたことも度々、而して一方蘆花氏の不如歸、幽芳氏の己が罪的の宗敎がゝつた道德じみたものが比較的健全と言はれて居る

こゝに於て思へらく、馬琴の作は多く社會の風敎に稗益した、近松西鶴の作は多く風敎に害があつた、而も兩者の文藝上に於ける地位は如何であらう、誰か馬琴を以つて近松西鶴の上にありとするものがあらうぞ、誰か紅葉を以てお家騷動の勸善懲惡的小說作者の下にありと云ふものぞ

近い例が戰爭である、如何なる次第順序が抑もであらうとも血を流す戰爭は不善である、この慘憺たる罪惡を寫し出したる繪畫小說は、何故に世人は不健全と云はぬであらう、何故に之を劇に仕組んで青年少女に見せるであらう、戀を描くを憚つて、人を殺すことを敎へるとは、矛盾も亦甚しい哉

若しそれ道德倫理を第一として、即ちそれをいふ爲めに文藝を借りるのなら、それは既に道德倫理のお經にして、宗敎の信念を讀者に與へん目的ならば、それは既に說法本である、若し哲理や科學の爲めにするならば、それは最早嚴正に云ふ文藝でない

神は白いものを造ると同時に黑いものも造つた、善惡美醜あらゆるものを造つたさうな、此あらゆるものを詩人は之を空想によつて描くのである、萬物一度び詩人の腦裏に入つたからは、其出て來るや詩化されて居る、道德宗敎哲學科學、これ等は詩として詩人の口より筆より煥發する、かれ等の爲めに成る詩にあらで、詩として萬象は現はれるのである、戀も無常も詩として見れば、さてこそ味はあるのである

此世から神が罪惡といふものを撤回して了つたらいざ知らず、さなくば道德にも宗敎にも叶つた作物は、到底出來ない相談である、此意味に於ける健全な作物は望めないのである

唯吾人の望むものは、詩として萬象を現はしたる、その意味での健全な、その詩を得んこと是也である

下らない談義を、鹿爪らしく吹くと云ひ給ふな、此下らざる事が甚だ下るやうな申分のある人も亦少くないので、敢て一言したのである

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新春の文壇

孤村主人

文藝倶樂部、新小說、文藝界、帝國文學、明星、白百合、七人、心の花、純文學雜誌の之等のものは一樣に新らしう化粧して、吾人の前に並べられた。去歲末にそれ〴〵來る歲と共に面目を一新すると廣言したんだが、出て見ると、口程もねえと云たくなる位ゐのもの、別段變つた現象は無い。文藝倶樂部に作家の苦心談なるものが載つてある。苦心談いや不思議な事があるもの、これが苦心談とは聞いて呆れる。語る人も語る人だが、麗々しく苦心談と銘打つて載せる雜誌も可笑しい。苦と云ふ字で工夫の工と間違つたんだらう。新小說にしても然うて拾年間の雜誌の閱歷、時には文壇の歷史のたしにもなる事があるが、中には隨分手前味噌もある。然う云ふ事柄は語つて居る人は宜いが讀まされる者は氣の毒なものだ。

雜誌に揭載された小說の外に單行本も少くない、天外のにせ紫を眞先にして鏡花の風流線、掬汀の新生涯と云ふものも遲ればせに出たが、此處では天外のにせ紫のみを評すとしやう、之は曾て二六新聞に連續揭載されたもの、彼の初姿から引續いて戀と戀續いてははやり唄迄も關連したもの丶後談である。戀と戀との中では未だほんの小兒で初々しかつた君江が、此の編では立派な失戀の處女となつて、今篇の主人公の地位に直つて居る。お俊は立派な分別ある一家の副主人＝＝母となつて、華やかな感情は消え果てゝそろ〳〵過去の行跡を悔ひ初めて居る。はやり唄の圓城寺の妹娘は此處へ顏を出して一役務めて居る。此の篇を讀んでも然うてあるが、天外は人間の初期に關する戀愛と云ふものが、其の一生涯を通じて奈何な影響を及ぼすかを書かうと謀んで居るのでは無からうか。連續された戀編は勞働が人心に及ぼす影響や、主義、教育が人に與へる印象や、其れから生活の苦痛が人の心を變化さす事なぞは藥にしたくても其の作中に見當らぬ。人は只單純に己が心のまゝに動いて居る動物の樣に顯はれて居て、境遇に動される狀態が何の事はない木偶の樣だ、いや然うした狀態に人間を見るのが其の標榜して居る自然派の立場なのであらう。だから多くの人、殊に日本の國民の樣な英雄を崇拜して、祖先の遺訓を完全に遂行して行かうと云ふ國民に多くの異論のある譯だ。殊に可笑しく思はれるのは、此の篇中に顯はれて居る三人が、三人とも失戀者である事と、人の見方が然う云ふ態なので自然同一性格に陷つて居る事だ。前編としてあつて追つて後編が出るのだから、悉しい評をする事が出來ないが、然うも云ふもの丶、其の事件を發展して行く伎倆に就いては只管感服する。文はいよ〳〵締つて來て一言半句の無駄が無い樣になつた。繰返して云ひたい難は人間の見方の淺薄な事だ。

（文藝倶樂部中での讀物に眉山の綾小袖だ。第一に氣の附くのは其の文章の伎巧の巧い事。鏡花とは別種の巧さがある。殊に鏡花と違ふは、此の作家は、人間が不思議な運命に支配されて居る事を書き顯はさうとするが不思議な事だ。主人公のお絹が昔日窮にある時、其の戀人の幸さんが正に自分に其の戀を打明けんとし、自分も其の戀を承諾して手を握らんとする一刹那出火の爲めに何事も得云はず、其の儘別れ〳〵になり行く過り、モンパッサンの短篇にも然る趣向があつた、暗合なりしか、何にもせよ妙云ふ可からず、其の親屬なる富家の娘お盟の話を母がお絹に語るにも、人間は境遇に依て變化されて行くも、其の境遇なるものは、不可思議なる運命より紡ぎ出されゐる事をほのかに顯はす、恐らく眉山は運命論者ならん、傑作と稱ふる程ならねど蓋し眉山近作中白眉の作

品であらう。

○柳浪君の座敷牢、骨董の乳兄弟と似たるもの、只面白くすら／＼と讀流して格別評す可き程のものでなし、桑村子の果報者、吾人の評するを迷惑に感ぜらる可ければ、吾人も評せざる可し、却つて見る可きは黙笑小說のしけむなる人の新知己だ、些と面白い詩的の材料で、文章にもなか／＼老練な處がある勉む可しと云つて置かう。

○新小說は拾周年の紀念號とかで大分厚かつたが、中は格別なものぢやない。鏡花のわか紫、春雨の蜜月、苅心の露助の妻、宙外の比目の波、露伴の術競べとメめて五篇、先づわか紫から評さう

○鏡花の文の一種獨特な調子は、此篇によく露されて居る、會話のうまい事も、もう云ひ盡してくどいから申上げまいが、偖小なる伎巧でなくて、大なる伎巧＝＝趣向とか、人物の性情＝＝となると、些と困る、之は白縫草双子だ。鏡花が有名になつたローマンス風のものならばいゝが然うでもない。少女が山を分けて行く處はいゝが、夜熱海の街を海賊が荒らすなど云ふ事が今時あらうか、其よりも湯氣の中に籠つて居て外の警吏さへ知らない事を、他縣の警部長が知ると云ふのも可笑しなもの、例のピユル／＼シユツポン／＼と云ふ咒文で天地が顚覆する事が出來ると云ふ草紙の遣方と一つ其位ゐの天眼通があれば、家の直ぐ側に海賊の張本が忍び込んで居るのが知れさうなものだのに……。少女を山中に殺す車夫の口調から察して、大方鏡花は草艸紙を讀み、其の趣味に釣られた擧句此の作をしたものであらう。

○春雨の蜜月。本郷通りの下宿屋の二階に未來の空想に耽つて樂んで居る女學生連に受けさうなもの。誰かゞ新婚當座の作者の惚氣を聞かされるやうな氣持がすると云つたが、「まさか然うでもあるまい。此作家は例の小羊で名を馳せた以來、一向に拙作ばかり出して名を落した樣に見ゆるが、兎に角こんな話でも一通り讀者をなして首肯せしむる程發展して伎倆はまだ感心すると云つていゝ。文章も會話も餘程缺點が少くなつた。主人公の姉の性格など些と顯はれて居る。處々幼稚な口吻が見ゆるのは作家に猶進步する餘地がある處だらう。

○宙外の比目の波、之も新婚ものだが。新小說の讀者はよく／＼御目出度いものに打附かつたものだ。人世何が樂しいと云つても眞白に雪の降り積る時、温い家の中で、愛する妻と物語る程愉快なものはなからうと云ひたい位なもの、二本松からわざ／＼老嫗が來て物語りに華を咲すのは、芝居のお姫樣に戀の諸分を教ふる老女が附添つて居ると云ふ格。お陰で此の小說を讀で、小說は面白いものと知つて讀み初める人が出來やう、先はめでたし／＼然し續編は出るのだと思ふ。

○苅心の露助の妻は飜案としてあるので評は止めた。露伴の術競べ、面白く讀めた。自分には空うつ涙よりも此の方が傑作でないかしらと思はるゝ、頭から滑稽的に書かれて居るが、一字一句ゆるかせにした痕がなく、何處かどつしりと落附いて居て、成程大家らしい眞味ある面影が字句の上に顯はれて居る、作中の人が眼前の板の上に押据えられて居て、其れが作者の地の文句に連れて動いて來る樣に感ぜられた。此の超凡な處が露伴氏の名の高い處だらう。然し之のみで作家は伎術は盡されて居るものでない。此の大家に就いて述べたい事が數あるが長くなるから改めて述べやう。

○終りに雜誌に附いて一言二言述べやう。七人は去年の末から出たものだが品のよい、清新な趣は新年の號にも見えて居る。然し其の中の新體詩に　感服が出來ない。サツフオの譯は英譯からださうだがなか／＼うまい。明星の新年號はなか／＼立派なものだ。主筆の鐵幹には種々世評があるが、之丈けの雜誌を赤手に支えて、やつて行く伎倆は感服せずには

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居られない。どうかして永續してやらしたいものだ、此の號には上田敏君の新體詩が卷頭て、泣菫、有明、鐵幹、晶子と顔を出し、其の外、風葉、春葉、癸山も名を並べて居る。中澤弘君の巳年と云ふものを顯はした歯は立派なものだ。中を讀んで些々氣附いた事は有明の詩風がひどく變化した事だ、其れから鐵幹の法樂の夜は近時中の傑作だらうと思つた。短歌は奈何しても背の君よりも晶子女史の方が上だ。白百合の新年の號は音樂號と名乘つて居る。成程中にはベエトオベンの事が多く書かれて居る。此の雜誌もと明星に反抗して立つたと聞いて居るが、今一層勵んて貰ひたい。中て氣が附いたのは泣菫のならばや面白く讀まれた。草野柴二のモリエールの押付醫者の譯も面白い。

新派女性の歌

緒方流水

▲新派の歌は最う今日は決して珍羞てはない、其の紹介としてはチト遲そ過るけれど、其の紹介てなく、今度東京新詩社から『戀衣』が出た、其れを機に、まだ新派の歌に興味を持たぬ人や、頭で解し難しとする人々の爲に、眼に着いた「戀衣」の中の歌を抽き、其の或物を評釋することにした、

▲東京新詩社は人も知る如く新派の結社である、一口に新派といふけれど、其の新派にも流義々々があつて一概には評されぬ、何しろ東京新詩社は其の本家本元として許るさるべきものだ、與謝野鐵幹君を中心として、登美子、雅子、晶子、其の他多くの才人達が華を嚼み蘂を吸ふて我劣らじと競はるる、其の新詩社から出た「戀衣」は少しも男氣のない登美子、雅子、晶子の歌集なのである

▲新派の歌を讀む人の第一に感ずることは(一)厭味の多いことと(二)意味の解し難きことと(三)其の小主觀に放つとなどであらう、一度其の欠點に厭氣を催した人は二度と見向きもせぬので、其れも讀み剛るれば厭味も左程鼻にはつかぬ、意味も何うやら解せらるるのである、と云ふと何うやら提灯になるが、是れは實際の話である

▲其れて能く嚙み占めた味をお話しすると、新派の和歌總體の批評に亘るから、其れは折を見るとして態と「新派女性の歌」と題した、ここには閨秀達の戀や詩美の理想を探ねて見、また其の主觀的な傾きをも叩いて見たならば、新派の歌が凡そ何のやうなものかが分り、頭で解し難しとして興味を持たぬ人や、食はず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「戀衣」を其の媒にしたのである、これは文學通の人に見て頂くものではない

、▲「戀衣」を讀んで先づ眼につくとは其れが爭はれぬ女性の歌であると云ふことである、「その涙のごいやらむとのたまひしとばかりまでは語り得れども」、見給へ、どう見ても女性の歌である「なにとなく琴のしらべもかきみだれ人はづかしく成れる頃かな」、琴と云ふ、直ぐ其の女性なることが、聯想されるでないか、況して「人はづかしく成れる」と云ふからは女性でなくて誰であらう

▲同じ戀の歌にしても女性は何處か女性らしいところがある、「日を經なばいかにかならむこの思たまひし草もいま蕾なり」これも男の歌と見れば見らるるけれど、矢張花草を女に與へた男に、女から其の花草の今蕾せる如く、我が胸にも云い知らぬ情の萌が萌えた、これが日を經るにつれて或は烈げしき戀といふものになるかも知らんと男に云ひ越したものと見れば一層趣がある

▲「射あつべし射あてじとても矢はつがへ金の桂に額まける君」「金の桂に額まける君」とは月桂の冠を戴く人を指すのである、ああ、我は榮えある此の君を最愛の人にせばや、假し其の願ひは叶はずとても矢はつがへ、成るか成らぬかを試みてんと云ふのである、これも女の人を戀ふる歌であらう

▲「地にあらず歌にただ見るまぼろしの美くしければば戀とこそ呼べ」、御身等が所謂戀とは何ぞやと問へ、其の答へとして此の歌は詠まれたのである、「審判の日をゆびきずつくるとげにくみ薔薇つまざりし罪といまさば」、前の歌に比べて一層之は戀に對する極端な觀念を道破したものだ、前者は何處〳〵までも戀を神聖なものとして居るけれど、後者は假し神聖ならずとも、多少肉的にもせよ、人は戀ひすべきものだと喝破したのである、世の行の潔白を誇る者よ、神若し審判の日によう戀せざりし汝等が罪問ひまさば如何に答へまつらんと欲するやと、新派の、殊に東京新詩社一派の自由なる戀の理想がよく現れて居る

▲また下の歌はこれは敢て戀といふではないが一讀の下女の愁ひといふことが分る、「指の環を土になげうちほほえみし涙の面のうつくしきかな」「愛ければぞ爪に紅せぬ夕ぐれを色は問はずて衣もてまゐれ」、前者は人を思ひ諦めた歌、後者は切りに思ひ惱む人の歌であらう

▲詩人の傾向として情の赴くが儘に放任する其の傾きを臆面もなく云ひ現はした歌には、この人々の戀または世に對する態度を活躍せしむるものがある、「またの世は魔神の右手の鞭うばひ美くしき戀みながら打たん」「狂へりや世ぞうらめしきのろはしき髮ときさばき風にむかはむ」「狂ふ子に狂へる馬の綱あたへ狂へる人に鞭とらしめむ」の如き、其の初めなるは妨る者もなく恣に戀に醉はんと欲し、中なるは世に怨みる所あり、終りなるは思ふがまゝに狂ひ狂はしめんと云ふのである

▲更に「世は下にいかにも強ひようるはしき日知らで土鼠土を掘るごと」「よわき子は天さす指も毒に病む榮えを祝へ地なる隱草」「今の我に世なく神なくほとけなし運命するどき斧ふるひ來よ」「われを問ふやみづからおごる名を誇る二十四時を人をし戀ふる」「夏の日の天日ひとつわが上にややまばゆかるものと思ひぬ」の是等の歌を讀めば、或は世に激するが如く、怨むが如く、或は捨鉢となり、或は己れ自ら高しと嘯くが如く、傲然として憚る所なく、又包む所なく、喜怒愛樂、凡べて其の情の赴くが儘に放ちて敢て抑制せざるの人を見る、否な其の詩人を見る

▲而して其の歌に對する抱負如何にと云ふに、是れまた己れ善しとする所世の譏り嘲りを顧みざるの概がある、今其の一二を擧れば、「師と友とわれとし讀みてうなづかば足るべき集と智者達に言へ」「耳しひしひじりはわかきうぐひすのよき音は問はず籠に閉ぢてのみ」「彼の天を知らぬ土鼠の宮守にわが歌惡しと憎まれにけり」「耳かして身ほろぶ歌と知りたまへ甚ならばただに見てもあるべき」「幻花は赤熱病める子がかざしあらはに歌ひはばからぬ人」の如き世の譏りに激して其の歌の抱負を洩らしたものであらう

▲「戀衣」一巻の中には左程難解と思はるるものはない、唯だ四五首解し切れぬのがあるが、厭味もさう鼻にはつかぬ、ただ其の恣に小主觀に放つのと題目の狹少なるの一事は依然として舊の如しである、世は我れに辛らく　我を容れ得ぬものぞとの思想が、何時も此の人々の主觀を作つて其の歌に附いて廻はる、例へば「書よみて智慧賣る子とは生れざり蛇のうすぎぬ價ある世よ」「みなさけかねたみか仇かあざけりかほほゑみあまた我をめぐれる」「大神のみまへめぐりて立たむときかしてき人の今日を忘るな」「わきて身にしむやその秋もみぢ葉のこきひと葉すら呪はれの色」の如き、

何れ世を怨み、憤り、敵視し、呪咀せざるはなしてある

▲從來新派の弊として惜まれ又は厭はれた厭味難解の二弊は今後漸く脱し得るものとするも、依然其の小主觀を脱し得ぬ限りは新派の前途知るべしである、歌の難解は元と新派のみの弊ではないので、古歌にも隨分難解のものはある、誰も知る小倉百人一首の中にすら單に難解の點にかけては新派の歌に讓らぬのがある、趣味の複雜深長を務むれば務むるほど詩の難解は免かれぬ數にもなるので、望む所は一誦三嘆せしむる餘韻嫋々たるものをとの期待に添はぬ處から、切りに首を捻ねらする其の難解を厭ふまでて、難解はさう非難するには當らぬのである

▲また厭味は新派聲調の然らしむる所であるが、其れとても漸次醇化されつつある、其の氣臭の容易にぬけぬのは、一つは其の小主觀に放つからであらう、今少し心意氣を大きくして、愛と同情を以て世に立ち世を觀ずる態度に到り得るならば其の厭味は強いて撓むる迄もなく自ら解脱の時があるのである

▲彼の自ら高しとして世に拗ね罵るやうなことてはまだ〳〵淺墓な心掛と云はねばならぬ、第一、詩の目的にも相應しからぬことだ、世の詩人たるものは人をして詩其物を通して床かしく思はせるものがなければならぬ、新派の歌を讀んで、假し其の着想の奇警に驚かさるるとも、床かしく慕はしとの心は起らぬ、「戀衣」も其の憾みがあるのである

▲次に其の常套の口吻に依て察するに、此の人々の詩美の空想とも云ふべきものは凡そ左の如きものである、「掘きえて誰のまなかに立つと見ぬ天の香をもつ百合花のうへ」「その神のみすがた知らず御名知らず夢はましろの百合の園生に」、更に其の空想の殊に美しきもの一二を摘めば「七たりの美なる人あり簾して船は御料の蓮きりに行く」「玉まろき桃の枝なく春のかぜ海に入りては眞珠生むべき」、更に奔放なるものは「第一の美女に月ふれ千人の姫に星ふれ牡丹翻せん」の歌即ち是れ第一の美女には月よふれ、千人の姫には星よふれ、我れ是れに花の王牡丹を翻せんぞといふ、嗚呼何ら飄逸にして雄大なる空想ぞや、往昔アントニーと宴を張りて、珠を酒に溶きて飲みたりきと云ふ美人クレオパトラが故事ぞ忍ばるる

▲若し夫れ「わが命に百合からす羽の色にさきぬ指さすところ星は消ぬべし」の歌に至ては果して是れ本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氣の沙汰か、「今日みちて今日たらひては今日死なん明日よ昨日よわれに知らぬ名」の此の思想の如きは所謂生前一杯の酒なるもの、快樂主義にかぶれたるもの、斯の如きは新派の所謂厭味となる、戒むべく愼むべし

▲終りに我が面白しと見たる歌數首を擧げん、「紅梅にあわ雪とくる朝のかどわが前髮のぬれにけるかな」これは淸婉の極致、次ぎなるは心ざま忍ばれて床し、「いづこ踏みいかに踏らむちる花は山をうづみぬ我をめぐりぬ」また「髮あらへば髮に花さき山みづにさくらいさよう淸瀧の里」は實況を歌ふて趣殊に深く、「金色のちいさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に」は多く工まずして妙云ふべからず、「菜の花のうへに二階の障子見え戶見え伯母見えぬるき水ふむ」は、漸く近づくに、先づ二階の障子見え、次に戶見え、やがて伯母も見えて、水ぬるき春の川を渡り到るの狀能く三十一字に描かれて秀逸たり、若しまた「花のあたりほそき流する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の月」に至りては華詞重疊、歌は斯くぞあらまほし、或人壬生忠岑が「有明のつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうきものはなし」の一首を、華詞重疊、企て及ぶべからずと激賞せしと聞く、而も到底「花のあたり」の歌に及ぶべくもあらず「きりぎりす葛の葉つづく草となり笛ふく家と琴ひく家と」は下の句稍や細工に過ぎたり、若し更に謠唄ふ家其の隣りにあらば直に喧噪場裡と化了し折格の詩境も滅茶々々となる、「花に見ませ王のごとくもただなかに男は女をつつむうるはしき蕋」は着想警拔、美事女尊男卑を喝破したる積りならんも元と是れ附會の思想、歌としては何の妙味もなし歌は凡べて素直に思邪なきこそ好けれ、拗ねて惡く氣取りたる、嘲ち怨みがましき、寂びしき、希望なき、徒らに奇を衒ひたるなど、斯くて其の歌世にありて何の要ぞ、願はくば省み給へとて

▲好き歌尙ほほかに多かるめれど左はとて畧す、穴賢や

With love's light wings did I o'erperch these walls,
For stony limits cannot hold love out;
And what love can do, that dares love attempt.
——Shakespeare.

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

當世美術家氣質

八面生

橋本雅邦

日本一の美術家にて、古稀を超えた身で孜々汲々朝から晩まで彩管を執つて倦むことなきは青年も及びがたい。それに玉章翁とは異なり感興を重んずるので、時としては全く筆を執らず、默想することもあるさうな、談話に於ても興が湧けば大に語り、さらでは甚だ沈默である。子弟をして自分の模倣に終らしむまじとするは感心だが、繪畫の批評は、時として殊更に奇を求め人の意表に出でんとする傾があるのは惡い癖だ。翁は淸元でも、端唄でも都々一でも、中々巧みにて、杯を啣んで江戸ッ兒流の巻舌でやらかすと、旁人をして恍惚たらしむと。此頃は戰爭の爲に依賴者少なく、二流以下の畫家は大に窮せる中に、翁は却て多年山積

梶田半古

版下畫家としては一流だが、絹本に於ては感服される作が少い。この人畫家中では比較的高尚で、身持もよい方であれど、其の代り氣取り家との嘲嘖々。繪畫は凡ての物より尊とき者と信じ、自分は又畫家中の第一人と信じたる意氣組は凄じい。新體詩も作り、和歌も作り、何事も上品を主とし、藤原時代の殿上人じみてゐる。この人と並ぶべきは

川合玉堂

にて、品行方正、半古氏よりはやゝ品下りたれど、其の代り遥かに如才無く遥かに八方美人の趣がある。雅邦門下の高弟にて、山水畫に於ては一流の地位にあれど、あまり器用に失するから前途如何か氣遣はしい。明進軒の娘曰はく「梶田さんは鷹揚だが、川合さんはコセ〳〵してゐる」と。玉堂氏たるもの、もつと遠大の計をなし玉へ。

鏑木淸方

販下に於て青年の一流、前途望多し。氏は美術家中では珍らしく文藝の趣味を解し、觀劇眼あるは更なり、小說類にも少しは鑑賞力あり、女か金儲けの外には何も知らぬ畫家の中ては稱贊を價すべし。この人等の組織せる烏合會は日本畫家の中では最も純潔にて例の畫師根性を有せざるやう也。淸方先生鏡花氏と仲がよいやうだが、實際鏡花の作にはこの人の挿畫が最も調和がよいと思はれる。

中村不折

正岡子規によつて社會に紹介されたので、どことなく畫風が子規の俳句に似てゐる洋行して非常に苦勞してゐるが、耳が遠いので言語は覺えず、且つ聾にあり勝の廻り氣て、日本の留學生間にも評判惡く、懇意に交際する者もなくて、大に困難してゐるさうな。しかも成績は中々よく、巴里の油繪の競技で一等賞を得た程、三月中には歸朝するさうだ。

時鳥繪になけ東四郎次郎
不動畫く琢磨が庭の牡丹かな　　蕪村

如是我聞

翁岫子

◎名現はれたるが故に必しも貴からず、又必しもエラからず、世には無名の英雄、無名の學者甚だ尠からず、東京帝國大學文學科敎授夏目金之助氏の如き、將た東京高等師範學校講師佐久間信恭氏の如き共與に英文學に精通せると邦人中其右に出づる者なし、然れども大學學生以外誰か夏目氏の博識を知れりや、將た高等師範學校生徒以外に誰か佐久間氏の學力を知れりや、顯晦は強て傷むに足らずと雖も、顯はる可き技能卓越せる人の顯はれざるは恨事ならずとせんや、某某某等が學識の薄きに比して衒誇に長し虛名徒らに世に嘖々たるに二氏の如き博學の士が人の知る處とならざるは惜しむ可からずや、夏目氏曰く學校の先生なんか嫌て溜らんけれど飯喰ふ爲には嫌やな事もせにやならぬと、氏の如き好學の士をして好む處に從はしめば文壇に貢献する處多大なるや知る可きなり。

◎人の運命は怪しくも亦面白けれ、今より二十年前の

知泉、中井喜太郎、鈴木力の三氏之なり、當時窮窟なる學校の規律は覇氣縱横の奇才を容るゝ能はざりしが三氏共に謂ひ合はしたる如くに業を卒へずして倶に校門を去りて各々新聞紙に從事し忌憚なく其抱負を吐露したり、當年東京日々の朝比奈碌堂、讀賣新聞の中井錦城、二六新報の鈴木天眼の名は操觚社會に嘖々喧傳せしに非ずや、爾來文運の進歩は國運の發展と相待て殆ど停止する處なく日を趁ふて進歩しつゝあり、其昔し大學豫備門に三秀才の名ありし人士は今何を爲しつゝありや、時の權門勢家に最も眷顧せられし朝比奈碌堂は海軍通譯官となり人をして海軍省は死馬の骨を買入れたりと笑はしむる程に意氣銷沈し、中井錦城は終に江戶城を去りて、遠く漢城に入り、僅かに居留民長と云へる村長の如き職に在りて一部の人のみに其姓名記臆せらる、鈴木天眼は長崎に在りて東洋日の出と云へる田舍新聞に其殘喘を保てるのみ、才士恃才恐守愚、才士不才愚不愚とても云ふ可き乎。

◎人情は東西に通し、德行亦彼我共に同じ、故に內に德望ある者、外に出てゝ貴尙せらるゝ內に在ると同し、三宅雪嶺の學識、品格、德望共に朝野人士の認知する處なり、雪嶺の唇舌晦澁なる、居止の單純粗朴にして、一見其人物の高且大なるを知り難し、然れども爭はれざるは其品格の何れにか見はるゝ事之なり、往年雪嶺の歐洲に遊ぶや、內に在ると同じく晦澁の言語、粗朴の態度、毫も異なれるものなし、然るに到處のホテルに宿泊して其女將下婢に至る迄、獨り雪嶺に對しては謙遜して赤心より敬意を拂ひ、同行の邦人をして不思議に感せしめたりと云ふ、曾て英國公使館に駐在したる書記官某歸朝して此の事を語り、且つ云へり邦人の學者、政治家商人等の彼地に歷遊して三宅雪嶺の若くに尊敬せられし者一人もなし、三宅は不思議なる性格を有し居れりと以て其人を推知し得べし。

◎本年の歌御會始に詠進せし歌一萬六千二百三十二首の中に選進の榮を得て御前披講に預りたる作者七人ありしが中に山梨縣東八代郡境川村の人にて大須賀まつ江と云へる婦人は陸軍步兵二等卒大須賀庄次氏の妻なる山なるが其歌に

　　つはものに召し出されし我せこは
　　　いつこの山に年迎ふらん

と何ぞ其調の高くして其情の深きや、眞とに之れ溫柔にして敦厚、哀んで傷らざるものに非ずや、それ歌は人の心を種として萬の言の葉となり、天地をも動かし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目に見へぬ鬼神をも憐れと思はせ男女の中をも和げ武士の心をも慰むとは紀貫之が言也、若し夫れ我が幾十萬の出征將士一たび此の歌を諷誦せば徐ろに戰鬪の勞苦を忘れ其溫柔敦厚の節操に感憤し勇氣益々加はる可し、和歌の德や大なる哉。

◎一月廿五日第三回旅順口閉塞隊戰死者の葬儀を青山墓地に擧行せり、征露の軍起て以來、海に陸に我忠勇の將士が健鬪苦戰し、世界列國をして其强勇に驚倒せしめしは謂ふ迄もなし、就中旅順口閉塞の擧に至ては壯烈千古に絕し、鬼神をして其精忠に泣かしむ、湯淺竹次郎、濱白石葭江、野村勉、向菊次郎等少壯有爲の士官皆之に死せり、嗚呼亦慘なり、詩人詠して曰く、

轜車肅々去安之、靈氣拂露胡笳悲、十三箇柩主爲誰、道旁觀者皆歔欷、車上何所載、勳綬劍佩粲輝日、棺中何所有、無骨無肉無毛髮、偉哉閉塞第三回、猛氣叱咤驅風雷、爆沈朽船湮敵港、功成欲返激浪堆、肉飛骨碎亂丸裏、海上無人收戰骸、嗚呼十三士、壯烈何乃爾、吁嗟十三士、一死鴻毛視、生爲盡忠臣、死爲護國鬼、百千萬年天地間、英靈一氣凛不死

鬼面魔語

醉美生

▲最も容易に人を御せんとすれば、其弱點を捉へて之を操縱するにあり。最も有効に人を動かさんとすれば、其長所に命じて之を使役するにあり。故に弱點と長所とを合せ知りて初めて眞に人物を用ふることを得べし。

▲上村中將が歸宅して、「お父さん」と喜び迎ふる其子女を見しとき、子女等が學友に擯斥せられて退學したることさへありし當時を思ひ、必ずや悲喜交々至りて無量の感慨にうたれしならん。予は此時の有樣を想像する毎に、一幅の好畫圖の忽然として眼に映ずるを覺ゆるなり。

▲戀愛は例へば煙草の如し、一度其味を知れば容易に之を捨つること能はず、若し喫煙を廢せば却てニコチンの毒に困しめらるゝが如く、戀愛を失へば必ず惡癖の病に惱まさるべし。

▲多くの人が集會せんとするとき、我れ先きにと押し合ひ、揉合ひ、騷擾喧噪殆んど見るに堪へざる醜態を演ずるは我國人の一大缺點なり。德義上より非難すべきのみならず、實際上よりも自他互に不利なること此上なし。西洋人の如き此點に於ては頗る秩序正しく、數萬の集會に於ても靜粛整然、毫も喧騷の樣を見ることなしと。西洋とあればつまらぬ事まで、之に倣はんことを唱へて、却てかゝる重要なることを閑却す。本末をあやまれりといふべし。

▲妻君を求めんとならば、餘りに美ならずとも極めて堅氣なるを主とすべし。情婦を擇ばんとならば少しく浮氣なりとも大いに美なるを主とすべし。これ妻君は最も眞面目なる家庭の事に關し、情婦は專ら巫山

戯たる遊樂の部に屬するが爲のみならず、家庭の事に心配するは精神的に人を殺し、家庭外の事に氣を揉むは却て人の感情を生々たらしむるが爲めなり。

▲アイヌ人が議論の勝敗を決する法こそ頗る奇妙奇的烈のものなれ、先づ互に饒舌りつゞけて一晝夜又は二晝夜にも及び、疲勞して口を開く能はざるに至るものを以て議論に負けたるものとなす。若し又長時日に亘るも互に疲勞せざるときは、合意の上共に棒を取り上げ、彼れ三つ、我れ三つ、交々背をうちつ、うたれつし、痛しと聲を發したものを以て負けたりとなすと。野蠻時代の熱湯を以て曲直を判ぜしよりも一層無邪氣にして趣味ありといふべし。

▲マレー半島に於ては裁判官は假面を被りて其職を執り、事果て後森の中に入りて其假面を脱る。これ人民に其裁判官の何人なるかを知らざらしめんが爲めなり、然かせざれば土人の怨みを買うて危害の身に及はんことを恐るゝたよる。

▲電車の回數切符及び往復切符の發賣は、會社が明かに政府の裏をかきたるもの、通行税の豫算を狂はしめしこと蓋し少くならざるべし、政府當局者は今にして始めて民をして無知ならしむるべしといふ老子の言の眞味を悟りしならんか。

▲さるにても可笑しきは車掌共の仕打なり、己が腹のいたまぬを幸ひ、盛んに往復切符の効能を說き、片道五厘往復一錢の得用なることを喋々す。政府こそよい迷惑なれ。

▲人間は元來横着なる動物なり、少しにても易きに就き、些かにても樂なるを求めんとす。茲に一貫の荷物と二貫の荷物とあつて。二貫のものを負はんことを命ずれば、甚だ太儀らしき顏をなせども、二貫の荷物と三貫の荷物とを置きて二貫のものを命ずれば左程に嫌らしき様も見えず。かるが故に人をして何か仕事をなさしめんとすれば、先づ假りに甚だ難儀なるものを與へ置き、それより眞になさしめんとする仕事を授くべし。彼れ必ず後のものに就きて而かも其れ一つを命ぜらるゝよりも厭やな思を起すことなるかるべし。是れ一種の人物使用法なり。

▲「二六」に於ける岡鬼太郎氏の劇評はよく肯綮に當るもの多し。氏今の生意氣なる女學生を寫せる小說を名つけててよだわ小說といふ。蓋し彼等女學生が得意のよくツてよ、いやだわなどより起これるなり。此所謂てよだわ小說ほど理屈ぽくして無味なるはなく、てよだわ小說を脚色せる演劇ほど厭味あつて鼻持ならぬはなし。明治の劇詩人起つて此弊風を一掃する日の扨ても待ち遠しきかな。

▲てよだわ演劇に滿足しつゝあるものゝ觀劇眼は、所詮明治十年頃の政治小說を喜べるものゝ小說眼と全一の階級にあるものなり。

▲宮戸座の「岸姫」は予が見たる正月芝居中の白眉なりき。宗之助のおそよよし朝比奈又女形として上の出來、九米八の藤巻よし、駒子の飯原兵衞亦惡しからず。壽美藏の與茂作甚だよかりしも背を向けて縛られし手を合するを見せると、「昔神世の時にはの、親兄弟でも夫婦になつた例はあるわい」の迷詞を附加せしは打摧しなり。本郷座、東京座の無趣味なる「乳兄弟」を見來りて此「岸姫」を見る、初めて芝居らしき芝居を見たる様の心地せり。

▲歌舞伎座の「忠四」を見て素行の「忠四」を聞くより深き感慨にうたれざりし予は、又もや東京座の「岡崎」を見て、小清の「岡崎」を聞くよりも興味の索然たるに呆れぬ。嗚呼予は今の劇壇に傑物の存せざるを悲しむ情に勝えざるなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會

都市の娯樂機關

横山天涯

人類の生活に娯樂の缺く可らざるは今更言ふ迄もなく、『能く働け能く遊べ』の俚言は、這の般の消息を說明し得て餘り有り、而して一種の有機體たる社會としては、最も錯綜せる都市の上に於ても、娯樂機關の緊要なるは、之も余輩の喋々を要せずして、既に世人の熟知する所なるべし。

然るに、東洋第一の都市たる我東京市に於ける娯樂機關の設備如何と見るに、其の人口より言へば、倫敦、紐育、巴里、伯林、維也納に次いて、多數の住民を包容せるのみならず、今や世界の强國を以て知られたる帝國を控きて、常に世界万衆の人口に膾炙せる東京市が、其の娯樂機關の設備に至りては、德川時代の形式を其の儘、何等の新面目を出さゞるは、余輩の甚だ遺憾に堪へざる所、試に東京市民が常に其の精神を慰むる所の社會的歡樂を擧ぐれば、曰く劇場、曰く寄席、曰く觀物場、曰く相撲の數種のみ、近年に至りて、短艇競爭、自轉車競爭等の事行はるゝが如しと雖も、僅に是れ一部の嗜好に止りて、未だ以て市民全般の娯樂たるべき程度に進まず、而して如上の中、最も市民の意を投じ、且つ精神に慰藉を與ふるは、實に劇場を以て第一となす、余輩は今日東京市に存する劇場が、社會政策の上より、娯樂機關として、幾何の價値あるやを批評する前に、劇場は、東京市民に幾何の觀樂を與へ、娯樂機關の用を果せたるやを見んと欲す。

一　大劇場と小劇場

劇場に大劇場と小劇場とあるは、世人の普く知る所、團菊在世の頃は、所謂千兩役者は小劇場に出づるとなく、小劇場に出づる俳優は、上流士人の唾棄して顧る所とならず、大小の別、極めて嚴密なりしと雖も、近年は稍々大小の區別混淆し、歌舞伎役者にして、屢々小劇場に出て、書生俳優の徒、倘揚々として大劇場に現はれ、其の區劃、甚だ瞬昧なるが如しと雖も、社會上より見れば、其の入場料に於て、觀客の種類に於て、依然として大小の別存す、而して美術上に於ける品位及價値は兎も角も、能く衆人に怡樂を與へ、娯樂機關の本能を全ふするは、大劇場よりも寧ろ小劇場にあり。

今、東京市に幾何の劇場ありやと言へは、大劇場九、小劇場十二、而して其の興行日數及觀客を見るに、三十五年の調査に依れば、大劇場は、興行日數千二百二十一日にして、即ち平均一日間に四ヶ所の興行ありて、其の觀客數は、百二十三万五千四百二十五人に出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

で、小劇場は其の興行數は二千五百三十七日、平均一日間に八ヶ所、即ち大劇場の倍數にして、其の觀客も、同じく大劇場に倍して、其の數、實に二百十三万幾千人に上ぼる。

雖然、其の數が倍也の一事を以て、中等以下の男女が、劇場に出入すると中流以上より多しと思ふ者あらば、是れ大なる誤解也、例令小劇場の觀客が、大劇場の觀客に比して、其の數二倍なるも、之を東京市民の七八分を占むる中流以下の總數に比例を取れば、其の割合極めて少數と爲るや必せり、嗟呼劇場は都市の娛樂機關の最たり、然れども市民の或者は年に三回乃至五回、甚しきは十回至乃十五回を重ぬる者ありと雖も、他の大部分に於ては、五年も、十年も、劇場に出入し得ざる者多きを記憶せざる可からず、开は兎も角も、歩を進めて、大小各劇場の興行日數、及觀客數を擧げて、其の詳細を讀者に明かにす可し。

二　興行日數と觀客數

先づ所謂大劇場の興行日數と、其の觀客數を擧ぐれば

座名	興行日數	觀客數
歌舞伎座	一四四	二三二、七〇〇
明治座	一三二	一二三、四九三
本郷座	一五六	一四〇、五六四
市村座	一六六	一九二、一七四
改良座	二五一	二一〇、九八九
新富座	一八三	一七四、六四一
東京座	一九八	一六〇、八六四

の數字を示す、即ち觀客數に於ては、歌舞伎座第一にして、明治座最も下位に在り、但し右觀客には、木戸觀客あり、一幕限觀客あり、如上の數字は此の兩者を總括せるものと知るべし、更に小劇場の仔細別を擧ぐれば、

座名	興行日數	觀客數
三崎座	三〇二	二一六、八四七
眞砂座	二六九	二九四、三〇七
淺草座	一二〇	九〇、四四一
演伎座	一七〇	一二九、一八六
柳盛座	二五二	一九九、一四六
榮座	七八	三七、〇五八
開盛座	二五二	三六一、一〇二
宮戸座	二三〇	一六六、〇八九
深川座	一九三	一二二、三六九
常盤座	三〇九	一九一、一〇五
壽座	一九四	一九七、六六四
末廣座	一六八	一三〇、二六九

の數字を示しつゝあり、之を以て見るに、神田區及日本橋區に於ける三崎座、眞砂座最も觀客多く、職人の巣窟と知らるゝ淺草の柳盛座、及工場職工の多き本所壽座の如きも、同じく多數の觀客あるは、注目すべき現象たらんか、而して其の興行日數は、前記の如く總計二千五百三十七にして、觀客數は二一三五五八三人なりとす、

以上悉く三十五年の調査に屬す、眞砂座演伎座の如きは、其の觀客比較的に生活の良好なる者多しと雖も、開盛座の如き宮戸座の如きは、細民多く、余輩は、此の小劇場を利用し、之に改良を施して、社會政策の用に當てんとを欲して已まざるなり。

更に木戸觀客と一幕限觀客とを分ちて、大劇場と小劇場との間に、如何なる區別あるやを見るに、大劇場にては、木戸觀客七五六一八三人にして、一幕觀客は四七九二四二人あり、小劇場にては木戸觀客は一一五一三八一人にして、一幕觀客は九八五二六二人に出づ、即ち全體に於ては、大劇場と小劇場とを問はず、一幕觀客よりも木戸觀客多しと雖も、特に小劇場の觀客に一幕限りの觀客多きは注意すべき事實たるべし、尙一

	木戸觀客	一幕觀客
大劇場	六一九	三九二
小劇場	四五三	三八八
計	五〇八	三九〇

の數字を示す、之を以て見るに、一劇場に就て言へば、大劇場は小劇場よりも、其觀客多きが如しと雖も木戸觀客と一幕觀客との割合より言へば、小劇場には、一幕觀客の數著しく多し、勞働に忙しくして、常に餘暇之なき者には、一幕觀覽の法、頗る敏妙の作用あるなり。

三　東京市全人口に對する劇場觀客の割合

顧みて右觀客總數を以て、劇場の東京市民に與ふる娯樂の程度如何を見るに、二十八年より三十四年に至る七年間の觀客數を擧ぐれば、二十八年には、大劇場の觀客は木戸觀客と一幕觀客とを合せて七七三七八三人なりしに、三十四年には、上つて一一二八六八四の多數に上ぼり、小劇場にては、二十八年には二八〇七三四なりしに、三十四年には二三六三三六三人の數に上れり、即ち數に於ては著しく觀客は增殖す、然れ共是れ數に於ける增加のみ、東京市人口の增加に比せば、

八年より三十四年に至る七年間の東京市人口增殖に對する劇場觀客の割合を擧ぐれば

	大小劇場木戸數一幕觀客總數	東京市全人口	人口一人に付觀客割合
二十八年	三、五八一、一二六	一、三三九、七二六	二・七
二十九年	四、一六四、九六九	一、三六五、〇六八	三・一
三十年	三、四〇七、四三九	一、四〇三、七六九	二・四
三十一年	三、三五一、六〇四	一、四二五、三六六	二・四
三十二年	四、三〇九、九七九	一、四九七、七八四	二・九
三十三年	四、〇三五、七〇七	一、四九七、五四三	二・七
三十四年	三、五四六、〇四七	一、六三〇、八九四	二・二

右表に依りて之を見れば、觀客數年一年に增加し、二十八年に比して、七年を過ぎたる三十四年には、二十九万人餘の增加ありしが如しと雖も、東京市人口增殖と對比せば、寧ろ却て減少せるに非ずや、即ち明治二十七年には、東京市全人口一人に付二人(二回)とコンマ七の觀客數ありしに、三十四年には減じて二・二の減少あるを示す、由來東京市民は芝居ズキを以て名あり、然かも實際に於ては一ヶ年僅に二回乃至三回の見物を以て甘んずるもの、聊か憫然に堪へたり、而して是れ用事の途中、足を停めて立ち寄る一幕觀客を加へたる總數にして、右觀客數より一幕觀客を除きて、全く演劇の爲に、一日の勞苦を忘るゝ木戸觀客を擧ぐれば、其の數著しく減ぜんなり、ア、劇場は、東京市に在りては、娛樂機關の最も完備せる者、遮莫れ其の觀客數の斯くの如きを見て、余輩は、東京市民が社會的娛樂を有せず、演劇の與ふる慰籍の範圍狭小にして普からざるを不滿足の感に堪へず。

四　寄席と東京市民

劇場に次いて、東京市の娛樂機關の優なる者は、蓋し寄席なる可し、今、三十五年末の現在數を擧ぐれば、東京市十五區に、百四十四の寄席あり、神田區最も多く、其の數十八、淺草、芝の兩區之に次ぎ、其の數十七、日本橋、下谷、京橋、第三位にあり、但し入場人員より言へば、日本橋區最も多く、次は芝區にして、神田區第三に落つ、最も少きは四谷及麴町區にして、其の數、僅に三、以て寄席に對する各區の意向及其の特色を見るべし、其の入場人員は、十五區、百四十四の寄席總數を合して三百八十六万六千八百九十四人、劇場觀客數より多しと雖も、略ぼ相匹敵せるなり。

而して寄席に晝席と夜席とあり、爰に晝席と夜席との興行日數及入場人員を比較するも、一興なるべし、因に、麴町、麻布、赤坂　小石川區は夜席のみにして、晝席なく、他は晝夜併せ興行す、开は兎も角も、晝席

と夜席との入場人員の比較を擧ぐれば

	興行日數	入場人員
晝	一〇、六六八	六二六、七八九
夜	三九、六九八	三、二四〇、一〇五

の相違あり、即ち興行日數に於ても、入場人員に於ても、夜席は晝席よりも、三倍以上多し、今晝夜を合計し、之を明治二十八年以來の東京市全人口に割當つれは

	入場人員	東京市全人口に對する入場人員
二十八年	四、六八二、四一四	三•五
二十九年	五、四七九、七六五	四•〇
三十年	五、二一九、八九八	三•七
三十一年	五、〇九三、五八二	三•六
三十二年	五、二三七、六二七	三•五
三十三年	五、一一九、七二五	三•四
三十四年	四、六六四、六二九	二•九

右表に依れは、寄席の入場人員は、劇場觀客よりも少しく多數に出て、一人に付平均三人乃至四人(三回乃至四回)の割合を見る、是れ寄席は劇場よりも費用少にして、其の出入甚だ容易なるの致す所たらんか、然かも余輩は劇場に於けると同じく、例令寄席の入場員は、一年三回乃至四回なるもの、上ぼつて六回乃至

五　最も簡易なる娯樂機關

觀物場に至りては、其の組織、甚だ簡易にして單純、演劇は大人の娯樂に當るものとせば、觀物場は、小供の意に入りて歡樂の用となり、演劇を以て文明人の娯樂なりとせば、觀物場は未開人の娯樂を以て目すべきもの、演劇は人情に訴ひ心理に質して、高妙の域に入る者なりと雖も、觀世物に至りては、時に幻怪、奇異、時に滑稽、突梯、僅に兒女の喝采を博するに過ぎず、併し乍ら其の費用の少にして、出入に容易なるは、聊か取るべき價値あり、唯、之に多少の智識を加味し、品位を致せば、少年兒童に好個の娯樂となるべしと雖も、今日存ずる觀物に此事なきは、遺むべし。

例に依りて明治二十八年以來、三十四年に至る觀物場の設備、及其の入場人員を擧ぐれば

	常設	假設	入場人員	全市人口に對する割合
二十八年	二四	九九	一、一四九、七四〇	〇•九
二十九年	一七	一五一	一、三六〇、九四九	一•〇
三十年	三六	六二	一、一九八、一七九	〇•九
三十一年	二七	八六	一、一九四、九五六	〇•八
三十二年	一九	一二五	一、六三三、八〇七	一•一
三十三年	二二	一四七	二、三〇四、二二六	一•五

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

劇場及寄席が、其の年に依りて、入場人員に變動ありと雖も、獨り觀物場は平穩なる順序を以て、年一年、多少の增加しつゝあるを、右表の如し、併し乍ら假設觀物場は、三十二年來增加しつゝあるに、常設場の變動常なきは、如何なる故にや、暫らく疑を存して、讀者の解答を待つ。

六　相撲の數字に示せる勢力

近年、上下一般に嗜好を注ぎ來りしは相撲なるべし最も昨年夏場所の如き、頗る索莫たりしが如しと雖も、兎に角も相撲は、梅ヶ谷常陸山の徒輩出以來、頓に新面目を出だして、一般の嗜味に入り來りしは事實なり、今數字の上に示せる事實に依りて、都市の娛樂機關として、相撲は幾何の勢力ありやを讀者の前に示すべし。

昨年一月場所の見物人員を當時發行の朝日新聞に依りて見るに、左の如し

	大人	小兒
初日	一、〇六〇	五〇
二日	一、一九五	五三
三日	三、三六七	三三〇
四日	二、一九八	一二〇
五日	二、五九一	七五
六日	二、三〇五	九八
七日	二、五九一	一〇五
八日	二、五六一	一八〇
九日	三、六三〇	一四〇
計	二一、四九八	一、一五一

即ち相撲見物者は、初日より九日迄に總計二万二千六百四十九人なりと爲す、蓋し實際人員は、恐くは右統計數に倍ずべしと雖も、假に右人員に對し、東京市現住人員の半數、即ち男性全數に配せば、一千人に付僅に二十八人三分に出でず、（最も女性も見物すと雖も暫らく男子のみに取る）、一年二回の江戶の本場所、滿都の士女を騷がせる相撲なる者も、親しく之を調査せば、千人に對して僅に二十幾人しか觀覽せざるなり、他は唯ワイ〳〵騷げるのみ、新聞紙の勝負表に狂へる者のみ、相撲の及べる範圍も、亦狹小なりと謂ふ可し。

七　遊廓及遊伎場

以上、都市の娛樂機關として、劇場、寄席、觀物場、相撲の四種を擧げたり、我東京市の住民は、數字の上より言へば、僅に右の如き分量に於て、生活の急忙に慰籍を得るに過ぎず、何ぞ是れ娛樂を有するの尠きや、併し乍ら、如上の外に、或意味に於ける特種の娛樂機

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關あり、遊廓及遊技場是なり、法律は之を許して公開せるを以て見れば、亦一種の娛樂機關たるべし、余は本稿を終るに當りて、其の消息の一片を掲げて、讀者の參省に資せん。

座右の警視廳統計書を取りて之を見るに、一昨々三十五年に於ける東京府下遊廓の遊客數、二百三十四萬一千七百十六人にして、其の費消金額、實に三百〇九万二千九百圓に出づ、此の數字の中、八王寺、府中、調布等の數も加はれりも雖も、其の多くは新吉原。洲崎、品川等の費消高たるや、爭ふべからず、健全なる娛樂機關を有すると尠なき東京市民は、不健全なる娛樂に、右の如き多額の金圓を失ひつゝあり、滑稽の極といふべし、加之、東京市は、此の遊廓の外に、別に遊伎場なる者を有す、遊廓が、近年著しく衰頽せるに拘らず、他の意味に於ける遊廓の一種たる遊伎場が、著しく其の數を加へたるは、頗る珍異に屬す、今、二十八年より三十六年に至る八年間の遊伎場累年比較を擧ぐれば

年次	營業數	年次	營業數
二十八年	五〇〇	三十二年	四二〇
三十年	四三六	三十四年	四五六
三十一年	四四九	三十五年	五四七

の累年を示す、即ち二十八年頃には、營業者の數五百なりしに、年々減少して、三十三年には、四百十五に減じたりしに、三十四年に入りて俄に其の數を加へ、更に三十五年に至りて、著しく增加したるは何ぞ、若し順序を以てせば、寧ろ日清戰役後の景氣を受けたる二十九年乃至三十一年に於て、增加すべき筈にして、吉原等の如き遊廓は、正に其の現象を示したるに拘らず、獨り遊伎場は、遊廓と觀を異にし、當時寂寞を致して、而して三十五年に至りて、俄に五百四十七の增加を見たるは、甚だ不可思議に屬す、抑〻是れ、遊廓の衰頽を遊伎場に補へるものか。

余輩は、寄席及觀物場か、年々其數を加ふるを嘉すと雖も、此の不健全なる遊伎場に對しては、甚だ不快の念を有するのみならず、之を以て興國日本の首府たる東京市民の恥辱と爲す者なり、知らず、日露戰爭後の遊伎場の消長は如何なるべきや、余は、劇場其他の異日の消息に注意を置くと共に、此健全なる娛樂機關に對しても、同じく一種の注意を拂はんと欲す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

淺草公園（上）

裸にした淺草公園

二葉生

この公園は云ふまでもない東京随一である。ある方面に於ける趣味と繁昌する點に於ては。兎に角小見の掌中へねんねも出來る僅か一寸八分のお身體で、十八間四面の伽藍をふんまへ、衆生一切に慈悲を垂れたまふ觀世音の功力、幾百千の商業家が數百年來の惠みになれて、可惜靈場を果敢なき浮世の生命繋ぐ爲めに、さゝほうさに汚して居ることの歎はしい。

こゝが四時幾りなく晝夜繁昌するは、觀音樣の御利益より娯樂の材料を供給する仕掛が十分整つて居るからで、如何に黄金佛が妙智力を布きたまふとも、遊覽物、遊技場、飲食店を公園から驅除したら、乍ら寂々寥々再び狸囃子の音を聞くに至るのである。遠慮のない處を言へば觀音樣は招牌で、五區六區あたりにドンチャン囃し立てる興行物、紅白粉に細工した化粧のものや咽喉三寸の道樂が本尊となり、三百六十五日辨天山の鐘に明けて、夜の十二時をゴーンと撞くまでは憚りなく稼業をして、一人でも半分でも多くお客を引附けやうと有らゆる苦心をする結果である。

一面より觀察すると淺草公園は誠に面白いところである、又此上もない娯樂場所として遊歩するに佳いところである。が、之れを深く研究すると實に恐るべき魔窟である、至るところ惡魔の巣にして妖氣氛々と棚引いてゐる。東京市中に於て晝夜間斷なく、この土地ほど惡魔と惡魔が鐚を删り、餌を爭ふて呑噬を逞ふするところはない。一度魔窟に足を入れたら血は吸はれ肉は殺がれ、果ては罪惡の空氣に感染して遂に魔道に陷り、再び眞人間として社會に起つことの出來なくなるもの多く、商家の子弟雇人等は帳尻の瞞着しより一身の方向を誤り、詐欺をする、拐帶をする、書生側では詐欺と竊盗に落ち、職人側では竊盗となる動機は、この魔窟の空氣に感染するが原因となるのである。嗚呼淺草公園は東京市中第一の大魔窟である、清淨無垢でなければならぬ靈場も、惠みに馴れる惡魔どもに蹂躪されて亦怪しむものゝないまでに墮落した。

公園中惡魔の最も多く棲むところは、先づ第一に銘酒店、碁會所、揚弓店、空氣銃にして是等は蜜の如く甘く、さうして氷柱のごとく冷たき狀を、露骨に表示して居るもので、稍やそれよりは幾分の體裁を作り、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

羊頭をかけて狗肉を鬻ぐものは、藝妓、待合、料理店の女中、諸興行物の女太夫、壯士俳優、大弓店などである。殊に近時の淺草公園ほど甚だしいものはない。この地は殆んど治外法權とも云ふべき光景で、警察の取締も風俗掛の眼球も更に彼等の跋扈跳梁を防止することが出來ぬ、否、防止し得られぬばかりでなく、或る場合には奬勵しつゝある如き形跡すらある。二十世紀の社會に猶且つこんな不思議な現象があることを明らにし、以て裏面中の裏面までを幻燈に映し出して、是等に對する改善の方法を研究せんとするが我等の素志である。

魔窟の大立物

魔窟の大立物となつて居るは何であるか、銘酒屋と碁會所である。淺草公園に銘酒屋といふ營業が始めて開かれたは明治十四年の花の頃であつた。當時の公園は今の如く規模も廣くなく、現在の魔窟と人も認めるる六區の邊は未だ田圃であつて、五區のところだけが境内にて、此處にごた〳〵種々の興行物や揚弓店や投扇興や寫眞屋その外があつたのである。今も小名に殘る睚といふところ、則ち一直の前通りを北進した細い通りに、二間間口で甚だ見苦しい構へをして、確か「桔梗屋」といふ御神燈を吊し、十三四の双子木綿を着た少女と五十餘りの老婆とが店に居て、燒酎だの泡盛だのをコップ賣りにしてゐた。麥酒とか葡萄酒とか云ふやうな氣の利いたものは無論ない、當時この種類の洋酒は非常の高價であつて、到底こんな處でコップ賣の出來るものでも無かつたのである。而して此店は全く酒を賣るばかりで裏面に營業のある譯でない、で、流行もせず漸く店を繼續するまでゞあつた。

最も俗に葦簀張と稱した腰掛茶屋—そこに宿泊せずして他より通ひ來る休息茶屋—には鯣に雞卵また酒なども備へて客の求めに應じ、或ひは甘酒を置く位のことはあつたが、銘酒屋と名乘つて酒のみをコップ賣りする營業者は無かつたのである。睚に桔梗屋といふが開業してから、十六年には公園内で銘酒屋が四五軒も出來たけれど、まだ眞正な營業者でもあり、東京府の營業課目にもこの營業は無かつた。で、税金の徵收されるでもなく、開業を警察署へ屆け出で認可を受ける面倒もなかつた。從つて風俗掛など稱する角袖巡査の眼中にも這入なかつたのである。

銘酒店の勃興

然るに明治十七年一月より觀音堂の後にありし諸興

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行物は、取拂はれて皆六區に移轉せられた。此時よりして溝と稱する彼の傳法院裏より西へ折曲つて揚弓店が立並び、こゝを新開と云ひて古くより觀音裏にあつたものと競爭し、頻りに客を引き寄せる手段を講じ、一時非常の優勢を占めるに至つた。處で揚弓店を開業せんとするものも多く出來たれども、揚弓店を開業するに的前の太皷を買ふにも十圓餘かゝり、それに弓矢その他の器具または飾裝等に、少なくも五六十圓から百圓近く掛ねば店らしく飾ることが出來ない。銘酒屋は裝飾に費用もかゝらず、賣物の銘酒とて僅かあれば十分に足りる便利があるので、ポツ／＼と六區に此營業が開始される事になつたのである。斯うなると前者の營業振とは違ひ、揚弓店の矢取女の如く紅粉に粧ふた女が店に坐し、揚弓店へ流れこむ客を引止めんと、艶語百出媚を衒つて呼込んでゐた。けれども未だ今日の如き甚しき風俗壞亂的所業には及ばなかつた。此の營業の手輕にして開業の輕便なのに釣りこまれ、漸次六區に蔓延し十九年には大分多くなつたが、未だ今日の如く多くはなかつた。この營業の遽かに增加して公園の魔窟を代表するに至つたは、實に明治二十一、二年の頃からてある。てはあるが當時はまだ銘酒屋なるものは陰然たる勢力はあつたにしても、年來公園の名物となつて居た揚弓店の勢力に拮抗するだけの根底がなかつた、それが主客轉動して現今の如く大勢力を占めるやうになつたは、彼の廿七八年戰役に戰勝國の經濟が膨脹し、一時一般に金融の緩だのと凱戰した兵隊連がパッパと消費たのとて、宛然濡れ手で粟を掴むやうな風に收益があつた――營業の仕方に於ては正業ではないが――さア左樣なると我も彼れもと割の好き方につき、愈々風俗壞亂の甚しき營業が銘酒屋の本業と銘打れてしまつた。

家庭と黑幕人物

家庭といふも大袈裟て、素より家庭などゝ稱することは無論出來ないのである。けれども家庭には違ひない、營業主は重に女てあるが、黑幕には皆亭主がある。その亭主が多くは遊び人と稱する博徒、理も非も更に頓着なく二十世紀の人間と一言も交ゆることは難い文盲の徒て、只だ暴を以て普通人より爪彈きされ、彼等を一種特別のものとして、所謂觸らぬ神に祟りなしの諺を楯にとり、此方から避けて相手にならぬやうにするのだ。斯くさるゝを自己の權威を以て衆人を壓伏さするかの如くに思考し、彼の昔のお岡引とかい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふもの丶卑劣な根性玉をもつ、役目を笠に被て罪惡の幇助者たる悪刑事――警察や警視廳に奉職してゐるものには無い、素より有るべき筈ではないが偶には心得違ひな人物もあるやに噂される――其悪刑事どもと結托して、風俗を紊亂させつゝある營業を、女戸主雇女に强て爲さしめるのである。彼等憐れむべき女どもは最初から自己の營業を好みて爲すものは恐らくない――中には浮氣の結果から好きこのむで行るものもあるとした處で、それ等は皆金といふものに目が眩みて、自己の身體といふものを顧みない怠惰者の骨頂である――けれども自然の悪弊が肉體に染みては、既に最初厭つたことも厭はぬまでに墮落してしまふに至るのだ。

若しまた銘酒屋の亭主が遊び人でないと、必らず妓夫である。妓夫とは貸座敷の男の奉公人で、普通人の伍するを恥づる人間、然らざれば、掏兒の親分、而してそれ等の人物は大抵謀者であるとか、彼の種出しとか称して刑事――餘り眞面目ならぬ側の――それの手先たることを暗に仄かしてゐる。またそれで無ければ、實際この營業を安全に開いて居ることは出來ない。そんな邊に何等の縁故もないものが開業したならば、遊び人どもより稼業の弱點に切り込まれて、絶えず强請られ一日に二圓三圓の收入があつた處で到底も立ち行くものでないのである。

戸籍上は兎も角も夫婦の關係がある男女、その間の有様は何うであるか、實に驚く外はなく、妻たるものは既に稼ぎ人である。客の種類を選ばず懷中の暖かきものと見れば、不具者でも肺病患者でも其様ことにお構ひなく、自から之れを籠絡し、また雇女をして籠絡せしむる爲め、亭主を我家へ出入せしめざることもある。又自己の代理者として雇女に自己の亭主を慰籍せしむることもある。代理を爲さしむるもの、代理をするもの、代理をさるゝもの、三者とも皆これは尋常のことゝして更に意としないのである。是に至つて彼等社會の家庭がいかに神聖なるか、將た不神聖なるかを像想するに足るであらふ。是れ以上の事に至つては言んとしても言ひ能はぬ、讀者も亦た聞くことを好まざるであらふと思ふ。

家屋の構造と雇女

家屋の構造は普通のところは、店と奥に二間位あるが關の山である。店には申譯の爲めに銘酒の瓶が五六本は并んでゐる。また棚に麥酒や葡萄酒のが飾られて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるが、之れは多く飾瓶と稱して空瓶で只だペーパが新しく貼られてあるだけで、十本につき一ヶ月の損料が十錢内外である。而して店の三疊敷一間ぐらゐな處で營業してゐるもあるが、是等は何れも特約の待合とかまたは座敷借りとかゞある。然もないと不思議な仕懸になつて唐紙をあけるを意外な處に奥座敷があつり、お隣りと思つた處に隱れの離室があつたり、實に奇々怪々な構造などもあるが、併し是等の多くは待合に屬して居るから、其部類に於いて詳説することにしやう。さて底で雇女であるが、近來甚だ拂底で營業者は女の買出しに困難してゐる、それには種々の原因もあるけれど、女子の職業が殖ゑ、兎も角も糊口するだけの工賃を正當に稼ぎ得られ、素人より墮落するものが減じたので、美しき招婢になるものは引張り凧になつて、立派な待合またはそれ者の抱へとなるからであるのだ。而して給料も今の處では折半――稼高の半分は雇主が取り半分は本人の所有――七三――雇主七分本人三分――などであつて、普通二圓也三圓の給料に甘んじる女はなく、殆んと藝妓を抱へ娼妓を仕入れると同じやうな有樣となつて居る。

雇女の素性は何れも立派なもの丶ある筈もなく、大方は其血族中に類似の營業をするものがあるとか、友達より誘惑されて墮落するとか、又は自己の淫奔よりして情夫と逃亡したる結果とかである。然らざれば田舍よりポット出て惡桂庵に欺むかれて魔道へ陷るものである。處で一旦この社會に墮落すると再び眞人間となつて正道を歩むことは出來ない、多くの中には其憐むべき境涯より救ひ出さる丶ものも無きにあらねど、到底辛抱の出來ざるより再び自墮落な營業に落ち、忌しき擧動の爲めに風波は起るが彼等の平生である。而して其色は褪せ、身體の自由は缺き、惡しき病を脊負こみて終りを全ふするものは殆んどない。可憐の婦女子を誤らしめるは是等類似の營業ほど甚しいものはなく、啻に婦女子の一身を誤らしめるのみでなく、下層界に於ける男子を墮落させるも亦この營業が媒介者である、竊盜、掏兒、詐欺取財等のバチルスは實にこの營業者が製造しつ丶あるのだ。

營業の仕方

彼等の目的は只だ金錢を得さへすれば、他に何等の望みもないのである。だから遊客に對しても、其金を得るまではチヤホヤと媚を賣れど、意の如く捲き揚げてしまへば、一昨日お出でと横を向ひて相手にせぬ

が、日常營業の遣り方である。其捲き揚げる場所も自家に於いてするもあり、待合に伴ふもあり、旅宿へ連れこむもあり、怪しき小料理店へ行くもあり、又は素人家――彼等の所謂素人家で、彼等の商業をさせる爲めに二階或ひは一室を供給してお茶代と稱し、五十錢以上一圓以下を摑むでゐる家が附近にいくらもある、それは何れも小商家で多く荒物屋煙草商店または賃仕事洗濯洗張などの看板をあげる家だ――があつて客を咬へこませてゐる。

其手段としては實に驚くばかりて、それにても猶意の如く客の懷中を搾る能はざる際には、彼の黑幕なる人物と諜し合せ、主婦は客を何れへなりとも誘ひ行くそこへ例の黑幕の人物が

「オイ、お春手前は何んしてゐあがるンだ。フヽン、この野郎と巫山戲てあがッたな――お前さんこの女は私の嚊ですぜ、――默ッてゐちやア分らねえ。野郎が言なきやア手前に言せる。ヤイ姦通しあがッたな、――ナニ嘘つきあがれ、さア二人とも警察へ引ッ張り出して遣らア。」

などゝドッカリ大胡坐かき込まれるのだ。大抵のものは是れに辟易して、自己の身分を顧み十五圓二十圓ならば投り出して逃げ出すのである。それよりも一層甚だしきは、お店者、即ち商家の番頭などが引かゝると、其懸取返りを引寄せるが彼等の手腕と云ひ、散々搾りとれるだけ絞めあげた揚句、盆とか暮とかの大勘定に今度こそはお拂ひ箱と認めがつくと、人を派して懸取に出た道で要擊し拐帶を勸告するのだ。

「お前さんもモウ尻が割れさうだから、足元の明るいうちに、懸金の集るだけ集めて妾の家へお出なさいよ、ナニお前さん一人ぐらゐ一年や二年立過すことは雜作はないさ。お前さんをそんなにしたも妾の罪だてすから……」

斯くの如き甘言を以て誑かし、それに應ずれば三四日は自己の家にても泊らせるが、金を捲揚げると直ぐ追ひ出すのてある。また應ぜざるものは無理遣りに引張り歸り、酒を強いて酩酊させおき機會を圖りて、例の黑幕人物が姦通見附たて跳りこみ、男のみを表へ突出して財嚢を奪ふ手段もある。斯樣ときの事はいかに警察の力を借りても不思議に彼等の爲めに言まくられて了ふ、この間の消息は不言不話の中に存じ語らんとするも語る能はざるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲美人の一失電車の中　神田　光風生

美人といふものは何につけても得がある、乞食になつても美人は損がない、お斷りと云ふ家でも、門に立つたる、所謂露になやめる海棠の風情を見ては、可愛さうれえ、素から乞食でもなかつたらう、とつい白銅の一ツもセシメられる、處が此に一失あり、電車の中で若いものは年寄子供や普通の女ならお掛けなさいとて起つてやるが、それが美人だと他の人に對して可笑しく思はれ、誰も掛けさせたくても得云はぬ、そこで美人電車に乘るべからず、お歩ひが好い

▲電車の屁　淀橋　吐芳

田舍者『これやハア電車ちうもんが出來て、なんと町が奇麗になりやした、糞一ツも無えだ

小僧『馬鹿ア云つてらア、電車が糞をして堪まるもんか、田舍者は仕方がねえなア……

田舍者『やれ〳〵、これはしたり、電車は糞を仕ぬえので、へー成程、あの上の方てパッパと火の出るのは、あれや電車の屁でがすか

▲飾り氣と油氣　番町　蚊史

近松曰く、どうした事の縁ぢやら、半二曰く、どうした結ぶの神さんが結ばしやんした縁ぢやら、諸君何れを取る？　時代の古いだけ前のは簡古で新しいだけ後のは長々と飾り氣がある、今の歌は何うしても長飾り氣がある、併し反對なのは古の女の髮は油氣があつて、今の女學生には油氣がない、只得用なのは、それが日傘の代用をする、と西鶴じみた解つたやうで解らぬ事をいふものがある

▲年賀狀　無名氏

日本では謹賀新年と書くが何故新年を賀するのか意味が明らかでない西洋では君の幸福なる新年を希ふと書くがこの方が理窟があると或るハイカラ先生が云ふてゐた

▲男らしき商法　岡山　理學士

人間の總ての事業は畢竟するに財寶を得んが爲めてある、語を換て云へば金をためる事である商人等の利益を得るのは原價以上の高價を以て原價以下らしいお世辭を云ふ、最も卑屈なやりかたである、其處へ行くと高利貸なるものは最も男らしい商法である

▲利己主義本能　本郷　櫻花生

道德がどうの人情がどうのと云ふがつまり自己を本としての議論だ、して見ると世人が利己主義だと罵る人程最もよく人間の性質本能を發展したものだ

▲西洋時間　赤阪　高等官

或る宴會の招待狀に來る何日午后六時として其下に但しとして西洋時間とあつた、近頃此語が流行すると見えるが、その解釋に苦んだ、先づ西洋と東洋とは經度の差で時間の差が出來る、時によると夜と晝との差になるから、これは午前の六時といふ事かとも思つたが、それにしても不

明瞭だ、英國ならグリニッチとか何とか正確な西洋の處を示して貰ひたい、それにしても我々には中々勘定が六ヶ敷いと獨りでひねくつて見た

▲赤色の表象　　青山　今樗牛

女の襷はなぜ赤いかと或る人に聞いたら電車でも汽車でも危險物があると云ふ知らせには赤い旗を出す通り女も茲に危險物があると云ふ知せだ、どんな危險かと云つたら若い男は身を破るし若い女はきずものになる、だから女でも赤い襷は若い女ばかりだと云つた

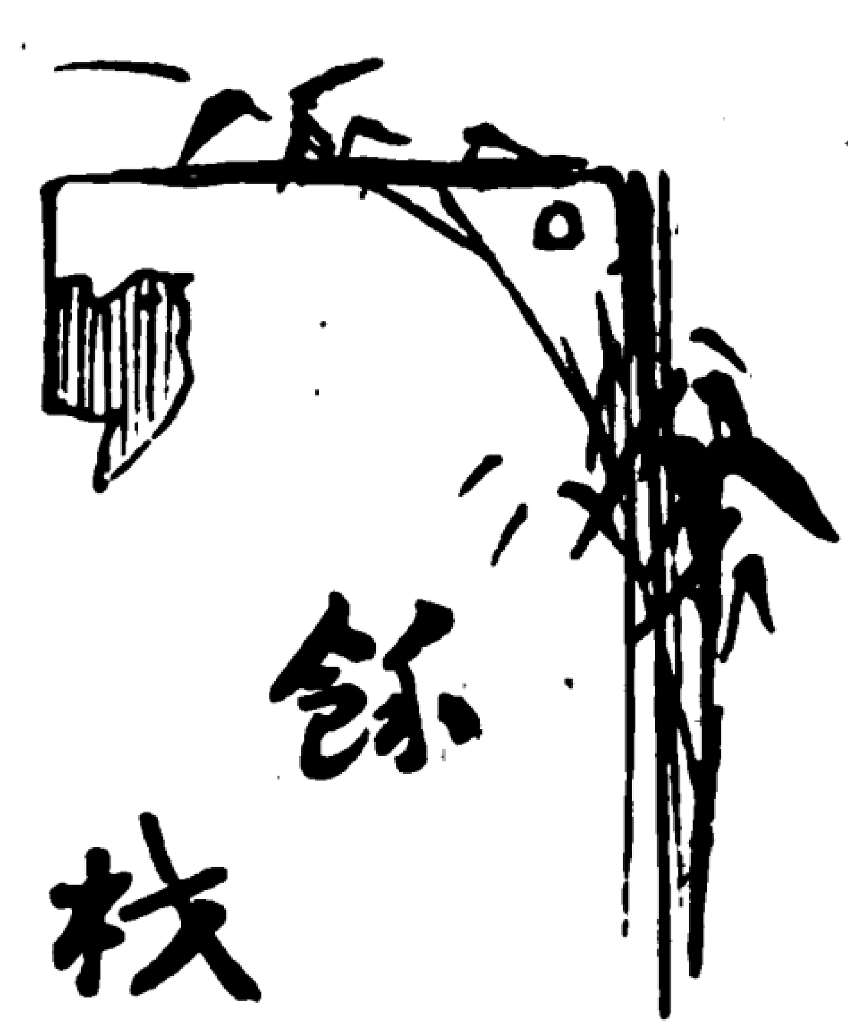
▲投降と投稿　　仙臺　山明

ステセルが投降してから、投降といふ語がイヤに響いて聞えるもんですから、私は雜誌へ投稿すると何んだか降參でもするやうです、投稿の名を代へて出陣とか進行とかして貰ひたいと思ふ、それとも田舍の蚊士が下らぬものは御不用なら已は何とも申しませぬ

▲血で印刷した　　日比谷　菜史

予は物の將に終らんとするとき稍悲しげなるなるものなしと思ふ、平民新聞の最後何ぞ夫れ哀しげなるや、その終刊の全紙を赤刷にして是れ血を以て染めたるなりとは、人をして戰慄せしむるものあり





夜の商賣、　　飛燕客

夜とは何ぞや、云ふまでもなく日が暮れてからの世界である、これをいやにひねくれて、光明の世界が去つて茲に新らたに來れる、暗黑の世界であるなどゝ云ふと、この夜なるものは、恰も百鬼夜行の朱羅場のやうに思はれるが、然らばかう云つて了つてはお月樣に可愛さうである、尤も、嫌はしき惡業や惡むべき犯罪が、多くはこの間に胚胎する事は爭ふべからざる事實であるが、又其中には白晝では到底接する事の出來ない程趣味を持つものも決してないではない、強ちに文學的の頭腦を以て三五の月がどうの、星月夜がどうのと云はずとも、否月だの星だのと、そんな陳腐な題にばかり隨喜してゐずと、も少し俗でも卑近でもよいから、

[illegible]ある、例て見ると辻占賣、こいつが又赤い提灯の大きなやつをぶらりと下げて、手拭を一寸から吉原冠りと云ふやつにして、色街から山の手までも練り歩るく、而かもこの商賣たるや、抑もが喉を自慢の渡世であるから、透き通るやうな美音を一と調子張り上げて「あぶり出し戀の辻—占、花のたより辻—占」とやるのを聞くと、強ちにその聞いてゐる場處が中二階の四疊半とばかりは限らず、將た又妾宅の床柱にもたれてのみとは限らず、下宿屋の二階でなりと御長家の格子窓でなりと、或は一歩進んでは町家の雪隱の中でなりとも、其時々其處々、樣々の思ひに照えて云ひしらぬ感にうたるゝ事も稀でない、正にこれ斷腸消魂の曲……と云ふのも少々何んですけれど、流しの新内の音色に和して、三百文の按摩の笛に通ひて、鍋燒うどんの聲に混じりて、終には犬の遠吠とも一處になりて、と思ふと夜さも中々趣味があるよ。

これから思ひ出して發心したわけではないが東京のからッ風と銘付きの此寒い風に吹かれながら、而かも滿天霜を置く冬の夜中に、大道の傍に店を張つて、或は町から町へと練り廻して、其日〳〵の活計を立てる[illegible]ない部分だけを一寸筆の先きへのせて見やうと、頼まれもせぬに御苦勞な事なり

おでん屋

東京市十六區の中に於て、不夜城の街は更なり、ずつと片町の町はづれ淋しい處に至るまで、恐らくおでん屋のない區はあるまい、大通りから横町へ這入らうとする處、或はぶつ違ひの四辻に於て、意氣な屋臺店に補子行燈、何故か牛肉屋とおでん屋とは其行燈を赤文字にする、其外電車の旗の止れと云ふ知せ、交番の角燈と共同便所の燈とは同じく赤いが、何か其光刷に緣因があるのかどうか、未だ其處までの研究には至らない

其昔未だ尻までの短かい羽織、慈姑のとつてのやうな所謂ちよん髷なるものを頭の頂邊へのつけてゐた時分、夜鷹蕎麥といふものが頗る跋扈したが、新陳代謝の理であるか榮枯盛衰の法であるか知らないが、今は全く其跡を斷ちて僅少數の鍋燒うどんとなつて了つて蕎麥の勢力は全くこのおでんに奪れたと云つてもよい位である、實に一區の中多い所になると三四十臺もあつて、少數な處でも七八を下らない、特に色街の如き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に至りて、は五臺六臺ずらりずんとぞおし並んで、而かも何れも相應の客を持つと云ふに至つては盖し少しくたまげざるを得ない程である、其外神田日本橋京橋邊は云ふも更なり、牛込赤坂四谷の方まで皆それ相應にやつてゐる、從て其收入も亦こんな商賣の中では奈何しても關取である、先づ普通の處で一晩の收入はと云ふと大抵二三圓はある、目貫の場所と云ふ處では實に一夜に六圓内外の商賣があるさうだ、而かも其純益は三割以上に當るのであるから、この位骨の折れないうまい商賣はない、たゞし買出しをすると云つた處で朝の間に八町堀か大根河岸あたりで調て置いて、おてんとう様が引込みさうになつてからのこ〳〵と屋臺を引張つて出掛ければよいのである、尤も商賣が冬向きのものだから寒いには違ひはないが、たどんをいけて睪丸火鉢をしてゐれば鍋の下の火勢とて何の苦もありはしない、其買出しの品物と云つた處で、蒟蒻に八ッ頭を第一として、がんもどき、竹輪、蒲鉾、燒豆腐、篠田卷、スヂなどで、場所と時とて多少の新工風も必要だが、あたりめか玉子でも置けばよいので、燗酒だつて手のかゝる事ではなし、唯煮込みの汁の作りかたあるもの、一般には醬油四合の中へ砂糖を茶呑茶椀で三四杯も入れる分のこと、其の中へ松魚節のだしでも入れゝばそれでよいのである、尤もだしはたんと這入る程うまいに相違ないが、仲間の中には松魚節では割に合はんなんて鳥の足をたゝきこんでだしの代用をさせるなどもある位、まことに之れ天下太平な商賣である

と斯う一と口に云つて了ふと氣の早い人たちは、成程そいつアうめいや、おれも一番やらかさう、早速今夜から取り掛かるなどゝ云ふ人も出來るか知らんが、まア待ち玉へ、靜に聞き玉へ、

これで一年が三百六十五日降りッこなしと定つてゐるものだとよいが然う云うまい都合にばかり行くものではない、月に十日の雨日と云ふのは昔からの計算のしかたである、朝うんと買入れた、夜になつたら降り出した、買入れたものは腐るわ……となると、この一日の買入れ丸損である、其外朝雨らしいので買出しを見合せたら夕方からからりと上つたなんて意地の惡るい天氣もある、さうかと思ふと借し倒れなどゝ云ふ厄難も持ち上ると云つたわけて、實際やつて見ると疊

つまり普通の商賣よりか身分が割のよい位の處だ、惜しさへしなければ倒されはしないとは云ふもの丶通り一遍のお客に誰れだつて貸すものか、それが段々と古顔になると「今日はあいにく持合せがない」と云はれると勢ひどうもお序でよろしう御座いますと云はざるを得ざる場合になるだらうぢやないか

尤も所謂目貫の場所となると、一人や二人の貸倒れ位は敢て屁とも思はないのであるが、又さう云ふ場所、例ば廓内のやうな所となると、組合の規約で加入金と云ふものを取られる、それが五六十圓から百四五十圓と云ふ大金であるから、容易では手を出しかねる、が又これが一個有力の株となるのである、

夫からまだ其上にお金のかゝることがある、即ちそれは命の親玉商賣の大黒柱、屋臺其物である、これを新調するとなると三十圓内外を要する、上等のものでは七十圓位もかゝるさうだ、その上それ相應の器物をちやんと備へるとなると中々以てお手輕でない、が幸なことにはこんな大金を下さずして開業が出來るやうなお手輕の工風が出來てゐる、即ち親方と云ふものから屋臺店一式を借用に及ぶのだ、この親方なるものは府下に五六人あつて屋臺を幾多持つてゐて之れを貸しては自分の生活を立てゝゐる、取りも直さず屋臺賃貸營業さ、

この親方から借り出すと、極く古いものなら月に借用賃凡そ九十錢位、中古で壹圓二三十錢、新らしいもので一圓八九十錢位である、尤もこれを借りるには保證人と云ふものがなくてはならぬ、これはさうありさうな事だ、學校でさへその生徒に保證人が要る世の中だもの、

而して、斯うして開業すると資本金は十二三圓もあれば先づ一寸おでん屋でございと稱して四辻へ出かけられる、それでどうにか活しも立つて行かうと云ふものである、扨てこのおでんやに入りこむお客樣はと云ふと、勿論千差萬別であるが、一寸の考では多くはこれ絆天のお哥兄さんか然らずんば二本棒をたらした小僧であると思ふだらうが、安ぞ知らん……ちと御大相だが……堂々天下の書生殿や二重廻に中折や、更に進んでは鼻下八字の美髯を貯へてゐるものも決して稀でない、つまる處、竹輪かがんもどき位のお手輕なお肴で燗酒をぎゆつと煽つて、それで所謂ほろ醉いの上機嫌となれるとすると財政上にも影響を及ぼすことが少ないと云ふことからの懐勘算に出るのである、其

外辻待の車夫であるとか遊人であるとかお店のものであるとか云ふものは固より此處の定得意の御客樣である、處によると博奕からの歸り、北へかけては素見の連中、これ等も亦逸すべからざるお客樣たちで、博奕に勝つた勢かなんかで飛び込んだ連中は、ぬれ手で粟のあぶく錢で小氣味のよい程つかつてくれる、素見の連中はおでんやには案外小たんと金を使うものである、其外お二人づれのにく〳〵ないの、畜生！と一寸やきたいやうなのも折々は見えるがこれは大抵夫婦ものでない、と云つて公達姫御の道行では勿論ない、なんて廻りくどく云ふと餘程わかり惡るさうだけれど、誰れにでもすぐわかる代物(しろもの)である、此外に面白いのはお店の番頭お手代共が料理屋の二階で一獻と云ふ程の時間もない實は一寸主人の使の歸りだなどゝ云ふのが、餓虎の勢でがぶ〳〵とやつてゆく、さうかと思ふと裏店の女房が丼鉢を持つて「がんもにしのだにお芋を憚りさま」なんて買ひに來る、これなんか宿六が夕飯のお菜か或は朋輩と一杯の肴に供せらるゝのである

總じてこの商賣は冬の夜の八九時頃から十二時頃までが最も繁昌する時刻で、所謂これが潮時である、そして更ければ更けてくる程、面白いお客が舞ひ込んでくる、あぶれた車夫の、愚痴も聞かされるし若い衆のお惚氣も拜聽させられる、と時には「變つた者が來たか」なんて探偵の旦那から御詰問も被る、これから午前三時頃までは草木も眠るといふ時刻であるのに流石は東京の夜だけあつて、ちらりほらりとお客がある

おでん屋の主人は若い女である程收入の多いのは申上るまでもないが横濱にはあるさうだが東京にはない、と云ふのは風俗をどうとかする恐れがあるとかちふので御法度になつてゐるからだと云ふことだ、然し吉原の中には隨分あるが、此處ばかりは除外例かも知れない、

かくして廓では一時半頃、市中では三時頃廓の後では三四時頃、この屋臺を引張つて蝸牛のやうな風態で、蝸牛のやうな歩みの速度で猶こぼれてゐるお客を拾ひ〳〵、婦や待つらんと歸つてゆく。

四十八癖（上）

茶人

り

（一）　頭をかく癖

これは中學生によくある癖なり、教師の問にぐつと行きつまつて赤い顔をして首を縮めて、下を向いて一寸かく、其外ぶまな時、間の悪い時小言を聞く時などにはよく出る癖なり、芝居などでは白痴の要の處でちよちよッとかくなどをかしき物なり

（二）　炭を弄ふ癖

火鉢にもたれてつくねんとして、炭を起したり倒したりしてゐる、其癖の依つて以て來た原因は手持無沙汰のすさびであらう、或る人火鉢に對した處折悪しく火箸がない、始の内は唯もじもじとしてゐたが終にはたまりかねて、指でつまんで暑ッゝゝ

（三）　疊のけばをむしる癖

話家が能くやります

「君は奈何も疊のけばばかりむしつて困る疊がたまらないよ、今日は君未だ裏返したばかりだよ」

「道理でむしりにくいと思つた」

（四）　貧乏ゆすりをする癖

ふけだらけの頭で破机により、二子の垢じみた着物に三尺のぐるぐる巻き

「あなたおよし遊ばせよ貧乏ゆすりなんか、第一みつともないぢやありませんか」

「フン己の貧乏ゆすりもみつともないが、お前のおひきずりもみつともよかないぜ、

（五）　唇をかむ癖

口を[illegible]も、多くはこれに[illegible]

は損氣なり損氣は些少し……

（六）　横目で見る癖

人品骨柄ぐにやりとしてしだらなく、癖あつててれかゝる、多くは低度の眼鏡をかく、ぶらりぶらりと練り廻して四方八方に眼をくばり一寸お眼にとまるのに出逢ふと失れ御覧うじろ眼鏡越しに……ねえ

（七）　筆を噛む癖

一字書いては物案じ一句書いては物思ふ、筆の軸に齒の跡がつくのが始まりて、終ひにはびつしよりと噛み割つて了ふ、婦君にはありさうな癖だが、我武者男にも無いではない

（八）　盗み見する癖

思ふに幾分の盗棒根性なり、人の見ぬ間をねらうと云ふが聊も悪いことなり、嫉妬深い細君によくある癖なり

（九）　影口をきく癖

悪口するは女々し、駄法螺を吹くな影辨慶と云ふ、面と向つては腰拔武者なるべし、されど表平山の語あるを聞かず

（十）　頤を撫る癖

殆んど無意味な癖だ、頤を撫たからつて夫が何になる、なんて矢張頤を撫てゐる、得意を表す癖だ、

（十一）　罵詈する癖

貴様は人の悪口ばかり云つてゐる、貴様なんかは未だ人を云々する權利はないぞ、第一やゝともすると馬鹿ごなしにする、よくない癖だ、以後人の事を馬鹿だなんて云ふな、馬鹿野郎め！

（十二）　もじもじする癖

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

常に桃尻になつてゐる、敢てお尻の出來のわろきにあられど坐りの惡い態度なり、そのくせ案外長尻なり

（十三）　舌を出す僻

妾、藝者、娼婦に多き僻なり三寸の舌先で目的をちよろり丸めて泣て見せたり笑つて見せたり、とう〱帶をねだり出してべろりと赤い舌を出す、何の呪か我之れを知らず

（十四）　鼻糞を丸める僻

きたなき僻もあるものかな、其丸藥何になるぞ、鬼神お松曰く「あれには懲りました」

（十五）　人をにらむ僻

白眼すると云ふ、正にこれ人を惡むの相なり、易に曰く……知らない

（十六）　笑ふ僻

笑ふ門には福來ると云へど、あんまり當にはならず、女の多く笑ふは無學の證なり、らちもなくほく〱するものを貧乏蛭子と稱す、

（十七）　景氣をつけたがる僻

べら捧め、吝なことを云ふなえ、金は天下の廻りものだあ、何に？手前は持つまいと？當り前よ、己あ貧様のやうに吝にやしれえや

（十八）　眉を動かす僻

芝居から歸るとこの僻にかゝる人多し、何んと、もー金がれえと、はて心得ぬ……とびくり

（十九）　坐眠をする僻

舟をこぐと云へども船頭のことにはあらず、お辭儀すると云つても小笠原流でもなし、おさんどん厭々この僻を以つてランプを翳す、

（二十）　首を傾ける僻

「君はなにをそんなに考へてゐるのだ「僕は奈何したらこの僻が直るかしらんと思つてさ

（二十一）　髮の毛をひねる僻

髯がないからなるべし、而かもエヘンと云つてひねつても髮の毛では引立がなし

（二十二）　口を尖らす僻

遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて眼ッかちにもなれ、我こそはこれ天（あめ）のひよつとこの後孫、女房は正におかめ殿

（二十三）　泣く僻

一日逢はればくよ〱と泣てばつかりゐたわいなア……とは又よく泣く女なる哉

（二十四）　寐言を云ふ僻

愚にもつかぬ事は申せど、敢て大事は漏し申さず、なんて云ふうち又例の寢言で細君獨りくすり〱

（二十五）　小言を云ふ僻

見る物聞く物癇癖にさわると見えたり「何故お前はそうぶら〱して居なさる、小僧は又荷車をそんな處へ置く、畜生猫が喧嘩をする!!」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

避　目

絹　糸

西土の事物を西土の事物と誤解することは善くな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。文學も藝術も何もかも其淵源を温ぬれば、皆悉く東洋のもので有つたのである。西土の諸種には現に東洋の俤を存在せるを認めるではないか。彼の西洋建築の圓滑なる部分を目撃する毎に、何となく東洋の夫れを想ひ起す。

之に引續きて連想するは、西洋神話學に關する宗教畫の佛教思想に酷似せるものあるを大に疑ふ。基督の聖像は釋迦の尊像に酷肖してゐることか時々ある、其歴史に於ても燒直しのやうな逸事が多い、印度古代の石像に釋尊が商人の爲めに説法し或は病人に靈水を施す等その思想が後世耶蘇の神畫に見ることがある。顔容の圓滿なる、袈裟の如きものを纒へる、時には珠數の飾れるあり。古代の風俗ばかりで何の理由も他に無くして、能くも斯く合一する筈はない。畫き方は違ふが頭上に後光のあるは全然佛教思想であらう。八萬四千的の光明を基督畫像に見出すことさへある。佛典と聖書との何れが先達して斯界に産んだのであるか。兩手を合掌して恭敬禮拜稽首の樣を畫けるは愈々以て怪しむ可してある。序でに云て置く、十六羅漢や五百羅漢を畫くに、おてこの頭や變てこな顔やひよつくり眼球などの不具者を陳列するのは、各自の性質を映現せるつもりで有らうが、羅漢の色想身想は決して其のやうなものでない。支那よりの輸入其儘だから困る。畫者は豫め佛經讀誦の必要があらう。

佛教と基督教との現狀に一種奇妙なる感想を起したといふのは、教會堂に出入する者の青年に多いとは、迷ひ易き者は迷ひ易き道に迷ふことを證明して居るのであらう。幾年月を肉い皮いて積つた業の罪の重荷に勞れ果てたる老の背の身は、お寺に參詣してこそ初めて安心が出來るので有らう。其れも習慣だと看破してしまへば夫れつきりの事。

後光の圓周と十字架とを調合して見れば西郷南州翁の紋所が出來る筈だ。今後こんな宗教が發明せらるゝかも知れない。脫俗か埋沒か知らぬが　我神道は御幣をかつぎながら別に掃ひ給へ清め給へ　お遣らかさず上つたりの體。却つて稻荷の狐や、天理教會の狸や猫が萬物の靈長たる人生魂魄以上に崇められてゐるといふやうな滑稽。歴々な人が九段坂の上を素通りにしても、羽田の穴守へ行つては一心籠めての願をかけてゐる。行基の本地垂跡説からして、御幣と拂子とが脇同合併して同一視せられて居つたことも久しかつたつけ。神佛のお守札販賣は止して貰ひませう。唯參詣者の紀念

物ならまだしも、何だかインダルゼンスを思出しますぞへ。斯かる同類を撲滅する迄に妖怪博士しつかり遣つて下さい。迷信解が拜い心地致します。余には自然といふ守護がある。斯くて何の信ずるある無く、何の恐るゝ物は無い。

遇々極樂淨土論を繙いた所、一寸眞實に思はれる。其が即ち信の如き迷で有らう。一般の學説は昨是今非にして徹頭徹尾有耶無耶である。紙屑籠を覗くと同樣。人を迷はすは學説だ。其の取止めのない寢言。同じ一の人間の手で同じ一つの糸車から、聖書の苧を紡むやら科學の糸を續ぐやら、聖書は聖書で科學は科學の勝手加減さ。ワン／＼やニャン／＼が、嘸かしお腹を跳らして居ることであらう。彼等は乾度靈魂が少くとも二個を持つてゐるに相違ない。今に太陽や月が三つ四つも出來やうになるだらう。聞かずや聲を鳥は吾等を嘲る馬鹿ア／＼、鳩はひやかす阿房ポツ／＼ポ。それさへも默たる天の聲では無いか。自然の教訓は自を離れて他の全てに滿ち充ちて居る。この身一つも亦自然に現世において然か配遇せしものである。

噫々、混沌は益々混沌を極めるのであらうか。默がいつ默に復活するであらう。

新刊批評

▲心のあと出廬　　幸田露伴氏　春陽堂發行

心のあと出廬、これ曾て宙外氏が國詩に接すと叫びたるものにして、近時かの新曲浦島と相並んで、文壇の大傑作と稱せらるゝもの也

一部四篇、第一篇に於て世の悦ぶに足らぬと云ひ、第二篇に詩の愛すべきを、第三篇に空想に遊ぶも亦竟に實在の累する處となるを免れざるを、第四篇に詩と世と共に悦び愛すべく空想と實在と相即き相容るべきを詠じたり、而して此詩の主眼は第四篇にあり

某氏曰く、昔より空想と實在、詩と世とをいふもの多くは夢か現か現が夢か的の曖昧なるものに終りて要領を得ず、到底現代の讀者を滿足せしむるに足らずと、然るに吾人は這般の弱點を免れたる出廬を得たり、由來日本の文學は理論的にものする場合に於て甚だ妙ならず、多くは趣味なきものとなり易し、而も露伴氏の筆に至りては然らず、實を描かんとして先つ花を歌ひ、理に落らんとして彼をうたひ是を詠じ、人をして先づ何事の來らんかを知らしめず、終に二三の警句妙語を以つて之を結び初めて經來りし道の必ずこゝに至るべきを悟らしむ、其妙味言ふべからず、格に拘らず調に頓着なく、俗語をさへ交へたれば、中には誦じ易からぬ處あれど、而も或ものは雄大に或ものは輕妙に、或ものは隱微に、而して甚深微妙の想そのうちに籠れり

世を花やかに　おもしろう
たのしげに行く出車の牛
ちやんちき／＼の鳴物に

曝さるゝ[illegible]
夏の一日荷は重く
夕陽に迫る歩重し！
一門光り輝きて
世に曝さるゝ物持の
見る目まばゆく燃ゆるも
山車の牛ぞや山車の牛
何か異る山車の牛

その詞の輕妙にして寓意の深く人の肺腑に入るものあるを味ふべし、

夏に

現世の名の何に假す
あびむしの殻！蛇のぬけがら！
隠氏は淡く　蛾眉を描へど
悪女しきりに　白粉を魅ひ
賢者多くは名を厭へども
痴物大抵　書をば釣る！

に至りては、既に人間の聲にあらず、

殊にその詩想の豐富なる、引證の該博にして適切なる、殆んど無盡蔵也、説き來り説き去り、詠ひ／＼て些の難澁なき、大河の水の流れ／＼て盡きせざるにも譬へつべし、

汚れしものゝ絶えて無き
靈山の牛　芳しき
草のみ食みて日を送る
その乳汁何ぞ　濃く甘き！
天の漿と味佳くて
白壁[illegible]

村女その年十一二
花は蕾の猶かたく
春まだ知らず心清し
我が父母の命により
朝々しぼる牛の乳
淨水洗ひ洗ひたる
淨瓶これを盛りたゝへ
日に／＼山の嶮道を
みづから運びもたらして
道に心を澄まし居て
世をば思はぬ婆羅門の
住める岩窟の前に置く

婆羅門　ある日　わが道の
おもひに深く耽り居て
供養の乳を打忘れ
飲まずて時を過しゝが
夕風立ちて草靡き
金星　幽に光る頃
飲まんとすれば牛乳饐えぬ

其調の流麗なる、其物語の面白き、讀者は先づこれに醉うて次に露伴氏が何を云はんとするやを知らざるべし、先づ試に心に想像して次のくだ

りを讃め

雪山の牛、牛清し
信士の女、女貞し
淨瓶 淨く汚無く
罎に何の塵も無し
されども牛乳はすえはてぬ
されども牛乳はすえはてぬ
牛乳の中には水の在りたり
もとより牛乳に水ゝありたり
牛乳に水あり、牛乳腐る
欲に淫恣あり、欲いやし

吾人は今之を批評するを得ず、他日を期さん、今は只その如何なるものなるかを紹介するに止め置くべし、四六形厚表紙、頗る美本、定價八十錢

▲文藝俱樂部

博文館發行

第十一卷第一號收むる處眉山の續小袖、柳浪の座敷牢、篁村の果報者の三篇、外に懸賞小說三篇あり、其中柳浪の座敷牢は最も見るべし、筆の輕きこと會話の妙なること此人の特長なり、新年の文藝俱樂部は柳浪の作を卷頭に掲げて重きとなすと、篁村の果報者亦滑稽にて面白し、其他作家の苦心談雜錄等見るべきもの多し

▲信仰生活

百目木智連氏
文明堂發行

五十年の私等の一生は 信仰の生活より外に吾等の選ぶべき道筋はな

吾等悩める吾等は之によりて救濟せられ、光りを受けて始めて新しき生命は附與せらるゝのである、すでに佛陀矜哀の慈雨に浴する吾等は、最早未來の存在を疑ふ限りでない、靈魂の滅不を問ふ限りでない、吾等はすでに信の一念に於て吾等の心に大安住の柱は打ち建てられたのである、」これ著者が信仰生活の要領と見るべし、菊版二ッ切二百頁の小冊子、信仰生活を論じて遺憾なし (定價二十錢)

▲佐久間貞一小傳

豐原又男氏著
秀英舍庭契會

數年前より吾人の耳にしたる佐久間貞一氏の傳は、今度「資本と勞働の調和の著者豐原又男氏の手に依りて世に出でたり、夫れ佐久間氏は工業界に有りて最も明敏にして活動に富めりし人にして兼て勞働問題に熱心なるを以て名ありき、本書は氏が艱苦の中より身を起こして遂に「洵に實業に勵精し衆民の模範たるべき者とす」との綠授褒賞得て世を終りし一代の經歷を叙せる者にして文辭平明、到る處raw氣に打たるゝ者あり、蓋し同氏の親友島田三郎氏は親しく校閲せるものと言ふと雖も、亦た豐原氏が滿腔の誠意を注ぎて第一の賢師にして第二の慈父たる恩人を記せるに依らざるなきを得んや、青年者は一種の立志傳として讀むべく、勞働問題研究者は、本書に依りて實際家の勞働問題を窺ふを得べし、唯、非賣品として、其の配布の佐久間氏の知人に止りしは、余の遺憾とする所なり。

▲戀ごろ裳

本鄕書院發行

明星派の女詩人、與謝野晶子、山川登美子、增田まさ子の短歌各〻百數十首及び晶子の新体詩六篇を集めたる詩集なり、新体詩の「君死に給

等の價値なく他の五篇の新體詩も見るに足るものなし。此集の見るべきは短歌にあり。而かもまさ子の短歌は甚だ拙劣にして到底晶子登美子に比すること能はず。晶子の短歌漸く晦澁の弊を脱して詩想の明確を加へ登美子の吟亦詩才の凡ならざることを示したり。本誌文藝時觀に於て緒方流水氏の細評あるを以て、こゝにはたゞ予の趣味に適する五六の歌を擧げて此集を紹介するに止めん。

羽子よ毬よみな母君にかくされて眉上あとの針目さびしき。さりともとおさへて胸はしづめたれ、夜々疑の涙さびしき。

歸り來む御魂と聞かば氷る夜の千夜も御墓の石いだかまし。

（以上登美子）

花のあたり靄き瀧する谷を見ぬ長谷の御寺の有明の月。

今日みちて今日たらひては今日死なむ、明日ゝ昨日よわれに知らぬ名

七たりの美なる人あり、簾して船は御料の蓮きりに行く。

顯よすれば香る息はく石の獅子ふたつ栖むなる夏木立かな

（以上晶子）

兎に角近來の歌集中の白眉にして充分一讀の價値あるものなり。

（定價四十錢）

▲海賊

木村鷹太郎譯
衛友館書店發行

バイロンの詩を譯したるものなり。木村氏はバイロンの愛讀者にしてバイロンに關する諸種の評論及び飜譯あり、今亦此雄大莊嚴なる詩篇の出版あり、其バイロン熱の衰へざる木村氏の主義及び性行の如何を推し得べきなり、總て飜譯は至難の事業なり殊に詩歌の飜譯に至ては至難中の至難なり。詩歌には諧調あり又用語には特殊なる味あり、如何なる飜譯の名手と雖も原文の體をはなれずして此の微妙なる美をうつすこと能はざるなり。木村氏も其飜譯不可能なることを言明し、殆んど散文體を以て其意を傳ふるを主とせられたるが如し、故に此篇より詩的快感を得ることは極めて少しと雖も其意味及び其思想の大體は明瞭なれば木村氏の目的とする所は略は達せられたりといふべし「海賊に就て」の一篇は木村氏の此詩に對する評論なり、製本頗る美、原文の趣を充分に解せざるものには一讀の價値なしとせず。

（定價六十五錢）

▲富の壓制

西川光二郎著
平民社發行

こは著者が過ぎし四年間各所に開きし社會主義演說會に於てなせし演說中の主要なるものゝ筋書を編輯せしものなり。素より筋書を記せる小冊子なれば雄篇大作と稱すべきものを求むべからずと雖も、熱心に社會主義の必要も論じ、且つ種々の方面より社會問題を觀察したるものなれば、有益にして趣味ある記事も少からず、少しく社會の事情に心をなやますものゝ參考となるべし。（定價十錢）

▲東郷大將詳傳

成功臨時增刊
成功雜誌社發行

東郷大將の幼時より今日に至るまでの事蹟を記したるものなり。偉人の傳記は何人にも必要なり、殊に大將の傳記の如き今日の青年の頭腦を刺激し將來の國運に關すること極めて重大なるべし　只其筆詳嚴非凡ならず、彼のサウジーのネルソン傳などしは比較にもならざるは遺憾なりといふべし。（定價二十五錢）

▲武家時代女學叢書壹

梅澤和軒校註
有樂社發行

武家時代に於ける女學に關する著作を蒐集せんとするものなり、其發行の主旨は「靜に内に省みて國粹の眞相を闡發し、採長補短以て日新月

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歩の新日本に貢献せざるべからず、古書の逸散を防ぎ、女學の研鑽に寄與せんとするにあり、第壹編收むる所、阿佛尼の「庭の訓抄」、作者不詳の「乳母の草紙」中江藤樹の「鑑草」上杉鷹山の「老が心」屋代弘賢の「與妻書」江川太郎左衛門の「與新婦書」吉田松陰の「與妹書」、佐久間象山の「女訓」の八篇なり。初め四篇は稍々大部のものなれども後四篇は僅に數頁の片々たるものなり。古の教訓は今日より見て余りに窮屈出來ざる頑固至極のものあれども、今日の如き余りに放恣放埒にならんとする女流にとつては一種の教訓たるを失はず、例へば此書はピットルなり、今の女流は砂糖を食ひ過ぎたる胃病患者なり。ピットルは女流に缺くべからざる食物にはあらざるも胃病患者にとつては少しく之を飲み泥くの必要あり。此書の價値は全く此點にあり。松陰の與妹書は獄中にて記せるもの最も眞情の紙面に溢るゝを見る。（定價三十五錢）

▲世界お伽噺第六十六編 日の罰　岩谷小波篇　博文館發行

附錄「雷の恩」も共に北アメリカの話にして書きぶり例によつて流暢、筋も又なかなかに面白し、小兒の之を讀めば卷を措かず、次編の出づるを待ち遠しとつぶやくも理りなり（定價八錢）

▲ホトヽギス 第八卷第四號　ほとゝぎす發行所

俳壇のオーソリテイ、總々句々皆面白味がある、就中流石の我輩は猫てあるは一風變つた書き振り珍らしく、虚子の非片々文學寫生文の模範たるべく又仝氏の屠蘇に醉ふては新年にあらざれば見るべからざる奇々趣味あること此上なし。（定價三十錢）

▲卯杖 第三卷第一號　秋聲會出版部發行

秋聲會の發行する雜誌なり、一種輕快なる俳味なきにあらずと雖もほとゝぎす的の清新なる趣に乏し、小波春葉の文見るべし（定價十三錢）

編輯錄

▲本誌前號（二十年第一號）例月の發行高より部數頗る多かりしも發行當日を以つて悉く賣切れとなり、其後の御注文は凡て本號を以つて之に代ふるの止むを得ざるに至りしは愛讀者諸君に深謝する處なり、

▲又數年來繼續して購讀せらるゝ地方愛讀者諸君にして本年に入りて御注文ありし爲め御送付し得ざりし向も少からず、かくの如きは本社の特に遺憾とする處茲に特記して之を謝す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雑誌

婦人

本邦唯一の家庭雑誌

平易簡明の婦人雑誌

第一巻第四號（二月一日發行）

定價一部郵税共五錢五厘六部參拾壹錢十二部六拾錢

發刊の辭

男子は今や戰場に出て、辛苦艱難を甞め盡し、骨身を碎いて君國の爲めに竭して居る、婦人は内に在つて只徒らに其日を送つても可いものでせうか

同じ大君の惠に潤ひ、同じ國土に育つた我々は、男女に差別はない、皆それ〴〵の勤がある。此度露國との戰は、我國前古未曾有の大事にして、實に國家安危の係るところ、力あるものは力金あるものは金、弱ければ弱いだけ、貧しければ貧しいだけ、それ相應に働かればならぬ、誰一人として安閑として居ることは出來ないのである、況して日頃有り難き教を受けて居る我々は、尚一入その心懸けがなくてはならぬ

此春我本派本願寺の裏方が身自ら諸國遊説の途に上られたのも、全く此心を全國の婦人に傳へられんが爲めであつた、裏方が其時の御諭示には、先づ其行を正しくして心に佛陀の慈悲を持ち、み國の爲めに働いて居る兵士を慰めるやう、勤儉を主として家を治め、軍國の費を助けるやう、御國の爲めに勵めよとの事であつた、たゞ戰爭の場合だからといふのではない、我大日本帝國の臣民たる以上、たとへ平時でも此心掛がなくてはならぬ、實に裏方の此諭示は婦人として一日も忘れてはならぬ事である

玆に今「婦人」といふ雑誌の生れたのは何の爲めであるか、いふまでもなく此精神を我婦人諸姉にすゝめる爲めである、即ち婦人として婦人たるの義務を竭すべき道を唱導せんが爲めである、而も婦人として婦人たるの義務を竭すには、また一通りの學問も要る、技藝も要る、子供を育てる法も知らればならぬ、家の經濟を整理する法も知らればならぬ、要するに心と手とが伴はればならぬ、本誌は即ち此精神と活動とに就いて諸姉の爲めに此道を講ずるのであります

發行所　東京本郷區駒込西片町十番地　婦人社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること

▲締切は毎月十八日最終便まで

▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

		郵稅共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱 神田千代田町 博報堂

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵券代用の場合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらざれば御需めに應せず

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らざれば其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添へられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四　東海堂
本郷四丁目　文明堂

明治三十八年一月卅一日印刷
明治三十八年二月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門
東京市本郷區駒込西片町十番地

發行所　(電話下谷九一九)　反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●日露戰爭活動寫眞新フイルム

●遼陽總攻撃ノ實況及衞生隊ノ負傷兵收容●我艦隊ヨリ旅順口ニ於ケル敵艦隊砲撃ノ實況●旅順口ニ於ケル敵兵大砲ノ陸揚ケヲナシ之ニ依テ我兵ト砲戰中戰死スル實況●南山附近ニ於ケル我兵野營準備ノ實況●遼陽總攻撃後我兵休養及點呼檢閲ノ實況●南山ニ於ケル我騎兵トコサツク兵ノ衝突●大石橋附近ノ激戰●九連城ノ大激戰●我騎兵及歩兵カ新橋幷ニ品川停車塲出發ノ實況●其他戰爭ニ關スル寫眞十數葉○寫眞ノ長サ五十尺ヨリ五百尺迄各種

○弊店技師藤原幸三郎氏ヲ第○軍從軍寫眞班トシテ戰地ニ派遣シ活動寫眞及幻燈用ノ原版ヲ撮影セリ

●活動寫眞器械

大形金八拾圓ヨリ二百五十圓迄○輕便活動寫眞瓦斯器械共一揃六拾五圓○舶來器械二百圓以上○フイルム一尺四十錢以上

●幻燈器械

○アセチリン瓦斯幻燈二百燭直徑二丈寫四拾貳圓○同一丈五尺寫卅七圓○同一丈一尺寫廿圓●改良石油五本燈一丈五尺寫廿七圓○同二段形卅圓○同一丈三尺寫廿五圓○同一丈寫廿圓○同七尺寫拾圓○同五尺寫五圓

幻燈映畫

●日露戰爭實況幻燈映畫第一回（十二枚一組金貳圓四拾錢）同第貳回（十五枚大形金三圓）同第三回（廿枚四圓）同第四回（廿枚四圓）同第五回（廿枚一組沙河大會戰ヨリ旅順口背面攻撃マデ）●露國ノ軍事（五十枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●露國ノ滿洲經營（五十枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●日本ノ軍艦（五十枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●日本軍艦ノ大砲及艦內（四十五枚）十二枚ニ付貳圓八拾錢●日本ノ將校（二百餘枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●日露戰爭ノ狂畫（二十四枚）十二枚ニ付貳圓拾四錢

●定價表ハ御報次第進呈ス

東京新橋南金六町
電話特新橋三七八

吉澤商店幻燈部

中央公論

No. 191

前號概目

▲注意・右は賣切れに付注文に應ぜず

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可（定價一部十二錢）
明治三十八年二月一日發行（毎月一回）
發行所　東京本郷區西片町十番地　電話下谷九一一九番　反省社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA